
剣と魔法と何でも屋

リース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と魔法と何でも屋

【Nコード】

N9208S

【作者名】

リース

【あらすじ】

完璧そして最強な女子高生、涼海 麗奈と幼馴染、水瀬 結衣が何でも屋を経営する、ほのぼのとしたファンタジー小説。異世界にも支店を出す何でも屋、そしてどこへ行こうとも相変わらず完璧な麗奈の物語。のんびりとした日常を中心に描いています。シリアスな展開は少なく、どなたでもお気軽に読んでいただけたと思います。

ブローグ（前書き）

頑張っ更新していきますのでよろしくお願いします。
ブローグは自己紹介や説明が中心となっています。

ブローグ

ピンポーン

今は朝の七時半。既に身支度を済ませた私が玄関で待っているとチャイムが鳴った。私は鏡で身だしなみを再確認して玄関の扉を開ける。

「麗奈、おはようっ！」

「おっはよ〜」

今日は高校の始業式。私、涼海麗奈すずみれいなと幼稚園の頃からの友人、いわゆる幼馴染の水瀬結衣みづせゆういは挨拶を交わしてから、数日前から私達にとっての新たな通学路となった道を歩き始めた。

暫く歩くと突然、結衣が私の腕に抱きついてきた。艶のある栗色の髪とクリツとした大きな目に私も魅せられてしまう。可愛い……思わず抱きしめたくなくなるけれど、まだ始まって間もない高校生活で変なうわさが流れても困る。残念ではあるけど我慢しよう。

結衣の体温を腕に感じながら二十分程歩くと門が見えてきた。三年前に出来たばかりの新設校だけあって、何もかもが新しい。門を含め敷地内の建物は、とある有名なデザイナーが手掛けたらしく、学校とは思えないほど綺麗。また、その敷地も広大で、大学と比較しても遜色ない規模の蔵書数を誇る図書館や、合唱や各種演奏会はもちろん、様々な催し物に使えるホール等を備えている。

「わあ、綺麗だね〜」

結衣は思わず声をあげる。春になると見事な彩りを見せることで有名な、門から続く桜並木の坂道はちょうど満開を迎えている。私達はそこを抜け、教室へと向かった。途中、真っ黒なスーツに身を包んだ男性がこちらをじっと見ていた気がしたけど、気のせいかな？

私達の教室は二階にあり、私がA組で結衣がB組だ。一緒のクラスになれなかったのは寂しいけど、隣のクラスにはなれたし、ましな方かな。私達は廊下で別れてからそれぞれの教室へ入った。

「おっはよ」

私が扉を開けて挨拶すると、皆が一斉に私の方を見る……非常に気まずい。入学式で一度会っただけだし、さすがにまずかったかな……私は少し赤面しながら自分の席へと向かった。

私が出席番号で決められた自分の席へ着くと、隣の席の木観陽香ちゃんこのみはるかが少し恥ずかしそうにしながらも「おはよう」と、挨拶してくれた。

「おはよう、今日からよろしくね」

私が挨拶を返すと陽香ちゃんが不思議そうな顔をした。

「あれ……？ その……どこかで会ったかな？」

「入学式の日に一度は会っていると思うけれど」

「ああ、そうじゃなくて……えっと、入学式より前に、どこかで会ってないかな？」

「うーん、多分会っていないと思うけど……」

私は記憶力には自信がある。会っていれば忘れることはない筈なのだけど……私が気付いていないだけで、町かどこかですれ違った事があるのかな？

「そ、そうだよね。ごめんね、変なこと聞いて」

「うっん、きにしないで。私が覚えていないだけかもしれないし」

その後も暫く春香ちゃんと話していると、先生が入ってきた。点呼をとってから、皆で体育館へと移動する。体育館で整列して暫くすると校長先生が壇上へと上がり、おそらく全国共通であろう長い話を始める。皆の眠気がかなり高まってきた頃、始業式は終わり、その後のホームルームもつつがなく終わった。待ち合わせをしていた結衣と共に家へと帰る。

授業がないとはいえ、知り合って間もない人たちと居たから流石に疲れていたのだろう。普段と比べて二時間も早くベッドへ入った。

翌朝、昨日と同じ時間に結衣が迎えに来てくれる。今日も二人で登校すると、昨日とまったく同じ場所にまたもスーツを着た男性が立っていた。少し気にはなったけど、声をかけるほどではないと思いい教室へと向かった。

今日から授業が始まる。記念すべき高校生活最初の授業は体育。体育においてはA組とB組が合同で行うため、私は結衣の体操着姿を見られる事を心の中で喜びつつ、着替えを済ませて体育館へと向かった。もしかしたら少し顔がにやけていたかもしれない。

「今日は初日だし、皆と仲良くなってもらうためにバレーボールの試合をする。試合といっても今日は遊びみたいなものだ。気楽にするといい」

そう言って先生は出席をとってから、六人のチームを作らせた。もちろん、私と結衣は一緒のチームになった。

「よし、一応チームは出来たな。それじゃあAコートで一番と二番、Bコートで三番と四番、Cコートで五番と六番のチームの試合をする。まあ仲よくするようにな」

そう言って先生は、それぞれのチームが準備できたことを確認し、試合開始のホイッスルを鳴らした。

「麗奈、お願い！」

相手のサーブを結衣が見事にトスする。

「うん、任せて！」

私は頭上二メートルのところにあるボールへ軽く跳躍する。身体を弓の様にしならせて刹那、相手のコートへと強烈なスパイクを叩

き込んだ。

相手のチームはボールを目で追えなかったようで、暫くしてから皆が騒ぎ出した。

「い、今のは一体!？」

「今スパイクを打ったのつて、確か涼海さんだったよね？」

「こ、怖かった……」

ボールの叩きつけられたすぐ横に居た子が目に涙を浮かべている。少しやりすぎたかな……。

その後、バレー部の顧問もしている体育の先生に、入部しないかと誘われたり、皆に色々と聞かれたりで試合にならなかった。

それからの授業でも、数学の先生が試しに持ってきた大学の入試問題を解いたりしたことで、クラスで話題になってしまった。もつとも、そのおかげで皆と気軽に話すことが出来るようになったから、悪いことではないと思う。

放課後、今日は結衣がクラスの子に誘われてクラブの見学に行っているの、仕方なく一人で帰ることになった。私は両親が既に他界してしまっているため、自分でお金を稼ぐ必要がある。残念だけどクラブに入る時間はない。仕事といっても、株取引をしているだけなんだけどね。しかし、最近株にも飽きてきた。何か新しいことしたいな。株である程度貯めたし、何か自分で始めるのも良いかもしれない。

そんな事を考えながら歩いているうちに家に着いた。

「ただいま」

当然のことながら返事はない。慣れてはいるけど、やっぱり少し寂しい。

私は部屋に荷物を置いて一息つくと、お風呂へ入った。それから

簡単に夕食を済ませる。

今日は皆とよく話したせいで昨日以上に疲れていた。今日も早めに寝ようと思い、明日の時間割を確認してからベッドへ入る。

少しの間結衣とメールしてから、目を閉じた。

プロローグ（後書き）

感想やレビューなどを頂けると小説を書く上で非常に参考になります。

よろしければお願いいたします。

第1話 未だ見ぬ父よりプレゼント

「っうーん」

ジリリリリ

目覚まし時計の鳴る五秒前、私は目が覚めた。いつからだろう、目覚まし時計より少し早く起きるようになったのは。年に数回は目覚ましに起こされるけど、その時はなんだか負けた気がして少し悔しい。

ベッドの上で軽く伸びをして、ふと横を見る。

「誰！？ あれ、あなたは……」

ベッドの横で私を見下ろすように男性が一人立っていた。最近少し気になっていた人、学校でいつも私の方を見ていた黒のスーツに身を包んだ男性だ。特に危害を加えてくる様子はない。

「どうしてあなたがここに？」

何とか気持ちを落ち着けて私は男性に尋ねた。

「貴女様、いえ麗奈様は高校生になりました」

「……え？」

男性は私の質問に対しておもむろに話し始めた。それにしても何を言っているのだろう。私が高校生になったことがどうしたというのか。私は無意識のうちに怪訝な表情を浮かべていたようで、男性はあわてて付け足した。

「私はクロノス様、麗奈様のお父上の命によって参りました」

バサッ！

「貴女は私のお父さんの事を知っているのっ!？」

私は思わずベッドから身を乗り出した。身を乗り出さずにはいられない。私はお父さんの事を何も知らない。物心ついたときには既

にいなかった。お母さんに聞いても何も教えてくれなかった。いずれ話してくれると言っていたが、そのお母さんも一昨年に交通事故で他界してしまい、結局お父さんについて聞くことはできなかった。そのお父さんに言われてここへ来たのだと、目の前の男性は言った。

私は気付けば男性の肩を掴んでしまっていたようで、男性は戸惑っていた。私は慌てて手を離す。

「ご、ごめんなさい……えっと、私のお父さんに言われて来たんだよね」

「はい。時の神である麗奈様のお父上、クロノス様の命を受けてまいました」

「え？」

私の聞き間違いでなければ、今この男性は神と言った。それも、私のお父さんの事を。私はさぞ間の抜けた顔をしているだろう。しかし、そんなことを意に介せず男性は続ける。

「これからお話しすることは全て事実です。どうか最後までお聞きください」

男性の表情は真面目そのもの。ふざけている様子は全くない。

「分かった」

「先ほど申し上げました通り、麗奈様のお父上は時を司る神、クロノス様です。さほど有名ではございませんが、こちらの世界でもギリシア神話に記されております。私が今回麗奈様の前に現れたのは、クロノス様からお預かりした神能をお渡しするためです。麗奈様が高校生になられたときにお渡しするよう仰せつかっておりました」

「神能、それは一体……」

「今から私の言う言葉を復唱してください。麗奈様の好きな場所を思い浮かべながら」

「復唱ね。分かった」

「TO TIME OF THE PAST」

『TO TIME OF THE PAST』

「LEAD ME」
「LEAD ME」

男性の言葉を間違えないよう復唱する。最後の言葉を発した瞬間、視界が真っ暗になる。

視界が開けて、次に私の目に入ったのは結衣の部屋だった。復唱しながら思い浮かべていた私の好きな場所、これまで何度も見たピントを基調としたぬいぐるみのたくさんある部屋。間違いなく結衣の部屋だ。豆電球の明かりの中、結衣が規則正しい寝息を立てている。非常に可愛い。

「これは一体……」

「麗奈様、これが神能です。麗奈様は時間と場所を移動されたのです」

「時間を!？」

「はい。今は麗奈様が先ほどおられた時間の五時間前あたりです」
先ほどまで居た自分の部屋から結衣の部屋へ移動しただけでも信じられないくらいなのに、時間まで移動するなんて……。

「すごいっ、すごいよっ!」

「んっ、むにゃ……」

結衣が寝返りを打つ。ここが結衣の部屋だということを忘れていた。私は声をひそめる。

「どこでも好きなところに行けるの?」

「はい。今回は私の方で時間を決めさせていただきましたが、麗奈様の好きな時間へ、過去へも未来へも行くことができます」

「信じられない、夢みたい……」

「夢ではございませんよ。今後この神能をどのように使われるも麗奈様の自由です。クロノス様は『可愛い娘へ高校の入学祝いだ』と

仰っておりますた」

「お父さん……」

私は心の中でお父さんへ感謝の言葉を伝えた。きっと聞こえているはず。

「さて、そろそろ戻りましょう」

「戻る時はどうすればいいの？」

「戻りたいという思いを込めて『RETURN』と言ってください」
「ん、分かった」

『RETURN』

「やっぱり凄い……」

私達は部屋へと戻ってきた。外も明るい。

「それでは、私は役目を果たしましたので、これで失礼させていただきます」

そう言って男性は頭を下げた。

「待つて」

「どうされましたか？」

「貴方の名前を教えて」

「これは大変失礼いたしました。私はクロノス様の使い魔でエルクと申します」

「エルクさんだね。良かったらお父さんによろしく伝えておいてくれないかな」

「畏まりました。必ずお伝えいたします」

「ありがとう」

そうしてエルクさんが何言か囁くと身体が徐々に消えていく。

「またお会いすることもあるでしょう。その時はゆっくりとお話したいものです」

「お父さんの話聞かせてね」

「はい。それではまたいつか」
そう言ってエルクさんの姿は完全に消えた。

言い忘れておりました

「わっ」

消えたはずのエルクさんの声が聞こえる。私は思わず声をあげてしまった。

驚かせてしまい申し訳ございません。お伝えし忘れたことがございます。先ほど麗奈様が詠唱された呪文は過去へ行くためのものです。未来へ行く際は『TO TIME OF FUTURE LEAD ME』場所のみで時間を移動されない場合は『NOW TRANSFER』と詠唱してください
「分かった」

また、この神能は時間と場所を移動する他に、麗奈様のおられる世界と並行して存在する無数の世界へと移動することができます
「そんなことができるの？」

はい。ただ、他の世界へと移動するためには、移動する先の世界に関わる物が必要となります。そういった異世界に関わるものは今の麗奈様が見れば一目でわかるはずです。お伝えし忘れたことは以上です。それでは今度こそ失礼いたします

それからエルクさんの声は聞こえなくなりました。

その後、何度か家の中を神能を使って移動してみた。先ほどまではいまいち実感がわいていなかったけど、こうして使ってみると改めて凄いと思う。まさか高校生になって、こんなサプライズがあるなんて思ってもいなかったな。

ふと時計を見ると、そろそろ準備をしないと学校に間に合わない。私は急いで準備を済ませる。

ピンポン

七時半。いつも通りに結衣が迎えに来てくれる。

「おはよう、麗奈」

「おはよう」

挨拶を交わしてから、二人並んで歩き始める。

「ん？ 何か良いことでもあったの？ 楽しそうな顔をしているけど」

「実はね、結衣に凄いものを見せてあげようと思って」

「なになに？」

「よく見ててね」

『NOW TRANSFER』

第2話 仕事をしたい

『NOW TRANSFER』

「あれ……麗奈？ どこ行つたの!？」

結衣は何が起こつたのか把握できず混乱している。私は元居た場所から十メートル程離れた場所へ移動した。

「結衣、こつちだよー」

私は手を振りながら結衣へ声をかける。

「え？ 麗奈？ 今ここに……あれ？ ……っうん」

結衣は私が元居た場所と私の方を交互に見た後、倒れた。

「結衣っ!」

私は結衣が倒れたのを見て急いで駆け寄つた。結衣は混乱しすぎて目を回している。ごめんね。

声をかけても反応しない。私の部屋へ結衣を運び、ベッドへと寝かせた。

「っつ、あれ？ 麗奈の部屋？ どうして？」

十分程して気がついた結衣は、状況が飲み込めずにキョロキョロしている。

「気付いた？ ごめんね、いきなり驚かせてしまつて」

「そういえば……麗奈さつき消えたよね？ あれは一体どういふことなの？ 何があつたの？」

「順番に説明するから、落ち着いて聞いてね」

「うん、分かつた」

結衣はそう言つてベッドの上で体を起こす。

私は自分の父親が神であること、高校生になつて神能をもらった

こと、そして神能がどういったものであるかを結衣に説明した。

「嘘、じゃないんだよね？」

「うん、全部本当の事だよ」

「そっか……麗奈は神様になっちゃったんだね……」

「いや、私が神様になっただけじゃないよ？ お父さんは神様だけで、神能をもらっただけで、私は私だよ」

「そっか、それじゃあいつもの麗奈なんだね？」

「うん、そういうこと」

「それにしても神能かあ。夢みたいな話だよ」

「でもそれが夢じゃないんだよね……そうだ、実際に一度体感して見ればいいんじゃないかな」

「私が、ってこと？」

「うん、今から学校へ飛んでみよう」

今から普通に学校へ行っても間に合わない。試してみるにはちょっといいと思う。

「学校へ？ 誰かに見られたりしないかな？」

「今の時間なら、皆教室に居るだろうし、見つかりにくい場所なら大丈夫だよ」

「えっと……それなら私はどうすればいいの？」

「普通に学校へ行く準備をしてくれるだけでいいよ。靴もはいてね」

靴を履き、荷物も持った結衣は不安そうに私の手を握る。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だって。それじゃあ行くね？」

『NOW TRANSFER』

私達は学校の裏庭へ出た。予想していた通り人の姿はない。

「信じられない……」

「ね、本当でしょう？」

「うん……何と言葉にしていかわからないけど、凄いね……」

「私も最初は夢じゃないかと思ったよ」

キンコンカーンコン

「あ、麗奈予鈴だよ！」

「急がないと」

教室へ大急ぎで走る。学校が広いだけあって裏庭からでもかなりの距離がある。私達は本鈴の鳴る少し前に教室へ入った。

「おはよう、寝坊でもしたの？ 随分と走ってきたみたいけど」

「あはは。うーん、そんなところかな」

「あの先生遅刻には厳しそうだもんね」

「そついえば昨日も遅刻した子が怒られてたよね」

「そうそう、数分遅れたただだったのに可愛そう。まあ、遅れたから仕方ないんだけど」

「起立！」

陽香ちゃんと話していると先生が入ってきた。初日の時点でこの先生が厳しいことは皆が分かっているのか、先生が教壇へ上がるとそれまで騒がしかった教室が一気に静かになった。

放課後、いつも通り結衣と廊下で待ち合わせる。今日はクラブ見学へは行かないらしい。

「お待たせ。帰ろっか」

「うん」

適当に雑談しながら歩いていると私の家の前まで来た。

「そついえば結衣」

「ん、どうしたの？」

「今日、時間ある？」

「うん、特に予定はないよ」

「それなら、帰ったら私の家に来てくれないかな？ ちょっと話したいことがあって」

「分かった、着替えたら行くね」
「それじゃあ、またあとでね」

ピンポン

部屋で着替えて暫くするとチャイムが鳴った。

「来たよ」

「いらっしやい、部屋で待つて」

私は一階で飲み物とお菓子を用意して部屋へ戻った。結衣はソファに腰掛けて足をブラブラしている。

「結衣は午前の紅茶でいいよね？」

「ありがとう。やっぱりこれだよ」

結衣は子供のころから午前の紅茶が大好きで、本人曰く喫茶店で飲む紅茶よりも美味しいらしい。

「ふふふ、相変わらずだね」

「美味しいから良いの……そういえば話があるんだよね？」

「そう。それなんだけど、何か仕事をしようと思って」

「仕事？」

「うん。これまでは株でお金を稼いでいたんだけど、なんだか飽きちゃってね」

「どんな仕事かしたいとか、ある程度は考えてあるの？」

「それが、これまで株以外には仕事という仕事をしたことがなくて、まだ何も思いついていないの」

「アルバイトとかではないんだよね？」

「それも考えたんだけど、やっぱり何か自分でしてみたいな、と思ってる」

「何か始める……うーん難しいな」

「とりあえず、何を始めるにしてもお金は必要だと思うから、それに関しては株で貯めたお金を使うつもり」

「ちなみに、いくら位あるの？」

「うーん、六千万位かな」

「え、六千万!？」

結衣はキョトンとしている。

「うん、それくらいあるよ」

「ほえ、私なんか百万も持ったことないよ」

「昔貯めたお年玉で始めたんだけど、かなり順調にいつてね」

「さすがは麗奈だね……でも、それなら特に仕事をする必要無いと思うけど」

「さつきも言っただけど飽きちゃって」

「あはは……うん、やっぱり麗奈は変わってるよね。まあ、私は麗奈のそういうところが好きなんだけど」

「ありがとう。私も結衣の事が好きだよ」

「えへへ、なんだか照れちゃうな」

「結衣の全てが愛おしくて、もうなんて言ったらいいか……」

「麗奈ストップ! 外はまだ明るいよ? それに今は何をするか考えるんでしょ?」

「むう、冗談だってば」

「目は真剣だったけどね」

「あははは……」

やっぱり結衣の可愛さは反則だと思う。今も頬を少し赤らめて非常に可愛い。

「それにしても、何か仕事か……? そういえば麗奈には神能があるんだし、それを使って宅配なんてどうかな?」

「宅配か、確かに神能を使えば簡単にできそうだけど、ありきたりな気がする。それに仕事も単純で面白くなさそう」

「そう言われても……麗奈なら何でもできるとは思っただけど、具体的に何をするかと言われると難しいな」

ん? ……何でも?

「あ、それだ」

「え?」

「何でも出来るんだよ」

「うん、麗奈なら出来ると思うよ」

「それなら何でもすればいいと思う」

「何でもするって、そんな仕事あるかな？」

「それがあるんだよ」

どうしてこんなに良い仕事を思いつかなかったのだろう。

「うーん……そんなに都合のいい仕事なんてあるのかな？」

何でも出来る私にぴったりの仕事。無くし物探しから、それこそ宅配まで文字通り何でもする仕事が……。

「何でも屋……何でも屋を始める！」

第3話 何でも屋開業準備1

「何でも屋？」

「そう、何でも屋」

「そうか、何でも屋か」

「そうそう何でも屋」

「で、何でも屋って何？」

私は思わずソファからずり落ちてしまった。

「えーっと、何でも屋というのはお客さんの依頼を受けて、その依頼をこなす仕事だよ」

「どんな依頼でもいいの？」

「さすがに犯罪はだめだけど、そういったもの以外なら、さつき結衣が言った宅配でもいいし、迷子の猫を探したりなんかもするよ」

「うん、それいいかも。麗奈に出来ないことなんてないし、色々なことが出来て楽しそう。良いんじゃないかな」

「でしょう？」

「それじゃあ次は職場だね。どうするの？」

「それなんだけど、折角だし綺麗なオフィスがいいな」

早くも頭の中には黒革の椅子に腰をかける私と、コーヒーを入れてくれる秘書の姿が浮かんでいる。その秘書はもちろん結衣。

「オフィス！？ いきなり凄いな……」

「えへへ、やるからには本格的にいかないかね」

「さすがは麗奈というかなんというか……えっと、どこにオフィスを借りるつもりなの？」

「どこがいいかな？ いや、作ればいいか。うん、作っちゃおう」

私はウンウンと頷く。それを聞いた結衣は愕然としている。

「オフィスを作る……の！？」

「うん、そうだよ」

「もしかしてビルでも建てるつもり？」

「いや、さすがにそれはないよ。ほら、まだ庭は少し余裕あるから、そこにオフィスを作ればいいかなって」

私の家は特別広いというわけではないけど、庭にはまだ少し余裕がある。今は誰も使っていない和室を広げれば、オフィス一つくらいは何とか作れると思う。

「あ、それなら確かに出来そうかも」

「そうと決まれば早速行動しよう」

「えーと、そうするとまずはリフォームだね。どこに依頼するか決めないと」

「それじゃあ結衣はリフォームを依頼する業者さんを調べてくれる？ 私は必要な物とかリストアップしていくから」

「分かった。パソコン借りるね」

事務用品から椅子や机といった家具まで、何でも屋に必要になりそうなものをメモへと書いていく。

「結衣、どう？ 見つかった？」

「何軒が見つかったからメモしておいたよ」

「ありがとう。私の方も思いつくものは一通り書いたよ」

「それにしても、どこがいいのか？」

「ホームページ見せてくれる？」

結衣がリストアップしたお店のホームページを順番に見ていく。

「あ、ここにしよう」

「ん、木観工務店？ どうしてここに決めたの？」

「ほら、この社長のおじさんの顔が優しそうだから」

「え、そんなので決めていいの？」

「いいのいいの、ここにしよう」

「麗奈がそう言うなら私は構わないけど」

「それじゃあ早速依頼しに行こう」

「地図を印刷するから少し待って」

家を出て十分程歩くと看板が見えてきた。町の工務店といった雰囲気のお店で、それほど大きくはない。

「ここだね」

「お店の雰囲気も悪くないし、正解だったね。早速入ろう」

「いらつしやいませ」

私達がお店に入ると女の子が応対してくれた。

「あれ！？ 陽香ちゃん？」

「あつ、涼海さん」

「ん、麗奈の知り合い？」

「うん、同じクラスで隣の席だよ。木観……同じ名前だとは思っていたけど、まさか陽香ちゃんの家だったとは」

「ほえ、すごい偶然だね」

「おや、娘の御友人ですか？」

驚いていると奥からホームページで見た優しそうな男性が出てきた。陽香ちゃんのお父さんだったとは………そういえば、どこことなく似ている気もする。

「はい。同じクラスの涼海麗奈です。いつも陽香ちゃんには仲よくしてもらっています」

「私は隣のクラスの水瀬結衣です」

「ははは、もつと氣を楽にしてください。それで、本日は遊びに来られたのですか？」

「いえ、リフォームをお願いしたいと思ひまして」

「えっ！ 涼海さんリフォームするの？」

「うん、オフィスを作ろうと思って」

「お客様でしたか。これは失礼いたしました。奥へどうぞ、お話はそちらで。陽香、お茶を」

私達は奥の応接室へ案内された。ソファへ腰かけると陽香ちゃんがお茶を持ってきてくれた。

「ありがとう」

「まさか、涼海さんがリフォームに来るなんて思ってもいなかったよ」

「私も陽香ちゃんの所だったなんてびっくりしたよ」

「こら陽香、お友達とはいえお客様なんだから出ていなさい」

「はい……。それじゃあ涼海さんまたね」

陽香ちゃんはお父さんに怒られて部屋を出て行った。

「失礼いたしました。さて、リフォームの件ですが、先程お聞きしましたようにオフィスですか？」

「はい、一階の和室から庭へと十五畳程の大きさで」
家の簡単な見取り図を描いて説明する。

「なるほど、大体わかりました。後は下見をしてから細かい所をお聞きいたします。ご都合がよろしければ今からでも下見に行きたいのですが」

「はい、問題ありません。よろしく願います」

お店を出た私達はおじさんの車に乗せてもらい、私の家へと移動した。

「それでは、少し見せていただきます」

そう言っておじさんは柱の位置や庭の広さ、和室の場所などを確認していく。三十分程でそれは終わった。

「いかがでしょうか？」

「ええ、問題なさそうです。料金など細かいことに関してはこれから戻って出しますので、そうですね……三日後に店の方へ来ていただけますか？」

「分かりました。よろしく願います」

「では、本日はこれで失礼いたします」

おじさんはそう言くと車に乗って帰って行った。

三日後、いつも通り放課後に廊下で結衣と待ち合わせをして、そのまま家に帰らず木観工務店へと向かう。

「今日見積もりが出るんだよね。いくら位かな？」

「一五〇〇万位だと思うけど、どうだろう」

「それにしても楽しみだよね。麗奈がお店かゝ、きつと大繁盛だね」
「そうだといいいけど……そういえば結衣に言わないといけないことがあるの」

「ん、なに？」

「えっと、お店なんだけど、その、良かつたら結衣も手伝ってくれないかな……」

「いいよ？」

「え？ いいの？ 遊ぶ時間とか無くなっちゃうと思うけど」
想像以上にすんなりと了承してくれたから少し戸惑う。

「私と一緒にしたいんじゃないの？」

「それはそうなんだけど、もう少し悩むと思っていたから」

「麗奈と一緒に居られるんでしょう？ 断る理由がないよ。それに実は、私からお願いしようと思っていたの」

「あ、そうだったんだ。あはは、まさか同じことを思っていたなんて」

「それにしても安心したよ。もしお願いして、断られたらどうしようと思っていたから」

「私が結衣のお願いを断るわけないでしょ？」

「えへへ、ありがとう」

そうして結衣と話しながら歩いていると木観工務店へと着いた。前回と同じ応接室へと案内される。

「少々お待ち下さい」

そう言って部屋を出たおじさんは、暫くすると、お茶を持って戻ってきた。今日は陽香ちゃんが居ないのかな。

「では早速ですが、リフォームに関してはこのようになりました」

おじさんが数枚の書類を渡してくれる。

「施工期間は二週間で、費用の方は一一〇〇万円になります。いかがでしょうか？」

「はい、問題ありません」

「それではこちらの書類に記入と印鑑をお願いします」

私はおじさんの差し出した書類に必要事項を記入して捺印した。

「ありがとうございます。それでは早速明日から工事を始めさせていただきます。暫くの間、騒がしいと思いますが、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

そう言って私達は店を出た。

第4話 何でも屋開業準備2

リフォームの依頼をした私達は途中、夕食の買い物をしてから家へと帰ってきた。

「ただいま」

「おじゃましまーす」

結衣の両親が今日から出張らしく、暫くの間私の家に泊まることになった。

「いつもごめんね。お邪魔しちゃって」

結衣の両親は同じ会社で働いている。部署も同じで、こうして二人揃って出張へ行くことも珍しくない。だからこうして泊まりに来ることもよくある。

「気にしないで。私としても結衣が泊まりに来てくれるのは嬉しいし」

「えへへ、ありがとう」

「さて、とりあえず夕食の用意を済ませちゃおう」

「オツケー、私は何をすればいいかな？」

「それじゃあ……お米研いでくれる？」

「分かった」

今日の夕食は筍ご飯とお味噌汁、そしてほうれん草のおひたし。結衣のリクエストを最大限取り入れた結果こうなった。

「よし、後はご飯が炊きあがるのを待つだけだね」

「どうしよっか？ 一時間くらいかかるけど」

「うーん、先にお風呂入ろうか」

「それじゃあ着替え用意してくるね」

「なら、私は先に入ってるよ」

私は脱いだ服を洗濯機へほうり込んでお風呂へ入る。結衣と一緒に
にお風呂……なんて幸せなんだろう。

ガララ

私が身体を簡単に流してから浴槽に浸かっていると結衣が入ってきた。結衣を見つめてしまう。

「そんなに见ないでよ」

「ごめん。ついつい……」

「仕方ないな」

「結衣が可愛いからいけないんだよ」

「え、私が悪いの？」

「うん、結衣が悪い」

「そうなのかな？」

「そうなの」

「むう、そういうことにしておく」

「それでよろしい」

私は結衣と交代して身体を洗う。

「そういえば、今回の出張はどれくらいなの？」

「たしか、二ヶ月くらいかな」

「そっか、えへへ」

「ん、どうしたの？」

「いや、結衣と一緒に居られると思うと嬉しくて」

「私も麗奈と一緒に居られるのは嬉しいな」

そう言つて結衣は頬を少し赤らめる。単純にお風呂に入っているから、なのかもしれないけど可愛い。

「お待たせ、ここに座つて」

頭と体を洗い終えた私は結衣の背中を流してあげることにした。

「やっぱり、誰かに洗ってもらつと気持ちいいよね」

結衣はご満悦の様子。背中を流していると思わず後ろから抱き締めたくなるけど、それは何とか抑え込む。

「それじゃあ次は頭ね」

結局、一時間程お風呂に入っていた。さすがに二人とものぼせかけている。

「なんていうか、今ならお風呂上りにビールをグイッといくお父さんの気持ちが分かるよ……」

「ちよつと長湯しすぎたね……」

とりあえず服を着てから食事の用意をする。筍ご飯もおいしそうに炊けていた。

「さて、食べよつか。いただきますーす」

「いただきますーす」

私達は席について真っ先にグラスへと手を伸ばした。

食後、片づけをしてから私の部屋へ戻った。特にすることもなく二人でベッドに入ってボーっとしている。

「ふふっ」

「ん？ 結衣、どうしたの急に？」

「そういえばお母さんが驚いたな〜って思ってた」

「なんのこと？」

「えっとね、私が麗奈の家に初めて泊まってその次の日なんだけどね」

「何かあったっけ？」

「ほら、麗奈は寝るときは何も着ないでしょ？」

「うん、寝るときに何か着ていると落ち着かないから」

「麗奈が解放感があって良いって言うから、帰って私も服を着ずに寝てみたの。そしたら、部屋に入ってきたお母さんが驚いてね〜」

「それは……普通は驚くと思うよ……」

「今はもう慣れたみたいで何も言わないけどね」

いつの間にか結衣も服を着ずに寝るようになっていたと思ったら、私のせいだったのか……。結衣のお母さんごめんなさい。

翌朝、先に目が覚めた私は動けずにいた。私も結衣も、寝るときは抱き癖がある。今まさに結衣に思いきりしがみつかれていて身動きが取れない。起こすのもかわいそうだし……。

「奈、麗奈、そろそろ時間だよ」

「……え？」

「ほら、一〇時に工事の人が来るんでしょ？ そろそろ起きないと」

「あ、私寝ちゃってんだ……」

どうやら身動きが取れないままじっとしている内に寝てしまっていたみたい。

「今何時？」

「九時半だよ」

「九時半か……ご飯作る時間はないね」

「どうする？ どこか食べに行く？」

「そうしよつか。とりあえず、顔洗ってくるね」

ベッドから出た私は服を着て顔を洗い身支度を整える。

ピンポン

チャイムが鳴った。

「おはようございます。これから騒がしくなりますが、よろしくお願いします。それでは早速取りかかせていただきますね」

陽香ちゃんのお父さんの後ろに作業服を着た人たちが数人いる。

「はい。よろしく願います。この後、少し出かけようと思うのですが構わないでしょうか？」

「大丈夫ですよ。貴重品等の管理は願います」

部屋に戻って準備を整えた私達はとりあえず駅前へと行くことにした。家を出ようとすると、そこへ陽香ちゃんが来た。

「おはよう。涼海さん、水瀬さん」

「おはよう」

「おはよう、どうしたの？」

「暇だったから、見に来ただけど……どこか行くの？」

「これから、麗奈と朝ごはん食べに行くんだよ」

「陽香ちゃんも来る？」

「それじゃあ、一緒にさせてもらおうかな。このままここに居てもお父さんに怒られるだけだろうし」

そう言つて陽香ちゃんは苦笑する。陽香ちゃんを加えて三人になった私達は駅前へのんびり歩き始めた。

「そつえば、何食べる？」

「木観さんは何か食べたいものある？」

「私はさつき食べたから何でもいいよ」

「結衣は何かないの？」

「それじゃあ、サンドイッチがいいな」

「サンドイッチか。どこかいいお店ないかな？」

「あ、サンドイッチだったら駅前からは少し離れるけど、この前出来たカフェがおいしいよ」

陽香ちゃんによると、BLTサンドがとても美味しいらしい。

「うん、そこにしよう。陽香ちゃん連れて行ってくれる？」

「任せて。離れていると言つてもここから二〇分くらいだからそこまで遠くはないよ」

「わ、凄い人だね」

陽香ちゃんが連れてきてくれたカフェは、駅から一キロ程離れた閑静な住宅街にあった。

「人気のお店だからね。とりあえず何処か席を探さないと……」

「あそこが空いてるみたいだよ」

結衣がテラス席を指差す。

「それじゃあ席をとっておくね。アイスコーヒーお願いしていいか

な？」

「オツケー、それじゃあ買ってくるね」

陽香ちゃんからお金を受け取って私と結衣は店内へと入った。B
LTサンドのセットを二つとアイスコーヒーを注文して席へ戻る。

「お待たせ」

「どう、BLTサンドあった？ 人気だからすぐに売り切れるんだ
けど」

「あ、そうだったんだ。うん、二つ買ってきたよ」

私と結衣は買ってきた物を置いて席へ着く。結衣が早速BLTサ
ンドを頬張る。

「美味しーい」

「でしょう？」

「いくつでも食べられる気がする。この人の多さも納得だね」

あつという間に平らげた私達はその後、一時間程お喋りしてから
お店を出た。

「そういえばリフォームだけど、オフィスを作ってどうするの？」

帰り道、歩きながら陽香ちゃんが尋ねる。

「ああ、お店を始めようと思って」

「お店？」

「そう、何でも屋をするの」

「何でも屋……どんなお店？」

「あ、やっぱりそうだよね」

結衣が陽香ちゃんに共感している。

「文字通り何でもするお店だよ。お客さんの依頼を受けてそれをす
るの。例えば無くし物探しとか」

「そうなんだ……それにしても凄いな……」

「そうかな？」

「うん、だって自分でお店を開こうなんて普通思わないよ」

「ほら、麗奈は変わってるから」

「結衣、それはどういう意味かな？」

「もちろん良い意味だよ」

そう言って結衣はクスクスと笑う。

「もう……でもまあ、自分でも変わっているとは思うけどね」

「それにしても涼海さんも水瀬さんも仲がとっても仲良いよね。恋人みたいにも見えるよ」

「そりゃあ私と結衣だもん」

「私と麗奈だもん」

「あはは、やっぱり仲良いね」

「ところで、陽香ちゃんはこの後どうするの？」

「今日はお昼から用事があるからこのまま帰ろうかな」

「そっか」。結衣、私達はどうする？」

「特に予定ないし、適当にのんびり？」

「そうしよっか」

「そうそう、良かったらメルアドおしえてくれない？」

「もちろん良いよ」

「うんうん」

赤外線でお互いのアドレスを交換する。

「ありがとう——あ、私こっちだから。またメールでもするね」

「うん、それじゃあまたね」

「ばいばーい」

陽香ちゃんと別れて家に戻ると、工事が始まっていた。陽香ちゃんのお父さんの指示を出す声が聞こえる。邪魔にならないように部屋へと戻った。

結局、その後は特にすることも無く、陽香ちゃんとメールをした。り、結衣とのんびり過ごした。

第5話 何でも屋開業準備3

家のリフォームが始まってから十日が経った。オフィスも外から見てわかるくらい形になってきている。

放課後、いつものように廊下で待ち合わせた私達は何でも屋に必要な物を買うため駅前に来ている。

「まずは何を買うの？」

「えっと……文房具類だよ」

私はメモを見ながら応える。

「それなら文房具屋さんだね」

「うん、特に変わったものは必要ないし、このお店でそろうと思うよ」

私達は駅前のそれほど大きくない文房具屋へと入る。ペンや定規など適当に必要なになりそうなものをカゴへ放りこんでいく。

「ねえ、麗奈。定規とか持つてるんじゃないの？」

「ああ、それはそうだけど……ほら、折角だから新しいのが良いなっと思って」

新しくお店を始めるのだから道具も全部新しい方が気分が良いよね。

「まあ、なんとなくわかる気がする」

「でしょ？」

文房具を買い揃えた後、私の家へ一度戻り、荷物を置く。

「そつえば結衣はどんな椅子が良いと思う？」

港の近くにある輸入家具専門へと向かうタクシーの中で、私は結衣に聞いた。

「椅子か、やっぱり革張りが良いんじゃないかな」

「あ、結衣もそう思う？ 私も革が良いかなって思ってたの」

「うん。お洒落だし、それになんだか雰囲気があって良いと思うよ」

「それじゃあ、椅子は革で決定だね」

「そうだね。まあ、もっと良いのがお店にあれば別だけどね」

「それもそっか」

タクシーに乗ること二十分。家具屋へ着いた私達は、店員さんに案内されて店内を見て回る。

「あつ、結衣見て。あれなんかいいんじゃないかな？」

「どれ？」

「ほら、あの椅子。言つてたみたいに革張りだし、それに座り心地もよさそうじゃない？」

「イメージにぴったりだね。座つてみようよ」

私は途中で見かけた、黒革のデスクチェアに腰をかける。

「うん、やっぱり座り心地も良い感じ」

「それじゃあこれにする？」

「うん、これに決定！」

その後も机や本棚等を見て回り、オフィスに置く家具を買いそろえた。今日買った物は全部、リフォームが完了する日に配達してもらうことにした。

「もうこんな時間だね」

「さすがに、これから帰って作るのも面倒だし、どこかで食べて帰ろう」

「それが良いね」

家具屋さんでゆっくりと見ていたため、店を出たときには随分と遅くなっていた。私達は途中で夕食をとってから家へと戻った。

「ただいま」

「ただいま……ふわあ」

結衣があくびをしている。放課後もずっと出かけていたし眠たいよね。私も今日は疲れていたもので、二人で簡単にシャワーを浴びて寝ることにした。

四日後、ついにリフォームが終わる日だ。朝食を済ませた私達は、部屋で明日から開業する何でも屋について話していた。

「ねえ結衣、どうすればいいかな？」

「ん、何が？」

「ほら、何でも屋だけお客さん来てくれるかなって」

「さすがに、最初のうちは少ないと思うけれど、だんだん増えてくるんじゃないかな？」

「そうだといいいけれど……」

「とりあえず、何でも屋の事を知ってもらわないと始まらないね」

「どうするのが良いかな？」

「やっぱり広告が良いと思うよ」

「広告か、よし、それじゃ早速作ろう」

「オッケー、それじゃあまずはお店の名前だね。何にする？」

「そう言って結衣はパソコンの電源をつける。」

「ああ、それならもう考えてあるよ。ラクスなんてどうかな？」

「ラクス……響きは悪くないけれどどういう意味なの？」

「ラテン語で湖っていう意味だよ。お互いの名字から水瀬の水と涼海の海を合わせて水海にしたんだけど……」

「なるほど……良いんじゃないかな」

「えへへ、それじゃあラクスに決定ね」

早速結衣がお店の名前を打ち込む。

「後は料金だけどうする？」

「うーん……依頼内容にもよるし、依頼時に相談で。あと、お金以外でも可って書いておいて」

「ちよっと待ってね……よし、出来た！これでどうかかな？」

結衣がパソコンのディスプレイをこちらに向ける。

「おーっ！さすが結衣だね。完璧じゃない？」

「そうかな？　ありがとう」

「それじゃあ、とりあえず三百枚程印刷してくれる？」

「三百枚か、結構かかりそうだね」

「それじゃあ、その間にリフォームの様子でも見に行こうよ。お昼前に終わると言ってたし、もうすぐ終わるかも」

「おお、ちょうど今お呼びしに行こうと思っていたところですよ」

私達が階段を下りようとすると、木観さんも階段を上ってきていた。

「ということは、終わったんですか？」

「はい、お待たせいたしました」

「結衣、早速見に行こう！」

「うん！」

「おおー！」

思わず声をあげる。リビングに新しく出来た扉を開けると綺麗なオフィスが完成していた。

「それでは簡単に説明させていただきますね」

「あ、はい。お願いします」

「まず、こちらが照明のスイッチになります。そして横のパネルが床暖房です」

木観さんが、それぞれの箇所を説明していく。

「以上になります。何か質問等がございますでしょうか？」

「いえ、特にありません」

「そうですか。それではこちらの書類の方に記入をお願いします」

私は木観さんから受け取った書類に記入する。

「ありがとうございます。それでは私もこれで失礼させていただきます。この度はありがとうございました。また、何かございましたらよろしくお願いいたします」

「こちらこそありがとうございました」

木観さん達が帰った後、昼食を済ませた私達は、駅前のお店に仕事用のスーツを買いに行くことにした。お店までの道で印刷したばかりの広告を投函していく。

「そういえば今日、家具が届くんじゃなかったつけ？ 家に居なくて大丈夫かな？」

「夕方に届くはずだからそれまでに帰れば問題ないよ」

丁度三百枚を配り終えたあたりで目当ての服屋さんへと着いた。店員さんにサイズを測ってもらい、三着ずつ買った。

スーツを持って家へと帰る途中、私の携帯が鳴った。携帯の画面を見ると陽香ちゃんからだ。

「はい、涼海です」

「あ、もしもし涼海さん、木観だよ。これから遊びに行っても良いかな？ リフォーム終わったんでしょ？」

「良いけれど、これから家具とか届くからあまり遊べないかも」
「ああ、それなら私も手伝うよ。それじゃあ今から行くね」

「誰が来るの？」

「うん、陽香ちゃんが遊びに来るって」

「あ、そうなんだ。それなら急いで帰らないとね」

私達が家に帰って少しすると陽香ちゃんが遊びに来た。

「やつぽー。涼海さん、水瀬さん、遊びに来たよ」

「こんにちは、陽香ちゃん」

「こんにちは」

「リフォーム終わったんだよね。良かったら見せてくれないかな？」
「もちろんいいよ」

私は出来たばかりのオフィスに陽香ちゃんを案内する。

「うわー、広いね」

「まだ何も無いからね」

「それでも、十畳以上あるんじゃない？」

「うん、十二畳あるよ」

「私の部屋の倍以上か」

「まあ、オフィスだしね」

「そういえば木観さんの家はあのお店？」

「ううん、家はあの近くに別にあるよ」

「そうだったんだ。てっきりあそこがお家かと思ってたよ」

「それにしても、今回は陽香ちゃんの所に頼んでよかったよ」

「ありがとう。でもどうして？」

「陽香ちゃんのお父さんが優しくったし、色々丁寧してくれたしね」

他のお店を知らないから比べられないけれど、それでも親切なお店だと思う。

「ふふ、お父さんに伝えておくね。きっと喜ぶよ」

ピンポン

私達が陽香ちゃんと話しているとチャイムが鳴った。窓から見るとトラックがとまっている。

「家具が届いたみたい。結衣、部屋で置く場所の指示お願いできる？」

「任せて」

「あ、私も手伝うね」

「こんにちは。家具をお届けにまいりました」

「はい、その部屋へ入れてください。配置は中に居る人に聞いていただければ分かると思うので」

「分かりました。何から運びましょうか？」

「とりあえず机から願います」

家具の量が結構あるからか男性が三人きていたので、運び込むのに思っていた程時間はかからなかった。

「ありがとうございます」

最後に私が受領書に捺印すると配送業者の方達は帰って行った。

その後、暫く三人で家具の位置をずらしたり、この前買った物を整理したりと、何でも屋の準備をしていると二時間程経っていた。

「一応これでオッケーかな」

「結構かったね」

「陽香ちゃんありがとう。手伝ってくれて助かったよ」

「私も楽しかったから気にしないで。それにしても、高そうな家具ばかりだね……」

「まあ、折角だしね。あ、良かったらご飯食べていかない？ 手伝ってくれたし、遠慮はしなくていいよ」

「うーん、ならお言葉に甘えようかな」

「えっと、何が良いかな？ ピザでも取るうかなって思っていたんだけど……」

「良いと思うよ。私もピザは好きだし」

「それなら良かった。それじゃあ早速注文するね」

オフィスに置いた新しい電話機を使って注文する。注文してから二十分程でピザが届いた。

食後、かなり遅くなっていたから、少し休むと陽香ちゃんは帰った。私達はお風呂に入ってから二人でベッドに入っている。

「明日から楽しみだね」

「うん、お客さん……来てくれると良いね」

「初日から来るとは思っていないけれど、それでも期待しちゃうな」

「そうだね、広告も入れたから……もしかしたら来てくれるかも……」

…しれないね……」

結衣の声が今にも寝そうになっている。

「明日からがんばろうね」

結衣からは返事の代わりに寝息が返ってきた。

「おやすみ、結衣」

そう言っ　て私も目を閉じた。

第6話 何でも屋初仕事

朝、目が覚めた私達は朝食を済ませて、先日買ったスーツに着替えた。何でも屋開業日、気を引き締めてから私達はオフィスへと入った。

「何でも屋ラクス、開店！」

「わっ、急に大きな声出すからびっくりしたよ」

「えへへ、ついね」

「なんていうか、こうしているとお仕事って感じがするね」

結衣が自分のデスクへ背筋を伸ばして座っている。

「といつても、そういう気がするだけで何もしていないけどね」

「そういうことは言わないものだよ、麗奈」

「ごめんごめん。それにしても暇だね……」

「暇だね」

私達がオフィスに入ってから二時間程経った。その間ずっと、こうして何もせずに雑談している。結衣のピンと張った背筋も今は背もたれに預けられている。

「まあ、分かっていたことだけだね」

「とりあえず、のんびりしてるしかないか」

「そういうことみたいだね。ああ、結衣コーヒー淹れてくれない？」

「オッケー……いえ、畏まりました」

結衣は私の秘書ということになっている。深い意味はないけれど、なんとなく気分の問題でそういうことになった。

結衣がコーヒーを淹れるために席を立つ。

プルルル

結衣が席を立つと同時に電話が鳴った。私は急いで電話をとる。

「はい、何でも屋ラクスです」

「おお、こんにちは。広告をみてお電話させていただいたのですが、お願いがあるのです」

「はい、どのようなご用件でしょうか」

「これから伺わせていただこうと思うのですが、よろしいでしょうか？」

「もちろんです。お待ちしております」

「では、よろしくお願いします」

「もしかして、お客さん？」

席を立つたままの結衣が私に尋ねる。

「うん、これから来るって」

「うそ！ やったね！」

「うん！ 準備しないと」

お客さんが来るということで、私達は改めて身なりを整える。

「緊張するね……」

結衣は再び椅子に背筋を伸ばして座っている。

「そこまで硬くならなくても」

「そう言っても緊張するんだから仕方ないでしょ」

ピンポン

「あっ、来たみたいだよ」

「結衣、お客様を通してくれる？」

「うん」

結衣がオフィスの扉を開ける。

「こんにちは。ようこそいらっしゃいました。どうぞお入りください」

「失礼します」

入ってきたのは中年の男性。髪は全て白髪だけど、精悍な顔つきで背筋もピンと張っている。まさに渋いという表現がぴったりと当てはまると思う。

「いらっしやいませ。どうぞお座りください」

男性を応接スペースで迎える。

「ありがとうございます」

「結衣、御飲み物を」

「はい、コーヒーでよろしいですか？」

「ええ、ありがとうございます」

結衣が三人分の飲み物を机に置き、私の横へ座る。

「えっと、お客様のお名前を覚えていただけますか？」

「田沢と申します」

「田沢さんですね。私は涼海です。そしてこれは水瀬です」

「水瀬です」

結衣がそう言っ頭を下げる。

「それでは、早速本題に」

「はい、広告にはどんな依頼でも引き受ける、と書いてあったのですが……」

「はい、私達で出来ることであれば」

「実は、私には小学生の孫がおりまして、明日が誕生日なのです」

「おお、おめでとうございます」

「ありがとうございます。その孫なのですが、四ヶ月程前に私の家へ来まして、誕生日プレゼントにタッチペンEXが欲しいと言われたのです」

「今人気のゲーム機ですね」

「そのタッチペンEXが問題なのです」

「と、申されますと？」

「孫に頼まれたタッチペンEXはPMエディションというもので、

数量限定だったらいいのです」

「あ、麗奈それなら知ってるよ。たしか、PMというゲームの絵が描かれたモデルで、おまけとしてそのゲームの特典が付いてくるんですよね」

「ええ。しかし、私はそんなことを知らなかったので、特に急ぐことなく昨日買いにいったのです。そうしたらそこで限定ということを知られました」

「では、今回の御依頼はそのタッチペンEXのPMエディションを……」

「はい、何かお願いできないでしょうか。無理なお願いということとは分かっております。諦めてはいたのですが、広告を見てもしかしたらと思ひまして」

「分かりました。お孫さんの誕生日は明日ですよ。明日までに何とかいたします」

「おお、本当ですか！　ありがとうございます。御礼の件ですが、私はジュエリーショップを経営しておりまして、商品の中から何かというのはいかがでしょうか？」

「問題ありません。それでは手に入り次第ご連絡させていただきます」

「よろしく願います」

田沢さんが帰ってから、私達はどややってタッチペンEXを手に入れるか話し合っている。

「最初の依頼から難しいのがきたね。どうするの？　と言っても一つしか方法は思い浮かばないけど」

「うん、多分その通りだよ。私の神能で過去に戻って買ってくる」

「やっぱりそうだよな」

「さて、それじゃあ早速買ってくるね。発売日調べてくれる？」

「オッケー。少し待ってね」

結衣が調べている間に私は準備を整える。

「麗奈、三月一五日に発売だよ」

「ん、じゃあサッとしてくるね」

「いつてらっしゃい」

フリフリと手を振る結衣に見送られて私は詠唱する。

『TO TIME OF THE PAST LEAD ME』

寒い。そういえば三月ということ忘れていた。とりあえず上着を着てから家を出る。今から行けば開店時間の三十分前にはゲーム屋さんに着くと思う。

十分程歩くと目当てのゲーム屋さんに着いた。私はその前に出来た列の長さに驚いた。おそらく私と同じタッチペンEXを買いに来たと思われる人が二〇メートルくらいの列を作っている。私も急いでその列に並んだ。

暫く経って、もうすぐ開店という頃には列がさらに長くなっていった。改めてタッチペンEXの人気に驚かされる。

私がそんなことを考えていると列が動き始めた。お店に入った人が次々と同じ袋を持って出てくる。お客さんの回転はかなり早いようで三分程で私の番になった。

「いらっしやいませ。タッチペンEXのPMエディションでよろしいですか？」

「はい、一つお願いします」

袋を受け取って店を出ると、後ろから売り切れたという声が聞こえてきた。どうやらぎりぎりだったみたい。何とか買えてよかった。私は人目につかない場所へ移動してから詠唱する。

『RETURN』

「！　そうなるんだ……」

「ただいま。ん？　どうしたの結衣」

私がタッチペンEXを買って戻ってくると、結衣が驚愕の表情を浮かべている。

「今、麗奈はゲーム機を買いに行ってたんでしょ？」

「うん。ほら、買えたよ」

「そうだよ。えーっと、私から見るとね、麗奈の姿が急に変わったの」

「ああ、そうか……私は過去に行って戻ってきたけれど、こっちでは一切の時間が経っていないんだね」

「なんていうか、とっても不思議な感じ」

「あはは、まあとりあえず買えたよ」

「それじゃあ、これで依頼は完了だねっ」

「うんっ！　今連絡するとさすがに早すぎるから、明日になってから電話しよう」

暫くしてから昼食に出前を取って、その後は特に依頼も無く、二人でのんびりとしていた。

お風呂と夕食を済ませた私達は、明日に備えて早めに寝ることにした。ベッドに入ってお互いを抱き枕にしている。

「えへへ、こうするとなんだか安心するよ」

「私もなんていうかとっても落ち着く。お休み、結衣」

「うん、お休み」

私達は互いの温もりに身を委ねた。

第7話 異世界へと繋がる糸

休日としては少し早い時間に起きた私達は、シャワーを浴びてから朝食をとった。今日は結衣が作ってくれたからとても美味しかった。

「今日は田沢さんの所へゲーム機を届けるんだよね」

「うん、その洗い物が終わったら行こう」

「洗い物といっても食器洗い機に入れるだけ、だけどね」

そう言いながら結衣は食器を次々に放りこんでいく。いつ見ても結衣の家事をしている姿は素敵だと思う。

「お待たせ」

暫く眺めていると、いつの間にか結衣は片づけを終えていた。

「すぐに行くの？」

「うん、田沢さんに電話したらすぐにでも行こうと思ってるよ。今日がお孫さんの誕生日だから早い方が良いと思うし」

「それじゃあ私は出掛ける準備してくるね」

「なら、その間に電話しておくよ」

私が電話をかけると、構えていたのか、すぐに田沢さんが出た。

「はい、田沢です」

「おはようございます。何でも屋ラクスの涼海ですが」

「おお、連絡をお待ちしておりました。いかがでしょうか、やはり

……」

「いえ、手に入れることが出来ました」

「本当ですかっ!？」

「はい。タッチペンEXのPMエディション、手に入りました」

「……何とお礼を言っていていいか、ありがとうございます」

「それで、早速なのですが、これからお持ちしようと思っております

す。ご都合の程はいかがでしょうか？」

「まったくもって問題ありません。よろしく願います」

「それでは、三〇分程で伺わせていただきますので」

「はい、お待ちしております」

私が電話を終えて少しすると結衣が下りてきた。

「どうなった？」

「うん、これから持っていくことになったよ」

「オッケー、出かける準備はバッチリだよ」

「それなら私も準備はできてるし、早速行こうか」

「確か駅前のジュエリーショップだよな」

「そうそう。歩いて二〇分くらいかな」

お店の位置が描かれた地図を確認してから、ゲーム機を持って家を出た。もちろん、プレゼント用にラッピングがされてある。

「あ、あれだね」

結衣が少し先にあるクリーム色の落ち着いた雰囲気のお店を指差して言った。

「綺麗なお店だね。宝石店の割に学生でも入りやすそうだし、今度ゆつくりと見にこようかな」

「私でも買える物あるかな……」

「それほど高くないものも置いてあるんじゃないかな」

「だいたいな」

そんなことを話しながら、私達はお店の横へと回り、勝手口の横にあるインターホンを鳴らした。

「おはようございます。涼海です」

「お待ちしております。今、開けますので、お店の正面でお待ちいただけますか？」

「分かりました」

私達は再びお店の正面へと回る。少しするとシャッターが開いた。
「どうぞ、お入りください」

お店の中の雰囲気は外観と同じで落ち着いている。商品も手頃な価格の物から、高級な物まで幅広く置いてあり、手頃な物に関しては私達でも買えそうだ。

「あの、早速ですが……ゲーム機の方は……」

田沢さんが待ちきれないといった様子で聞いてきた。

「はい、こちらになります」

私はゲーム機の入った紙袋を差し出した。

「おおっ！ありがとうございます。本当に何とお礼を言ってよいやら……」

「いえ、喜んでいただけて何よりです」

「本当にありがとうございます。孫の喜ぶ顔が浮かびます。ああ、大切なことを忘れておりました。こちらがゲーム機の代金です。そしてゲーム機を手に入れていただいたのですから、報酬をお支払いしなくてはなりませんね。そちらのショーケースの中から好きな物をお選びください」

「うわっ、麗奈これ凄いよ……」

田沢さんが指差したのはカギのかかったガラスのショーケースで、中には今渡したゲーム機が三つは買えそうな金額の商品が並んでいる。

「こんな高価な物を……本当によろしいのですか？」

「もちろんです。こんなことを言うとは失礼ですが、内心無理なのではと思っていたお願いを聞いていただけたのです。安いくらいですよ」

「それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

ショーケースの中にはリングからネックレス、ピアスまで様々な種類の商品が陳列されている。私が端から順に見ていくと、ひとつづつ気になる物があった。

「ん、あれは……？」

「麗奈、どうかしたの？」

「あの、田沢さんこの玉はいかがでしょうか？」

私はショーケースの中にある値札の付いていない透明の玉を指差す。

「おや、そちらは見ての通り商品ではなく飾りなのですが、もしかして…… お気に召すものがございませんでしたか？」

「いえ、そんなことはないのですが、つい惹かれてしまいました」

「そういうことでしたらもちろん構いませんが、それだけですとこちらが申し訳なく…… ああ、それでしたらこちらもお持ちください
そう言っ て田沢さんはカウンターの下から小さな白の小箱を取り出した。

「それは……？」

「昨年のクリスマスにイベントで抽選を行ったのですが、その時の特別賞です。残念ながら特別賞が出なかったので、よろしければこちらと一緒に持ちください」

田沢さんが小箱を開くと中にはダイヤモンドをあしらったシンプルなリングが入っていた。

「わあ、綺麗だね」

「そんな高価な物を頂くわけには……」

「ははは、良く出来ているでしょう？ 実はこれ、リングはシルバ
ーなのですが、ダイヤモンドはイミテーションなんですよ。余り物
で申し訳ありませんが、いかがでしょうか？」

「しかし、それでも本当によろしいのですか？」

「はい、寧ろ受取っていただかないと私が困ります」

「それでは、ありがたく頂戴させていただきます」

「そうしてください」

田沢さんから袋に入った、透明の玉とリングを受け取る。

「さて、それでは私達はそろそろ失礼させていただきます」

「おお、そうですか。本日は本当にありがとうございました」

「こちらこそありがとうございました。また何かございましたらよ

ろしくお願いします」

「はい、その時は是非ともお願いさせていただきます」
「それでは」

私達は田沢さんに見送られてお店を後にした。

家へと帰ってきた私達は部屋でのんびりとしている。

「ねえ麗奈」

「どうしたの？」

結衣が、田沢さんから貰った透明の玉を見ながら話しかけてきた。

「これだけれど、ただのガラス玉だね。どうしてこれにしたの？」

「ああ、実はね……それ、この世界の物じゃないの」

「……え？」

結衣がポカンと口を開けている。

「どこが違うのかと聞かれると困るけど、なんていうか……そんな感じがするの」

「ということは、つまり私達の知らない未知の物質で出来ているってこと？」

「いや、ただのガラスだと思うよ」

私は苦笑して答えた。

「それならどうして？」

「えっとね……結衣にはまだ言って無かったけど、私の神能は他の世界の物があると、その世界へと行くことが出来るの」

「他の世界……」

「うん、私達の住んでいるこの世界とは別の世界にね」

「それじゃあこれが……」

「そういうことっ」

「そうになると……麗奈のことだしやっぱり行くんだよね？」

「もちろん、さすがは結衣分かってるね」

「危なくないかな？」

「いざとなれば私が守るから大丈夫」

「えへへ、ありがとう。麗奈が守ってくれるなら安心だね」

「うん、何があっても守るからね」

「頼りにしてるね。ちなみに、いつ行くの？」

「特に用事があるわけでもないし、準備したら早速行ってみようよ」

「準備か、何が要るのかな？」

「適当にお菓子とか飲み物とか、後は一応着替えは持って行った方が良さと思うけれど、それくらいじゃないかな」

「それならすぐにでも用意できるね」

「それじゃあ、私は一階からお菓子とか持ってくるから、着替えとか用意しておいてくれる？」

「オッケー、麗奈のも入れておくね」

「うん、お願い」

私がお菓子と飲み物を持って部屋へ戻ると、結衣の方も準備が出来ていた。リュックに今持ってきた物を入れる。

「これでよし」

今用意したリュックを持って玄関へと向かう。

「それじゃあ行こうか」

「なんだか緊張するね……」

「きつと大丈夫だよ。じゃあ、行くよ？」

結衣が私の腕を持ったことを確認して、ガラス玉を手に詠唱する。

「……」

「麗奈？」

「えっと、何て言えばいいのか分からないの……」

「え？」

「エルクさんから他の世界へ行く時に何て言うのか聞いてなかったよ。どうしよう……」

麗奈様

「わっ！」

「わわっ！ 急にどうしたの？」

「あ、ごめん。今エルクさんの声が聞こえて」

「私には何も聞こえないけれど……」

「うん、エルクさんの声は私にしか聞こえないみたい」

「そうなんだ。それで、エルクさんは何て？」

「ちよつと待つてね」

驚かせてしまい、申し訳ございません。前回、お伝えし忘れておりました。麗奈様が異世界に行く方法ですが、異世界に関わる物を持って、TO DISSIMILAR WORLD LEAD MEと唱えてください

「わかった」

それでは、私はこれで失礼いたします。お二人の安全を祈っております

「ありがとう——えっとね、異世界に行く方法を教えてくれたよ」

「ベストタイミングだね」

「さて、それじゃあ気を取り直して。結衣しっかり捕まってね」

「うん」

『TO DISSIMILAR WORLD LEAD ME』

第7話 異世界へと繋がる系（後書き）

次から第二章に入ります。

第8話 銀の髪（前書き）

新章、剣と魔法の世界へ入ります。

第8話 銀の髪

「ここは一体……」

「柱が沢山あるけれど……」

私達は無数の柱がある石造りの建物の中へ出てきた。完全に闇に包まれていて何も見えないはずなのだが、不思議と自分の周りだけは見ることが出来る。

「ねえ麗奈、今何かが光った気がしたんだけど」

「どこ？ 何も見えないけど……」

「確かに光ったよ。ねえ、見に行ってみようよ」

「どっちの方が光ったの？」

「こっちの方だよ」

私達は結衣の指す方向に向かって歩き出した。

「大分離れてたの？」

「どうなんだろう？ 少し光が見えただけでどれくらい離れてたのかは……」

歩き始めてそろそろ十分位になると思う。延々と柱が並んでいるだけで、他には何も見当たらない。

「私の気のせいだったのかな？」

「かもしれないね、それにしても一体どれくらいの広さがあるんだろう」

「ここって本当に建物の中なのかな……さっきからずっと柱しか――あつ！」

「もしかして、さっき結衣が見たのって」

「うん、今の光だよ」

「今の感じだと近いんじゃないかな？」

青白い光が一瞬、視界に入った。私達は自然と歩く速度を速める。

「うわっ！」

「きゃっ！」

光の見た方へ歩いて行くと突然周りが明るくなった。

「急に明るくなってびっくりしたね」

「うん……ねえ見て結衣。あれ……」

「ふわ、大きいね」

突然明るくなって私達が見たのは大きな石の像だった。先ほどまで見ていた柱はどこにも見当たらず、人の形をした巨大な像だけがそこにはあった。

「ねえ麗奈、あそこに石板があるよ」

像の足元に小さな台座があつて、その上に小さな石板が置かれている。私達が近付くとその石板が青白く光った。

「私の見た光はこの石板の光だったんだ……何か書いてあるみたいだけど、読めそうにないね」

『私の存在が争いの元となる。そんなことは堪えられない。私さえ、私さえ居なければこんなことには……』

あれ、私は何を言っているのだろう。

「えっ、麗奈！？ 何を」

『争いを生むことになるかもしれない。それでも私の力を望むのであれば、その時は唱えよ。この場にて……』

急に身体がいうことをきかなくなった。勝手に口から聞いたことも無い言葉が出ていく。ただ、意味は何故か理解できる。

「麗奈、麗奈ってば！」

『《解放》と』

「きゃあっ！」

突然私のポケットが強く光った。結衣が思わず尻もちをついてしまふ。

「結衣、大丈夫？」

いつの間にか身体が動くようになっていた。私は咄嗟に結衣へ声をかける。

「うん、大丈夫だよ。ちょっとびっくりしただけで……えっ!？」

「どうしたの？」

「麗奈、その髪……」

「うそっ、何これ!？」

結衣に言われて見てみると自分の髪が銀色に変わっていた。

「今、麗奈のポケットが光ったよね」

「うん……これが光ったみたい」

私はポケットから田沢さんに貰った透明の玉を取り出した。今は穏やかに白く光を放っている。

「一体何が起こったの？　麗奈がよくわからない言葉と言ったと思ったら、急にそれが光って、目を開ければ髪の色が変わってるし、もう何が何だか……」

「うん、私も石板を見たら勝手に言葉が出てきて……」

「動くな!」

「えっ」

声が出た方を見ると鎧を着た人が大勢こちらへ走ってきている。

「え、麗奈!？」

私は咄嗟に結衣を背にする。

「少しでも動けば身の安全は保証しない」

おそらく隊長か何かだろう。他の人とは少し異なった鎧を着た男性が私へ剣を突き付ける。

「私達はその……」

「喋るな!」

男性が剣の先で私の顎を持ちあげる。

「今から言う俺の質問だけに答えろ。お前たちは何者だ」

なんて答えればいいのだろう。異世界から来たと言っても信じてはもらえないだろうし。

「私達は迷子になってしまっ」

「迷子だと？　ここは簡単に入れる場所ではない。一体どうやってここに入った」

「気がつけばここに居て、自分でもどうやって入ったのか……」

「そんなわけあるかつ！　……まあいい、どうせ後でわかることだ。おい、至急国王陛下へお伝えしろ。クルス神殿に不審者二名とな」
「はっ」

後ろに居た一人が敬礼をして走って行った。

「ねえ麗奈」

「なに？」

「さっきからなんて言ってるの？」

「やっぱり分からない？」

「うん、何か言っているのは分かるけど、よくわからない言葉だから」

「そうだよね、私もどうして理解できるのか……」

やっぱりさっきの光が何か関係しているのだろうか。

「さっきから何をぶつぶつ言っている。喋るなと言ったはずだが」

「彼女に説明してるの。この世界の言葉が分からないから」

「ふんっ、これからお前たちを国王陛下の元へ連れて行く。痛い目に会いたくなければ大人しくしているんだな。よし、こいつらを縛りあげろ」

男性がそう言うと、縄を持った人が私達を後ろ手に縛り上げる。

「えっ」

結衣は急に縛られて泣きそうになっている。

「私達是不審者でこれから王様の所へ連れて行かれるみたい」

「大丈夫なの？」

「分からない……けど、このままここに居てもどうにもならないから、とりあえず大人しくしていよう。もしかしたら王様に何か聞けるかもしれないし」

「連れて行け」

鎧を着た人たちに囲まれてさっきとは違う方向へ歩いていく。

暫く歩くと外に出た。外といっても目の前は森で木々の他には何も見えない。出口のすぐわきに馬車が何台があった。

「乗れ」

その内の一台に私達は乗せられる。隊長らしき男性も一緒に乗り込んだ。

「出せ」

男性の合図で馬車が動きだした。ガタガタとして乗り心地が悪い。おとぎ話に出てくる優雅な乗り物とは異なるみたいだ。

「ね、ねえ麗奈」

結衣が私に話しかけると男性が睨んできた。

「彼女に今の状況を説明したいのだけど」

「……いいだろう。だが少しでも変な動きを見せてみる。その命はないものと思え」

「わかった」

「えっと、何て？」

「話してもいいって」

「よかった。それにしても、私達どうなるのかな？」

「分からないけど、多分いきなり殺されることはないと思うよ」

「殺されちゃうの!？」

「ううん、それはないと思う。それなら今ここで殺されてるだろうし、わざわざ王様の所へ連れて行くくらいだから、何かあるんだよ」

「そっか……そういえば、麗奈のその髪だけど、何て言うか少し光ってるよね」

「うん、ただの銀髪というわけではなさそう」

私の髪はキラキラと不思議な光を放っている。

「宝石みたいだね」

「何か良くないことでなければいいけど……」

「おい」

私達が暫く黙っていると、男性が突然話しかけてきた。

「何？」

「名前」

「え？」

「名前はなんだと聞いている」

「麗奈」

「そっちの小娘は」

「結衣」

「そうか」

「貴方は？」

「なんだ？」

「貴方の名前は？」

「聞いてどうする」

「私達が答えたのだから教えてくれても良いでしょう」

「……バール」

「バールさんね」

「国王陛下！」

早馬で一足先に城へと戻った兵士が国王の部屋へと駆け込む。

「無礼な、ここをどこだと思っている！」

丁度王と話をしていた初老の男が声を荒げる。

「申し訳ございません。しかし、緊急の用件でございます！」

「よい、申してみよ」

王は兵士へ話すように促す。

「はっ、クルス神殿に不審者でございます」

王は怪訝な表情をする。王が口を開きかけたが、代わって初老の男が口を開いた。

「クルス神殿に不審者だと？ お前たちは何をしていた」

「我々は昼夜問わず警備をしておりました。ですが、突然神殿の中が光り、駆けつけるとどこから入ったのか、石像の前に二人の少女が」

「石像の前だと？ あそこは特に厳重に警備していたはずだが。間違っても子供が入れるようなところではあるまい」

王が怪訝な表情を一層深める。

「しかし、確かに銀色の髪の少女と栗色の髪の少女が――」

突如、王の目が見開かれる。

「今、何と言った！」

「はっ、銀色と髪の少女と栗色の髪の少女、と」

「銀色……本当に銀色だったのか？」

「間違いございません」

「何と……」

「陛下、もしや……」

初老の男も驚愕の表情を浮かべている。

「ああ、おそらく……。して、その少女たちは今どうしてある」

「現在は、このフェレウス城へ護送中かと思われます」

「何だと！？」

王はガタンと大きな音をたてて席を立った。

「今から迎えを出しても間に合わぬか……お前は今すぐその少女たちの元へと向かい丁重に城へとお連れしろ！」

「ははっ！」

兵士は来た時と同様に大急ぎで出ていった。

「ジェイルは急ぎ、宴席の用意をせよ」

「分かりましてございます」

ジェイルと呼ばれた初老の男は一礼して部屋を後にした。

「まさか、私の代に現れるとは……」

急に馬車が止まった。何かあったのだろうか。
「ん、どうした？ 何かあったのか」
パールさんが御者に尋ねた。

第9話 対面

「それが、城へ報告に行った者が戻ってきました、止まるようにと

――」

「隊長！」

御者がそう言うと同時に馬車の後ろから声がした。

「どうした」

バールさんが開けると、随分と急いできたのだろっ、城から戻ってきた男性が息を切らせている。

「こ、国王陛下より勅命です」

「なんだ」

「現在護送中の少女二名を丁重に城へお連れするように、とのこと
です」

えっ、一体どうしたのだろっ。

「どういうことだ!？」

「分かりません。しかし、勅命ですので……」

「……分かった」

そう言っバールさんは私と結衣の縄を解いた。

「誠に申し訳ございませんでした」

バールさんは縄を解くと私達に頭を下げた。

「あれ? どういうこと?」

結衣が驚いている。

「なんでも王様が私達を丁重に扱うように言ったみたいだよ」

「そうなんだ……でも、どうして?」

「分からないけど、とりあえず一安心出来そうだね」

「先ほどまでの御無礼をお許しください。これより私共が責任を持つて、貴女方を城までお連れします」

「えっと……よろしく願います」

「なにぶん急な事で、このような馬車しかございませんがお許しく

ださい——出せ」

パールさんがそう言うのと再び馬車が動き出した。

三〇分程すると馬車が止まった。後ろが開いて、凄く豪華な鎧を着けた背の高い男性が手を差し出す。その手を借りて私達は馬車を降りた。

「近衛隊長のフェルディです。国王陛下がお待ちでございます。こちらへ」

そう言つてフェルディさんは一礼してから歩き出した。私達も後に続く。

「それにしても凄く綺麗なところだね。なんていうかおとき話の中に居るみたい」

「うん、私も夢みたいだよ。こんなところに住んでみたいよね」

一体どれくらいの広さがあるのか見当もつかない。私達の歩いている綺麗に敷き詰められた石畳の横には色とりどりの花が咲き、正面には青い屋根が特徴的な荘厳な城がそびえ立っている。

「近衛隊長のフェルディだ。門を開けよ」

少し歩くと巨大な門の前に着いた。フェルディさんの声で重い音を立てて門が開いた。再び歩き出したフェルディさんに従つてお城の中へ入っていく。

「これから王様に会うんだよね……」

「うん、どんな人だろう。怖くなければいいけど……」

「こちらでございます」

私達が話しながら歩いていると、途中で見たものとは違う、一際大きな扉の前で止まった。

「近衛隊長フェルディでございます。御二方をお連れいたしました」
フェルディさんがそう言うのと扉が開いた。

「凄い……」

結衣が思わず声を上げる。私も息をのんでしまった。広さは学校の体育館くらいはあるだろう。高い天井から吊るされたいくつもの

シャンデリア、柱は一つ一つ彫刻が施され、床には赤い絨毯が敷かれている。また、部屋の中央には映画でしか見たことが無いような数十人は座れるであろう巨大なテーブルがあり、その端に男性と女性、そして私達と同じ年くらいの女の子の三人が座っていた。

「こちらへ」

私達が入口で立ち止まっていると部屋の脇からエプロンドレスを着た女性が歩いてきた。その女性に案内されて、三人の正面の席へ着く。

「ようこそ。お待ちしておりました。私はリフィレス国王、カイゼル・フェン・リフィレスです。こちらは妃と娘です」

私達が席に着いてまず、向かいに座った真ん中の男性が口を開いた。カイゼルさんは髪と瞳が見事な金色で、立派な顎鬚を蓄えている。歳は恐らく四十程だろう。また、国王のオーラというのか、穏やかな顔の中にも威厳がある。

「セリア・ファン・リフィレスです」

カイゼルさんに続いて、隣に座っている女性がそう言って頭を下げた。セリアさんの髪は燃えるような赤色で瞳はルビーのように輝いている。歳は恐らく四十位なのだとは思いが、子供がいるとは思えないほど若く見える。

「エルティシア・ファン・リフィレスです」

最後に、結衣の正面に座った女の子が少し恥ずかしそうにしながら頭を下げた。エルティシアの髪は水底のように深い青で、瞳も吸い込まれそうになる程、深く、澄んだ青色をしている。歳は私達と同じくらいだと思う。まるで人形のように整った顔で、とってもかわい。

「麗奈涼海です。こっちは結衣水瀬です」

私がそう言って頭を下げると結衣も続いて頭を下げた。

「そんなに硬くならずに、話はゆっくりと食事でもとりながらしましょう」

カイゼルさんが手を叩くと次々と料理が運ばれて来た。

「さあ、遠慮せずにどうぞ。お口に合うか分かりませんが……」

「麗奈、何て？」

「食事をしながら話を、だって」

私が結衣に説明していると三人が不思議そうな表情を浮かべている。

「あ、すみません。結衣はこちらの言葉が分からなくて」

「おや、そうとは知らずに失礼いたしました。少しお待ちください」

カイゼルさんはそう言って席を立ち、結衣の前まで歩いてきた。

結衣は驚いて少し涙を浮かべている。

「失礼」

カイゼルさんが結衣の額に手を当て、何言か呟いた。一瞬手が光った気がする。

「いかがでしょうか」

結衣が驚愕の表情を浮かべる。

「麗奈！ 言葉が分かるよ！」

「本当に!？」

やっぱりカイゼルさんのおかげなのかな。私は席に戻ったカイゼルさんに尋ねる。

「今のは一体……」

「突然失礼しました。しかし、言葉が通じないのは不便かと思い、魔法で通じるようにさせていただきました」

「魔法……」

「魔法……ですか？」

私と結衣は思わず声を漏らしてしまう。

「はい、その様子だと御存じないようですね。おっと、折角の料理が冷めてしまいます。食べながらにしましょう」

カイゼルさんに促されて料理に手をつける。見たことも無いものばかりだけど、どれも美味しい。

「国王陛下、それで魔法と言うのは……」

私は食事が一段落したところで切り出した。

「そんな堅苦しい呼び方はやめてください。カイゼルで結構ですよ」
「それではカイゼルさん。魔法とは……」

「そうですね、順にお話しましょう。まずは貴女方が――」

「あ、私も麗奈で結構です」

「私も結衣で」

「麗奈達がどのようにしてあの場所へ現れたのかを教えてくださいませんか？」

「あの場所というと、柱が沢山あった……」

「はい。あそこはクルス神殿といって容易く入ることが出来るような場所ではないのです」

カイゼルさんは穏やかな笑みを絶やさずにいるが、その目が有無を言わせない事を物語っている。私は神能のこと、こっちへ来てから起こったことを説明した。

「なるほど、その様な力が……伺ったところ魔法とはまた異なったもののようです。あの場所に入ることが出来たのも領けます。それに、異世界から来られたのであればこの世界のことを御存じないのも無理ありませんね」

「あの、どうして麗奈の髪の色が変わったのでしょうか？」

結衣がカイゼルさんに尋ねる。

「ではそこからお話しましょう。麗奈の髪の色が変わったことについてですが、その光った玉をお見せいただけますか？」

「これです」

私はポケットから白く光る玉を取り出した。

「やはり……フェルディ」

カイゼルさんが呼ぶとすぐにフェルディさんが入ってきた。

「ジェイルをここへ」

「はっ」

部屋を出たフェルディさんは少しすると初老の男性を連れて戻ってきた。睨まれるだけで切り裂かれそうなほど眼光が鋭い。

「宰相のジェイルです」

私達を見てジェイルさんが頭を下げる。

「ジェイル、これを見てくれ」

カイゼルさんが私の手にある白く光る玉を指差す。

「ほう、やはりそうでしたか」

「うむ」

「して、陛下ご用件は」

「宝物庫よりリニアスの胸飾りを持ってきてくれ」

「畏まりました」

ジェイルさんが一礼してから部屋を出る。気がつけば無意識のうちに身体に力が入っていた。大きく息を吐いて力を抜く。結衣も横で同じようにしている。ジェイルさんは会話をしている間も終始その鋭い目で私達のことを見ていた。身体の内側まで覗かれているようで、自然と緊張していたのだろう。

「さて、麗奈の髪の色ですが、その前に少し長い話を聞いていただかなければなりません」

「はい」

私と結衣は姿勢を正す。

「今からそうですね……千年程前のことです——」

カイゼルさんはおもむろに話し始めた。

第10話 リニアス

「今からそうですね……千年程前のことです。世界を巻き込んだ大きな戦争が起こりました。この世界はセルトリア大陸とアウトラ大陸という大きな二つの大陸からなります。セルトリア大陸を囲むようにして環状にアウトラ大陸があり、戦争はその大陸の間で起こりました。

セルトリア大陸は温暖な気候に加え、四方を海に囲まれていることから雨が多く降り、海産物も豊富です。また、大陸中央に連なるガレウム山脈からは様々な鉱石が採れます。アウトラ大陸にある四つの国々はこの恵まれた土地を求めて、同盟を結びセルトリア大陸の西の端、此処リフィレス王国に攻め込んだのです。

海という防壁のおかげで暫くは守ることが出来ましたが一国と四国、戦力の差は明らかです。時間が経つにつれ押し込まれていきました」

「待って下さい。一国と四国というのはどういうことですか？ セルトリア大陸の他の国は何もなかったのですか？」

戦争となれば他の国々にも影響は出るはず。それなのに見捨てるだなんて。私は咄嗟に尋ねていた。

「そうです。アウトラ大陸の国々は、戦争に一切巻き込まないことを条件にセルトリア大陸の他の国と不戦協定を結んでいたのです。出来るなら戦争を避けたいというのは何処の国も同じ、仕方のないことです。

さて、そうして押されつつも何とか守ってきたのですが、それも限界、あと数日で上陸されるという時です。当時のリフィレス王は降伏を考えていました。降伏したところで王家は助かりませんが、民のことを考えるとそれしかなかったのです。

しかし、そこにリニアスという一人の少女が現れました。リニアスの魔力は強大で、また、他の者には使えない特殊な魔法を使うこ

とが出来ました。リニアスは一人で海に出ると一瞬にしてアウトラ大陸の軍を壊滅させたのです。

こうして、リフィレス王国は一人の少女によって救われ、人々はリニアスを英雄と讃え、女神として崇めました。しかしながら、暫くするとリニアスを恐怖の対象と見る者が出てきたのです。そして遂にはリニアスを崇める者と恐れる者との間で戦争が起こりました。戦争を終わらせたリニアスが戦争の対象となったのです。

リニアスは争いの種となる事に耐えられませんでした。そして自らを封印することに決めたのです。リニアスはリフィレス王に、封印を解くものが現れた時その者を手厚く遇するよう伝えて、自らを石板に封印しました。

国を守った者に最後まで何もすることが出来なかったことを悔やみ、リフィレス王は感謝と償いの意味を込めて神殿を作らせ、リニアスを祀りました。その神殿がクルス神殿で、麗奈達の現れた場所です」

「……と、いうことは」

「それじゃあ、私は……」

「リニアスの封印を解いた者。それが麗奈、貴女です。髪の色は魔力の資質を表すもの、穏やかな光を放つ銀の髪は正しく、文献に記されたリニアスのそれです。封印を解いたことで麗奈の魔法の資質がリニアスと同じになったのでしょう」

「なるほど……髪の色が変わった理由は分かりました。しかし、どうして私が封印を解くことが出来たのでしょうか」

単なる偶然なのだろうか。

「そうだよ、私は文字が読めなかったし、どうして麗奈は読めたんだろう」

「それはおそらく、麗奈の持っている玉が原因でしょう」

「この玉ですか？」

「お待たせしました」

私が白く光る玉をポケットから取り出すと、そこにジェイルさんが戻ってきた。

「おお、ちょうど良いところに。麗奈、その玉をはめてみて下さい」

ジェイルさんが持ってきたブローチの様な物を受け取り、そこへ白く光る玉をはめる。

「それが本来の輝きです」

はめた途端、玉の輝きがそれまでとは比べ物にならない程強くなった。

「ふわ……」

「凄い……」

私と結衣は思わず声を漏らす。

「その玉はリニアスの景玉といい、そうしてはめ込まれた形で、生前リニアスが常に身に着けていた物とされています。リニアスが自らを封印した際、玉だけが何処かへと消え、その土台だけが残されたのです」

「では、私がこの景玉を持っていたから封印が解けたのですね」

「はい、おそらくそうですね。……いえ、もしかすると逆かもしれません。文献によると封印を解く鍵はその者の本質とされています。ですから、景玉によって封印を解くことが出来たのではなく、封印を解ける麗奈が景玉を持っていた。と、いうだけではないでしょうか。ただ、決して偶然ではないと思います。これまで何人もの人間が強大な力を求めて封印を解こうとしました。しかし、誰一人としてそれは出来ませんでした。そうした中、突然現れ、封印を解くことが出来た麗奈が景玉を持っていたことは必然なのかもしれません。景玉は麗奈に差し上げます。大切にしてください」

「いえ、このような物を頂くわけにはいきません。お返しします」

私は光を増した景玉を差し出す。

「そういうわけにはまいりません。その景玉を机の上においてみて

ください」

私は言われた通り景玉を置く。

「あっ」

「光が……」

私が手を離すと景玉はその光を弱めた。

「先ほど申し上げた通り、その景玉はリニアスが身に付けていた物。また所持者の魔力によってその力は保たれています。ですから、それのあるべき場所は麗奈、貴女なのです」

「そういうことでしたら……ありがとうございます」

私が胸に着けると景玉は再び光を強めた。

「そうしてください。それにその景玉には持ち主を守る力があります」

「持ち主を守る力、ですか？」

「はい。そうですね……フェルディ、こつちへ」

呼ばれたフェルディさんがカイゼルさんのもとへ行くと、カイゼルさんは何言か耳もとへ囁いた。フェルディさんが一礼してから部屋を出る。暫くすると先ほどまでの鎧の上にマントのようなものを羽織ってフェルディさんが戻ってきた。

「失礼」

部屋に入るなり私のもとへ歩いてきたフェルディさんは、そう言うとうと突然剣を抜いた。

「えっ」

カイゼルさんとジェイルさん以外の人は皆目を見開く。フェルディさんは大きく振りかぶり、そのまま私へ剣を振りおろした。

「麗奈っ！」

結衣が叫ぶ。私も思わず目を瞑り、これから来るであろう衝撃と痛みに覚悟する。

「あれ？」

ガシャン！

突然大きな音がした。私の身体に異常はない。私が目を開けるとフェルディさんが数メートル離れた先に倒れていた。

「これは一体……」

「麗奈、何かしたの……？」

「ううん、私も何が起こったのかさっぱり」

「それが景玉の力です。斬りかかろうとしたフェルディを景玉が弾き飛ばしたのです。フェルディには魔防衣を着せていましたから、弾き飛ばされただけでダメージはありません。ご安心を」

カイゼルさんがそう言うのとフェルディさんは起き上った。特にダメージを受けた様子もない。

「怖いものですね……」

「いえ、危害を加えようともしない限り何も起こりません。麗奈を守ってくれる心強い味方ですよ。結衣、麗奈の景玉に触れてみてください」

「は、はい」

結衣が恐る恐る手を伸ばし、景玉へと触れる。——刹那、何も起きなかった。結衣は胸をなで下ろしている。

「良かった……」

「そういうわけですので、是非とも身に付けて居てください」

「はい、ありがとうございます。ところで、私達のことなのですが、髪の色が変わった理由も、こうしてもてなしていただけの理由も分かりました。しかし、どうすればいいのでしょうか。私達が出ることなんて何もありません」

「ははは、何もしていただく必要はありません。部屋を用意させますからご自由にお過ごしください」

「さすがにそれでは申し訳ありません。何か私達に出来ることはありませんか」

「そうですね……それではエルの友達になってやってください。この城には同じような歳の者がおらず、また身分のせいもあって、同

年代の友人がおらず、エルには寂しい思いをさせているのです」

「そんなことでしたら、お安いご用です。ね？ 結衣」

「うん、もちろんだよ。エルよろしくね」

「よ、よろしく願います」

結衣が手を差し出すとエルは恥ずかしそうにしながらも笑顔で握手した。カイゼルさんもセリアさんも嬉しそうに笑っている。

「さて、随分と話しこんでしまいました。魔法についてはまだ話していませんが、それは明日にしましょう。部屋の用意は出来ておりますので、どうぞゆっくりとしてください」

「ありがとうございます」

「あ、そうだ。ねえ麗奈、折角だしエルも一緒にどうかな？」

「良いんじゃないかな？ エル、どうかな？ 良かったら今夜一緒に寝ない？」

「えっと……」

エルは少し悩んでセリアさんの顔を見る。

「ふふ、良かったわね。行つてらっしゃい」

セリアさんはそう言って微笑んだ。

「それじゃあお邪魔します」

エルは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「ご案内いたします」

話がまとまったところで給仕の方が歩いてきた。

「それでは、また明日の朝にこの部屋で。ごゆっくりお休みください」

「はい。お休みなさい」

私達はカイゼルさんとセリアさんに挨拶をしてから部屋を出た。給仕の方に続いて歩いていく。

「こちらでございます」

そう言って開かれた扉の中は当然のようにとても広かった。おそらく五十畳はあるだろう。

「荷物はあちらに置かせていただきました。また、何かございましたらいつでもお申し付けください」

給仕の方はそう言って部屋を出て行った。

「それにしても綺麗な部屋だね」

早速ソファに座った結衣が部屋を見渡して言った。

「ここは、お城の中でも特に趣向を凝らした部屋なんですよ」

そう言ってエルも椅子に腰かける。

「ねえエル、この部屋にお風呂はあるの？」

「ありますよ。あの扉です」

そう言ってエルは部屋の端にある扉を指さす。

「それじゃあ早速皆で入ろうよ」

「うん、いいね。そうしよう」

「皆で、ですか？ 恥ずかしいです……」

「皆同じ女性なんだから気にしない気にしない」

私と結衣は早速タオルを持ってお風呂へ向かう。

「お二人とも着替えは持たないのですか？」

「ああ、私も結衣も寝るときは何も着ないから」

「何も……ですか……」

エルは顔を真っ赤にしている。

「さあ、早く入ろう」

「あ、はい」

脱衣所もやはり広かった。私と結衣は手際よく服を脱いでいく。

「ああ、先に入っていてください。少しかかりますので」

エルはドレスを着ているので脱ぐのに時間がかかっている。

「それじゃあ悪いけど先に入るね」

浴室の扉を開けると言うまでも無く広かった。お風呂は大理石で出来ており、ところどころに彫刻が置かれてある。

「麗奈、これってもしかして香水風呂じゃない？」

「そういえばそうかも、一度入ってみたかったから嬉しいな」

浴槽には透き通った桃色のいい香りのするお湯が入っている。私

と結衣は身体を流してから浸かった。

「やっぱりお風呂は良いね」

結衣が幸せそうな顔を浮かべている。私と結衣が香水風呂を満喫していると、タオルで体を隠しながらエルが入ってきた。

「綺麗だね」

結衣はエルの体に見惚れている。エルの肌は珠のように白くきめ細かい。

「そんなに見ないください。恥ずかしいです」

「ごめん、あまりに綺麗だったから。それにしてもスタイルも凄くいいよね。麗奈にも負けてないんじゃないかな。麗奈とエルと一緒に居ると私が恥ずかしいよ」

「結衣も凄く綺麗ですよ」

エルもそう言いながら入ってくる。

それからゆっくり雑談しながら入っていると一時間程たっていた。エルも最初は恥ずかしそうにしていたけれど、途中からは慣れてきたみたいで普通に話せるようになった。

お風呂からあがった私達はそのまま寝ることにした。三人でベッドに入る。私と結衣が服を着ないので、エルもそれに従った。

「これはやっぱり恥ずかしいです」

「大丈夫。すぐに慣れるから」

それから少し雑談していると、色々あって疲れていたのだろう、結衣の寝息が聞こえてきた。私とエルも目を閉じる。それから意識を手放すのに時間はかからなかった。

第11話 銀色と光魔法

あれ？ 此処は一体…… ああ、そういえば別の世界に来ているんだった。カーテン越しに差す朝日で目が覚めた私は、まだ寝ている二人を起こさないようにしてベッドから出た。結衣はエルをしつかりと捕まえて抱き枕にしている。少し羨ましい。

私は服を着ると、二人のずれた布団を掛け直してから、出来るだけ音をたてないようにして部屋を出た。

「おはようございます。お早いですね」

扉のすぐ横に給仕の方が控えていた。昨夜私達を案内してくれた人だ。もしかして夜の間もずっとここに居たのかな。

「おはようございます。目が覚めてしまつて……」

「そ……そうでしたか。よろしければ何かお飲み物でもいかがですか？」

「あ、お願いします」

今、私と目があつた時に少し驚かれたような気がしたけど、気のせいかな？

「それでは中でお待ち下さい。すぐにお持ちいたします」

そう言つて給仕の方は一礼してから去つていった。

「失礼します」

私が椅子に座つて少しすると、ティーポットとカップをトレイに載せて先程の給仕の方が入ってきた。慣れた手つきでお茶の用意をしていく。

「これは何ですか？」

ティーポットには綺麗な琥珀色の液体が入っている。

「こちらはアンベルという飲み物で、この国の名産品でございます」
給仕の方が注いでくれたアンベルは、何とも言えない不思議な良い香りを湯気とともに漂わせている。早速一口飲んでみた。

「あ、美味しい」

適度な渋みと仄かな甘みが寝起きの体に心地良い。

「それでは、また何かございましたらお申し付けください」

私が飲み終えると、カップを片づけて給仕の方は一礼してから部屋を出ていった。

それから暫くして、私が窓から見える中庭の景色を眺めているとベッドのほうで音がした。エルが目を覚ましたみたい。お互いに服を着ていない状態で抱きつかれている事に気付いて、顔を赤くしている。

「エル、おはよう」

「あ、おはようございます」

「……うん。おはよ」

私がエルに声をかけると結衣も目が覚めたようで、ようやくエルが解放された。

「どう？ エル、ぐっすり眠れた？」

そう言っただけで私はベッドの脇にある椅子に座る。

「昨晩は恥ずかしくて眠るところではなかったのですが、気がつけば寝てしまっていたみたいです。よく眠れました」

「私も麗奈とエルに挟まれて快適だったよ。そういえば今日は……！」

結衣は私の顔を見た途端驚愕の表情を浮かべる。

「結衣？もしかして私の顔に何か付いてる？」

私がそう言っただけでエルのほうを見るとエルも同じように驚いている。

「麗奈、銀色になってる……」

そう言っただけで結衣が私の顔を指さす。

「うん、そうだけど昨日からだし、そこまで驚かなくても。まあ、私も目が覚めた時は少しびっくりしたけど——」

「うっん、そうじゃなくて目」

「目？」

「そう。麗奈の目……瞳が銀色になってる」

「え!？」

私は急いで部屋に置かれている鏡を見る。鏡に映った私の瞳は髪と同じ銀色で穏やかに光を放っている。

「昨日はこんなことなかったよね？」

「うん、寝るまでは特に変わった様子はなかったよ」

「おそらく魔法の影響だと思います。朝食の時に父様に聞いてみてはいかがですか？」

「そうだね。カイゼルさんなら知っているかも。それじゃあ、準備が出来たら行こうか」

「はい。服を着るので少しお待ちください」

そう言ってエルは服を着ていないことに改めて気付いて、再び顔を赤らめた。

身支度を整えて、私達は部屋を出た。部屋の前に控えていた先程の給仕の方に案内されて、大広間へと向かう。

「それにしても、今の麗奈は宝石みたいだね」

結衣が歩きながら私の顔を覗き込む。

「ええ、神秘的な輝きで本当に綺麗です」

「あはは、ありがとう」

そんなことを話している間に大広間へ着いた。給仕の方に扉を開けてもらって中に入ると昨日と同じ位置にカイゼルさんとセリアさんが座っていた。向かい側に私達も座る。

「おはようございます。昨夜はよく眠れましたか——おや」

カイゼルさんの言葉が私の顔を見て止まった。

「おはようございます。朝起きた時から瞳の色が変わっていたのですが、これは一体……」

「なるほど、ご安心ください。それほど珍しいことでもございません」

「そうのですか？」

「はい。それについては魔法の説明と共に食事をしながらお話しま

しょう」

そう言ってカイゼルさんが手を叩くとテーブルに料理が並べられる。

「さあ、どうぞお召し上がりください」

朝食は焼きたてのパンとスープ、赤いオムレツに初めて見る野菜のソテーでどれも食欲をそそるいい香りを漂わせている。

「わーおいしそう。いただきます」

結衣が早速パンを頬張っている。

「うふふ、そんなに慌てなくてもパンは逃げませんよ」

「えへへ……」

エルに笑われて結衣が照れている。一日で随分と仲良くなったみたい。カイゼルさんとセリアさんも嬉しそうに微笑んでいる。

「さて、魔法についてですが、魔法には精霊の持つ力を各々の魔力によって具現化するものと、魔力を利用して対象に働きかけるものの二種類あります」

「精霊……」

私も結衣も聞き入っている。

「ああ、どうぞ食べながら聞いてください。

この世界では全てのものに精霊が宿っています。そして精霊は火、水、風、土、をそれぞれ司る四種族に分けられ、これら四属性の力を具現化する魔法を精霊魔法と呼びます。火を出したりするものが典型例ですね。

次に、魔力を直接対象に働き掛けさせる魔法ですが、これには昨日、結衣にかけた翻訳の魔法等があります」

話を聞いていると本当に現実なのかと思えてくる。結衣も同じみたいで、呆然として聞いている。

「えっと、その魔法は誰でも使うことが出来るのですか？」

もしかして、これまでの人は全員魔法使いだったのだろうか。

「はい、魔力は強さの違いはあれど、誰しもが持っているものです。小規模な魔法であれば、誰でも使うことが出来ます」

「それでは、カイゼルさんやフェルディさんも魔法使いなのですね」
「いえ、そういうわけではございません。私は確かに魔法使いですが、フェルディは違います」

「そうなのですか？　しかし、先程魔法は誰でも使うことが出来る
と……」

「なるほど、そういうことでしたか。確かにフェルディも魔法を使うことはできますが、この世界では、特に魔力が強力な者だけを魔法使いと呼んでいるのです。魔法使いは数千人に一人しかおりません」

「数千人に一人……カイゼルさんって凄いですね……」
結衣が驚いている。

「ははは、ありがとうございます。魔力は生まれ持った資質によるところが大きく、遺伝によって受け継がれる事が多いため、魔法使いの子は基本的に魔法使いになります。ただ、そうでない場合もあれば、親が魔法使いでなくても、魔法使いの子が生まれることも稀にですがあります」

「と、いうことはエルも魔法使いなのですね」

「はい、魔法使いには特徴がありまして、魔法使いはそれぞれ得意とする属性があります。これも生まれ持った才能によるもので、これには遺伝は関係ありません。そしてその属性によって、髪の色が変わるのです。火属性が得意であれば赤、水なら青、風の場合は緑、土であれば金色になります」

「あ、それならエルは水属性が得意なんだね」

結衣がエルの髪を指して言う。

「はい。お父様は土、お母様は火の属性が得意です」

「また、髪の色だけでなく、その者の魔力がより強力である場合は瞳の色も変わります」

「あ、それでは私の瞳の色が変わったのは……」

「ええ、麗奈の魔力によってです」

「あれ、でもさっきの話に銀色の属性はなかったよね？」

結衣が不思議そうな顔をしている。確かに、私の属性は何なのだろう。

「それについては、先程属性には四種類あるとお話ししましたが、実はもう一つあるのです。それについて説明する前に、四つの属性の位置関係について聞いていただく必要があります。四種の属性は環のようになっており、火の両隣には風と土があります。そして火の対極は水です。これは得意とする属性以外の魔法をどの程度使うことが出来るのか、ということを表しています。つまり、私の場合は土なので両隣は火と水、対極は風ですね。私は土属性の魔法は最大限使うことができます。また、火属性と水属性の魔法もある程度使うことができます。しかし対極に位置する風属性の魔法については、ほとんど使うことができません。そうですね……布を一枚飛ばすのがやつとでしょうか」

「魔法を使ったことがない私からすれば、それでも十分凄いです」

「ははは、麗奈ならそれくらい簡単にできますよ」

「そうなのですか？」

「はい——さて、四属性の位置関係については説明しました。もう一つの属性というのは四属性の環の中心部に位置する属性で、光属性といえます」

「光属性……」

「光属性は世の理を司ります。光属性を得意とする者は四属性全てを最大限使うことができ、また世の理を操り、不可能を可能とすると言われる、光属性の魔法を使うことができます。そして光属性の魔法を得意とする者の特徴は、光を放つ銀色の髪なのです」

銀色の髪……今聞いたことが全て本当だとすると、とてつもない事ではないだろうか。

「光属性の魔法を扱うことの出来る者を私は二人しか知りません。おそらく、他には存在しないでしょう」

「その二人、というのは……」

「一人はリニアス、もう一人はその力を解放した麗奈、貴女です」

「冗談……ではありませんよね」

「はい、全て本当のことです」

「麗奈……凄いな……」

結衣は開いた口がふさがらないといった感じで、私自身も呆然としている。エルとセリアさんも非常に驚いている。

「魔法の説明はこれくらいですね。折角ですから、魔法を使ってみてはいかがですか？ 今日はこの後エルが魔法の練習をしますから、一緒にされてみてはどうでしょう」

「麗奈、やってみようよ」

信じられない様なことばかりで驚いたけど、思えば自分が魔法を使えるなんて夢みたい。

「うん。カイゼルさん、是非お願いします」

「それでは、三十分後に中庭でお待ちしています。エルと一緒に来てください」

「分かりました」

既に朝食を食べ終えていた私達は一度部屋へ戻ることにした。

第12話 魔法の訓練

部屋に戻ると台の上に服が置かれていた。

「あれ、この服は？」

結衣が手にとって見ている。

「あ、それは訓練用の服です」

「そうなんだ。エルが着るの？」

「はい、ドレスでは動きづらいので、訓練の時はその服に」

そう言ってエルは着替え始めた。結衣もドレスを脱ぐのを手伝っている。

「そういえば、この世界では皆魔法が使えるんだよね」

結衣が着替えを手伝いながらエルに尋ねる。

「はい。魔力に差はありますが誰でも使うことができますよ」

「その、もしかして私にも使えるのかな？」

あ、そういえば結衣はどうなんだろう。私は使えるらしいけど。

「おそらく使えるのではないのでしょうか。確か、相手の魔力を引き出す魔法があったと思います」

「ほんとっ！」

それを聞いた瞬間、結衣の表情が変わった。

「結衣も魔法使いだと良いね」

「うん。俄然やる気が出てきたよ。私がおかするわけではないけど」

「あ、着替え終わった？」

「はい。おかしくないですか……？」

そう言ってエルは不安そうな顔を浮かべる。

「ドレスじゃないエルって新鮮だね」

「良く似合ってると思うよ」

フリルのついた白のブラウスに黒色のスカート、スタイルが良いからシンプルな服がよく似合う。

「そう……ですか？ ありがとうございます」

エルが褒められて照れている。

「でも、なんていうか訓練をする服って感じではないよね」

確かに結衣の言う通り、訓練をする服には見えない。

「実は訓練専用の服というのは持っていないくて……専用に仕立ててもらっても良いのですが、魔法の訓練はそこまで激しい運動をするものでもないの、私服の中から適当に選んでいます」

エルはそう言って苦笑している。

「あ、そうなんだ。どうりで……」

「さて、それじゃあ行こうか。中庭だったよね」

「はい、こっちです」

エルについて中庭へ行くとカイゼルさんが給仕の方と一緒に待っていた。横には台があつてその上に色々な物が置かれている。カイゼルさんも訓練のためかマントを脱いでいた。

「お待ちしておりました。それでは早速始めましょうか」

「あ、お父様。結衣に魔法を——」

「おお、そうでしたね。結衣、じつとしていてくださいね」

「は、はい」

カイゼルさんは昨日と同じように結衣の額へ手を伸ばす。結衣は緊張で直立して硬くなっている。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

カイゼルさんは結衣の様子を見て笑うと、額に手を当て何言か呟いた。カイゼルさんの手が一瞬だけ光る。

「これだけ、ですか？」

特に結衣に変わったところは見えない。私は思わず尋ねた。

「はい。これで結衣も魔法が使えるようになってる筈です」

「どう、結衣。何か変わった？」

「うーん、何も変わってない気がする」

「目に見えるものではありませんから——おや」

カイゼルさんの声が急に止まった。

「どうされたのですか」

「いえ、どうやら結衣も魔法使いのようですね
そう言っただけカイズさんは笑う。

「え……あ！ 髪の色が」

結衣の髪が少しずつ青味を帯びていく。

「青……と、いうことはエルと同じだね」

「はい！ なんだか嬉しいです」

二人は手を取り合っただけで喜んでいる。エルは深い青なのに対して、結衣はどちらかというと水色に近い色をしている。

「そういえば、私の瞳はどう？ 魔力が強いと瞳の色も変わるんだよね」

エルが結衣の目を覗き込む。

「瞳の色は変わっていないみたいですよ」

「そっか……仕方ないことだけど、私だけ魔力が低いんだね」
結衣はしょんぼりとしている。

「いえ、魔力が低いなんてんでもありません。髪の色が変わった
ということは、結衣もそれだけの魔力を持っているということです。
それに、エルも元は瞳の色は変わっていませんでした」

「あ、そうなんだ」

「結衣、そこはもっと喜ばないと」

「えへへ、それもそうだね」

「さて、それでは早速魔法の訓練を始めましょう」

「はい、よろしく願います」

「そうですね……丁度結衣の得意な属性が水なので水属性の魔法に
しましょう。こちらへ来てください」

カイズルさんに従って中庭にある噴水の前へと移動する。

「最初ですから、簡単なものから始めましょう。これを手に持って
ください」

私と結衣は給仕の方からグラスを受け取った。エルのグラスは私
達の倍くらい大きい。

「まずは水属性魔法の基礎。水を出す魔法です。エル、手本を」

「は、はい。見ていてくださいね」

エルの手が少し震えている。緊張しているのかな。

『水よ!』

エルが一度、大きく深呼吸をしてそう言つと、突然グラスに水が溢れた。

「凄い……」

結衣も目の前で起きた出来事に驚いている。

「ふう、緊張しました。いかがですか？」

「信じられないよ。夢みたい」

「今のが水属性魔法の初歩、湧水の魔法です。エルには何も入っていないグラスを使ってもらいましたが、お二人は初めてですので、グラスに水が少し入っていた方がやりやすいと思います。その水を少し汲んでください」

カイゼルさんに言われた通り、私達は噴水の水を少し汲む。

「では、結衣からやってみてください。グラスに水が入っている様子を強く思い浮かべながら、『水よ』と、詠唱してください」

「結衣、がんばってくださいね」

「うん、ありがとうエル。それじゃあいくね……」

『水よ』

結衣が詠唱するとグラスに入った水が一センチほど増えた。

「これだけ……?」

結衣は少ししか増えなかった水を見てがっくりしている。

「初めてでそれだけ出来れば大したものです。結衣は才能があるみたいですね」

「だって。結衣、凄いじゃない」

「凄いです」

「えへへ。そ、そうかな」

皆から一斉に褒められて結衣が照れている。

「これは私も負けてられないね」

「ふふ、がんばってくださいね」

「がんばってね」

「それでは麗奈もやってみてください」

「はい」

私がグラスに水が入る様子を強くイメージすると突然、指輪が強い光を放つ。

「これは……！」

「わ……」

「まあ……」

私を含めてその場に居た全員が驚愕の表情を浮かべる。グラスからはバケツを返したように大量の水が溢れる。そして、暫くすると溢れていた水は止まり、指輪の放つ光も収まった。それと同時に全身に力が入らなくなつて、その場にへたり込んでしまった。

「麗奈！？」

結衣が助け起こしてくれる。

「お父様、これは一体どういうことですか？」

「麗奈、少し失礼」

カイゼルさんが私の首筋へ手をかざす。そのまま少しすると、体に力が入るようになった。

「もう大丈夫みたいです。それにしても今のは一体……」

「どうやら麗奈は魔力を使い果たしてしまったようです。その光った指輪を見せていただけますか」

そう言われて田沢さんから貰った指輪を渡す。カイゼルさんはその指輪に少し指を触れてから頷いた。

「なるほど。やはりそうですか」

「その指輪に何か問題でも……」

「いえ、問題というわけではありませんが、この指輪には魔法を強める効果があるみたいですね」

「魔法を強める効果ですか？」

「はい。ただ、それには膨大な魔力を使うようで、そのせいで麗奈

の魔力を使い果たしてしまったのです。魔力が無くなると今のようになってしまう」

「まさか、この指輪にそんな効果があったなんて……」

「田沢さんからおまけで貰っただけなのにね」

私は指輪を受け取ってポケットに入れる。

「さて、今は私の魔力で動けますが、少し休まれた方が良いでしょう。エル、この水を片づけてくれないか」

「はい」

『今、此処に有りし水よ、我が意に従え！』

エルが両手を胸の前へ突き出して詠唱すると、私の出した水が噴水へと移動していく。そして数秒で元通りになった。

「凄い……なんだか今日はこればかり言っている気がするよ」
そう言って結衣は笑っている。

「でも、本当に凄いよね」

「私が今使った魔法は従水と呼ばれるものです。お二人も少し練習すれば使えるようになりますよ」

「それでは一度戻りましょう。そうですね……今日はもう魔法の練習はできそうにありませんし、お昼からは一度町を見に行かれていますかですか」

「あ、私見たい」

「うん、私も見てみたいな」

「では私が案内しますね」

「エル、ありがとう」

「ん、エル。昼からは公務があつた筈だが……」

「あ……」

エルが、忘れていたという表情をしてうなだれる。

「はっは、冗談だ。私が代わりに片づけておくから行ってきなさい」

「ほ、本当ですか！ ありがとうございます！」

エルが満面の笑みを浮かべる。

「それではまた夕食の時に話を聞かせてください」

そう言つてカイゼルさんは戻つていった。私達も中庭を少し見てから部屋に戻つた。

第13話 社会見学

部屋に戻った私たちは、シャワーを浴びて昼食を食べている。

「それにしても、私たち魔法を使っただよね。」

「夢みたいだけど、実際に使っただから、信じないわけにはいかないね。」

「まさか、結衣も魔法使いだっとは思いませんでした。」

「私もびっくりしたよ——あ、そういえば……。」

「ん、どうしたの？」

「ううん、おかしくないかな？ って思っ」

「何がですか？」

「ほら、私の髪の色変わったじゃない。変じゃないかな？」

「ああ、なんだそんなこと。」

「大丈夫です。とても似合っていますよ。」

急に言うから何かと思えば……私とエルは顔を見合わせて笑う。

「それにほら、そんなこと言ったら私の方が。」

「まあ、確かに光を放つ銀髪は珍しいよね。でも麗奈は大丈夫だよ。もとの良いからなんでも似合うよ。」

「そうですね。不思議なまでに麗奈に合っています。」

次は結衣とエルが顔を見合わせて、ウンウンと頷き合っている。

「あはは……ありがとう……。」

嬉しいような嬉しくないような何とも微妙な気分。

「それはそうと、これから町に行くんだよね？ 私、目立たないかな？」

普通に考えればかなり目立つはず。

「そういえば、考えていませんでした。どうしましょうか。」

「と言っても、見られることには慣れているし、そこまで問題でもないけど。」

「いえ、そういうわけにはいかないのです。」

「どういうこと？」

「お城ではお父様が箝口令をしていますから問題はないのですが、銀色の髪、リニアスの話は誰もが知っている話です。麗奈がそのまま街に出れば騒ぎになってしまいます」

リニアスが戦争のもとになったことがあるくらいだし、目立たないにこしたことはないか。

「どうする？ 麗奈」

「うーん、目はサングラスで何とかなと思うけど……」

「サングラス……ですか？」

エルが首をかしげて頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。

「サングラスっていうのは光を遮るレンズのメガネだよ」

「そういうものがあるんですね」

「麗奈、持ってきてるの？」

「うん、カバンの中にも入れてあるから」

そういつて私はカバンからサングラスを取り出す。

「それがサングラスですか？ 色のついたメガネですね」

「うん、これをかけて……どうかな？」

サングラスをかけて二人の方を向く。

「うーん……」

由衣がうなっている。

「あれ、ダメかな？」

「いや、多分大丈夫だと思う。サングラス越しに少し光が見えるけど、気にするほどでもないと思うよ」

「麗奈の顔が少し怖くなりました」

「それは仕方ないかな……さて、後は問題の髪だけ……エル、何か隠せそうなものないかな？」

「そうですね……あ、少し待っていてください」

そう言つてエルは部屋を出て行った。

「何か思いついたのかな？」

「多分そうだと思うよ」

私達が適当に雑談しながら待っていると、数分でエルが戻ってきた。

「お待たせしました。これなんていかがでしょう？」

そう言って見せたエルの手には金髪のウィッグがある。

「これならいけるんじゃない？　麗奈」

「うん、着けてみよう」

エルから受け取り、早速着ける。

「どう？　サイズはぴったりだけど」

「綺麗に隠れてるよ」

「なら、これで問題なしだね」

「役に立ってよかったです。それでは問題も解決しましたし、行きましょう」

エルに続いてお城の庭、私達が昨日馬車を降りた場所へ出る。フェルディさんが馬車の横で待っていた。

「お待ちしておりました」

そう言っただけでフェルディさんは一礼する。

「ご苦勞様。お二人とも、乗りましょう」

フェルディさんの手を借りて私達は馬車へ乗った。

「王女様、本日はどちらへ」

フェルディさんが御者台に座ってから尋ねる。

「何か見たいところはありますか？」

「うーん、何があるのか分からないから……あ、お店とか見てみたいな」

結衣の一言で決まった。

「南の商業区へ」

「畏まりました」

フェルディさんが手綱へ合図をおくと馬車はゆっくりと動き出した。

「あ、昨日の馬車と違ってあまり揺れないね」

結衣の言う通り、昨日のようにガタガタと揺れることがない。

「お二人が乗ってこられた馬車は、兵が使うものでしたの……」
エルは苦笑している。

「それで、えつと……南の商業区だっけ？」

「はい、大きなお店から小さなお店まで様々なお店が出ています。
とても賑わっていますよ」

「商店街みたいなのところかな？」

「どれくらいかかるの？」

「そんなにかかりませんよ。馬車で二十分位です」

三人で談笑しながら揺られていると馬車がとまった。

「あ、着いたのかな？」

「そうみたいです。降りましょう」

フェルデイさんの手を借りて馬車を降りる。

「それでは行ってきますね」

「帰りはあちらの広場でお待ちしております。お氣をつけて」

一礼してからフェルデイさんは馬車を動かした。

「それにしても凄い人だね」

通りには多くの人が居て、とても賑わっている。

「そして、凄く見られてるね」

結衣は自分で言って苦笑している。

「さすがはエルだね」

私がそう言うのとエルは首を横に振った。

「いえ、私もこんなに注目されるのは初めてです……」

「と、いうことは……」

そう言いながら結衣が私の顔を見る。

「私？」

「はい」

「うん」

「あはは……」

「あ、結衣ですよ」

「……え、そうなの？」

「麗奈のその、サングラスでしたっけ、それが目立っているということもありますが、それよりもお二人の服装が珍しいので」

「ああ、なるほど」

「確かに私達の服、この中では浮いてるね」

通りを歩いている人々は麻や毛で出来たボタンや装飾もほとんどない服を着ている。

「まあ、気にしても仕方がないか」

「そうですね、それでは行きましょう」

エルと並んで通りを歩いていく。左右にはレンガや石で造られた建物やテントが並んでいて、多くの人が出入りしている。

「ねえエル、あのお店見ても良いかな？」

「もちろんです。時間はありますのでゆっくりと見てください」

「やった、それじゃあ早速入ろう」

結衣に押されて入ったお店は服屋さんだった。街の人たちが着ていた様な服が沢山陳列されている。

「うーん、特に欲しいものは無いな」

結衣の気に入る服は無かったようで、店内を一通り見ると店を出た。

「そつえば、エルはよく来るの？」

「はい、気分転換に来るので」

「そうなんだ。あ、ねえエル、あのお店は何を売ってるの？」

テントの下に液体の入った小さな瓶が並んでいる。

「果実の搾り汁ですね……あ！ アプレミアムです」

エルが小瓶を手にとって驚きの声を上げる。

「ん、そんなに凄いものなの？」

結衣が尋ねる。

「はい。アプレミアムは海を隔てて南にある、メジウドという国でしか取れず、他国に出回る事はほとんどないのです。甘酸っぱくてとても美味しいんですよ」

「そんなに凄いものなんだ……」

「お客さんアプレムをご存じとはお目が高いね。此処にあるのはアプレムの中でも特に良いものだけを使った搾り汁だよ。この機会を逃せば次はいつ手に入るか分からねえ。是非買っていつてくんな」

私達が見ていると店の奥から髭をはやした男性が出てきた。

「麗奈、これ買おう。ちょうど喉も渴いてきたし」

結衣が小瓶を手に取る。

「買うつて言つても、私達お金持つてないよ」

「あ……そうだね……」

結衣は肩を落として小瓶を置く。私も飲んでみたいけど、お金がないのだから諦めるしかない。

「二人してそんなに落ち込まないでください」

落ち込んだ私達を見てエルが笑う。

「でも……」

「お金なら私が持っていますから」

「ほんとっ？」

結衣の表情が一瞬で変わる。

「はい——すみません、冷えているものはありますか？」

「おう、何本にしましょう」

「それでは三本ください」

「あいよ、少しまってくんな」

男性は店の奥へ入ると、冷えた瓶を三本持つてきた。私達はそれを受け取る。

「おいくらですか？」

「ちょうどケリル金貨六枚ですあ」

エルは鞆から小さなピンク色の巾着袋を取り出す。

「あ……」

それを開いてエルは固まった。

「ん、どうしたのエル？」

急に固まったエルを見て結衣が尋ねる。

「いえ……その……すみません、これでお釣りはありますか……？」
エルは巾着袋から白い硬貨を一枚取りだして言った。

「そ、それはアルテ白金貨……お客さん申し訳ねえが今ある分じゃ釣銭が足りねえ」

「ごめんなさい、やっぱりそうですよ……」

お釣りが無いなんて、エルの出したお金は一体どれだけ凄いなんだろう。

「あ、それなら——あの、このお店の搾り汁はいくつありますか？」
「少し待っててくださいえ」

男性は店の奥へ入っていった。何か話している声が聞こえる。少しすると先程の男性より身なりの整った男性が出てきた。店主が何かだろうか。

「お待たせしました。当店には今お持ちの分を含めて三百本ございます」

「それを全部頂いたらお釣りはありませんか？」

「ぜ、全部でございますか？　お客様、当店で扱っておりますのはアプレムの搾り汁でも特に良いものだけを使った物で、いささかお値段が」

男性の言葉がエルの持っているお金を見て止まった。

「お、お客様、誠に申し訳ございませんが全部お買い上げいただいたとしても、当店には払えるお釣りがございません」

「そうですか……ああ、それではお釣りは結構ですので、その代わりに買った物を運んでいただけませんか？」

「も、勿論でございます。その程度のことでしたら」

「それではお願いします」

エルがお金を渡す。

「ありがとうございます。どちらまでお運びしましょう」

「フェレウス城までお願いします」

「フェレウス城……も、もしや貴女は」

「では行きましょう」

私達は店を出た。後ろを見ると男性が固まっている。悪いことをしてしまったのかもしれない。

少し歩くと木陰で腰を掛けられそうな所があった。

「あそこで飲みましょう。温かくなってしまうてもいけませんし」
そこに三人並んで座る。

「はい麗奈」

結衣から一本受け取って蓋を開ける。梅に似て少し違う不思議な良い香りがした。早速口をつける。

「おいしい」

「とっても美味しいね」

私と結衣は一口飲んで同時に声を上げた。味はしつかりとしていて、にもかかわらず後味はさっぱりしている。いくらでも飲めそう。「本当に美味しいです。何度飲んでも飽きません。私も久しぶりに飲みました。飲みたくてもなかなか売っていなくて……これを買えただけで今日は良い日です」

「ごちそうさま」大満足だよ」

「うん、私も」

私達はあつという間に飲み終えた。

「ところでエル、さっきエルが使ったお金ってそんなに凄いの？ お釣りが払えないって言うてたけど」

「あ、はい。この世界のお金にはガナム銅貨、ベレカ銀貨、ケリル金貨、そしてアルテ白金貨の四種類があります。ガナム銅貨が百枚でベレカ銀貨一枚、ベレカ銀貨百枚でケリル金貨一枚、そしてケリル金貨千枚でアルテ白金貨一枚です。国民の一月の収入が金貨二枚程ですね。」

私が先ほど使ったのはアルテ白金貨です。銀貨や金貨を入れてくるのを忘れてしまって……」

「そんなに凄いお金だったんだ……」

結衣が驚いている。

「ねえエル、もしかして今飲んだのって、物凄く高価なものじゃない？」

「そうですね、アプレムの搾り汁はなかなか手に入らないものですので」

それにしても、あのお金一枚で金貨千枚だなんて……エルがお姫様だということを改めて実感した。

「ごめんね、お金を使わせてしまって」

「いえ、お二人はお金を持っていなくても仕方ありません。それに、こうして一緒に見て回るのもとても楽しいですし、お礼を言うのは私のほうです」

エルは満面の笑みで言った。

「私もエルには感謝してるよ」

「うん、私も。エルには感謝してもきれないくらい。だからそれはお互い様だね」

「うふふ、そうですね」

そう言って三人で笑う。

「さて、十分休みましたし、行きましようか」

「うん」

一休みして喉も潤った私達は再び通りを歩き始めた。それにしてもお金は何かしないといけないな。

第14話 危機一髪

それからしばらく通りを歩いていると何かを見つけたのか、急に結衣が止まった。

「ねえエル。あそこ見てもいい？」

結衣が路地にある一軒のテントを指さして言う。

「構いませんよ」

「随分と入りにくい雰囲気のお店だけど……」

「こういうお店にこそ、面白いものが売っているんだよ」

確かにそれには一理あるかもしれない。結衣に続いて路地へ入っていく。

「さて、何が売っているのかな？」

結衣がそういつてお店の中を覗き込む——結衣が固まった。店の中を指さして声を失っている。

「結衣？ どうしたの？ 何かおかしいものでも——」

結衣の指す先を見て驚いた。薄暗い店内には女の子が二人、服も着ずに縛られている。

「お二人とも何かあったのですか！？」

「ひ、人……裸の女の子が……」

「これは……」

店内を見たエルが結衣と同じように声を失った。

「そうだ、早く助けないと」

「う、うん！」

「そうですね！ とりあえず巡回している兵を呼びましょう」

「おやおや、そんなことをされては困りますね」

店の奥から背の低い太った中年の男が出てきた。脂ぎった顔に気味の悪い笑みを浮かべている。

「貴方のしていることは許されることはありません！」

エルが毅然とした態度で男に言った。

「別に許してもらおうとは思いませんねえ。とりあえず、見られてしまったからにはこのまま帰すわけにはいきませんなあ」

「お二人とも逃げましょう」

エルに引つ張られて私たちはもと来た道に戻ろうとする。

「逃がしませんよ——お前達！」

男の声で建物の隙間から何人もの屈強な男が行く手を阻んだ。

「ど、どうするの？」

結衣が怯えている。

「大丈夫です。この程度の人数であれば私の魔法で」

『生命の源たる水よ我が意に従——』

「おっと、そうはさせませんよ」

『渦となり束縛せよ！』

「あっ！」

「きゃっ！」

「結衣！」

エルが詠唱している間に、後ろにいた太った男が結衣に向けて魔法を放った。結衣の周りを風が回っている。

「その娘に傷をつけて欲しくないなら抵抗しないことですねえ」

「……わかりました」

エルが詠唱をやめて両手をあげる。私も両手を頭の後ろにまわした。私が横にいながら結衣に手を出させてしまうなんて……。

「それでいいのです。お前達、この娘どもを縛ってあげなさい」

男の合図で私とエルは縄で縛られた。

「ふっふっふ……二人ともなかなかの上物ですねえ。貴族の家にも売り飛ばしてあげますよ」

「そんなことさせません！」

「その勇気は買いますが、その状態で何ができるのです。ああ、魔法を使うそぶりを少しでも見せたら……わかっていますね？」

そう言つて男は結衣の方を見る。

「麗奈、ごめんなさい……」

「気にしないで。きっと何とかなるから」

「それはそうと、お嬢ちゃん私の好みですねえ。売り飛ばさずに私の元で飼ってあげましょうか」

男は結衣の周りの風を止めると、片手に持ったナイフを突きつけながら、その脂ぎった手で結衣の頬を撫で上げた。

「いやあっ！」

結衣が悲痛な声をあげる。

「やめなさいっ！」

エルが叫んだ。男がエルの方へ歩いてくる。

「さつきから気に入りませんねえ。自分の置かれている状況が分かっていないようです。少しお仕置きが必要ですねえ……」

そう言くと男は手を振り上げ、エルの頬を思い切り叩いた。

「っ！」

バシンツという音とともにエルが倒れこむ。

「エルっ！」

結衣が叫ぶ。

「これで分かったでしょう……さて、さつきからお前は何を黙っているのです。それにその変な眼鏡……顔を拝んであげましょう」

そう言つて男が私の顔へ手を伸ばす。触れようとした瞬間——景玉が光を増し、男の体は弾き飛ばされた。

「なっ！」

私は咄嗟に結衣の元へ駆け寄る。

「麗奈！」

「お前達！ 何をしているのです。さつきと捕まえなさい！」

武器を持った男達が一斉に私と結衣に襲いかかってくる。私は正面に立つて結衣を庇い、これからくる痛みを覚悟した。

「そこまでだ！」

この声は——フェルディさん！？ 私が顔をあげると剣を構えたフェルディさんが居た。

「フェルディさん！」

「お二人ともこちらへ！」

私と結衣がフェルディさんの後ろへ逃げるとフェルディさんが縄を解いてくれた。

「まさかもう一人いたとは……しかし形勢は変わりませんねえ。大人しく剣を捨てなさい。この娘がどうなってもいいのですか？」

太った男は倒れているエルを抱き上げてナイフを突き付けた。そして私達の周りを武器を持った男達に取り囲む。

「さあ！ 何をしているのです。早く剣を捨てなさい！」

「フェ、フェルディさん！ 早くしないとエルが……」
「結衣、ご安心ください」

そう言つとフェルディさんは小さな声で詠唱を始めた。

「ええい！ 早く剣を捨てるのです！」

「吹き荒べ烈風！」

フェルディさんが太った男めがけて剣振るう。一筋の風が取り囲む男の隙間を抜けて、ナイフを持った男の手に襲いかかった。

「っ！」

男の持つナイフが弾き飛ばされる。

「走つて！」

フェルディさんが太った男めがけて突っ込んだ。私も結衣を引っ張つて後ろに続く。

『か、風よ烈風となりて——』

「ハアッ！」

太った男が咄嗟に詠唱をしようとしたところにフェルディさんが斬りかかった。

「ウッ……！」

詠唱が済む前にフェルディさんが斬り伏せた。男がその場に倒れる。フェルディさんは受け止めたエルを私に預けた後、再び剣を構えて、武器を持った男達の方を睨みつける。

「お、俺達は雇われていただけだ！ 悪くない！」

「痛い目に遭いたくなければ武器を捨てろ」

「分かった！ 捨てるから勘弁してくれ！」

男達が一斉に武器を捨てる。

「よし、そのまま大人しくしている」

フェルデイさんが私達の縛られていた縄で

男たちを縛り上げた。

「……っうん」

「あつ、エル大丈夫！？」

気が付いたエルは一瞬間をおいてから、ハツとした表情を浮かべる。

「お、お二人とも！ ご無事でしたか！？」

「うん、フェルデイさんが助けてくれたから」

「フェルデイが？」

「おお、姫様気が付かれましたか」

男達を縛り終えたフェルデイさんが歩いてきた。

「どうしてフェルデイがここに？」

「はい。申し訳ないとは思いますが、皆様をお守りするため、後をつけさせていただいておりました」

「そうだったの」

「なかなか出る時がなく、姫様に怪我をさせてしまいました。申し訳ございません」

「これくらい、大したことありません。おかげで助かりました。ありがとう」

そう言ったエルの頬は赤く腫れ上がっている。口を開いたときの様子だと、口の中も出血しているだろう。何てことないような表情をしているが、かなり痛むはずだ。

「そうだ。ねえエル、魔法で治せないの？」

結衣が閃いたという顔で尋ねる。

「確かに治癒の魔法はありますが、水と土の二つの属性を合わせて使う魔法でして、私の得意な属性は水ですが風の方に偏っているのです。そのため治癒の魔法は殆ど使うことができません……」

「そうなんだ……それじゃあ誰か他の人が使えれば——」

結衣がフェルディさんの方を見る。

「すみません。私の魔力では治癒の魔法を使うことすらできません」
「そうですか……」

結衣が肩を落とす。

「それなら、結衣が使えばいいんじゃない？ ほら、丁度得意属性が水だし」

「そうだね。うん、やってみる。エル、使い方教えてくれないかな」

「はい。まず、治癒させる対象へ両手をかざします」

「こうかな？」

結衣が言われた通りに、エルの頬へと手をかざす。

「そして両手に意識を集中して、治癒させるといふ思いをこめながら『生命の源、水を司る精よ我が手に癒しの力を与えよ』と、詠唱してください」

「わかった。……それじゃあいくよ」

『生命の源、水を司る精よ我が手に癒しの力を与えよ！』

結衣が詠唱すると、エルの頬が僅かに光った。

「ど、どうかな？ 見たところあまり変わっていないようだけど……」

……

「そ、そうですね……痛みがほんの少し和らいだ気がします」

「そっか……ごめんね。うまく出来なくて」

「いえ、お気持ちだけでも嬉しいですよ。高度な魔法ですから、使うことが出来ただけでも凄いことですし」

「ごめんね。そう言ってくれると嬉しいよ。でも、その怪我どうしよっか……」

「私がやってみるよ」

私に属性の問題はないはずだし、うまくいくかもしれない。

「麗奈は今朝、魔力を使いきました。お気持ちは嬉しいですが、やめた方が——」

「大丈夫。そのままのエルを見てられないし、やってみるよ」

私は結衣と同じようにエルの頬へ手をかざし、意識を集中する。
エルの頬を治癒させるという思いをこめて――。

私が詠唱しようとした瞬間、エルの頬が光った。結衣の時よりも遙かに強く光っている。そして少しすると光は収まった。

「おお、これは……」

「い、痛みが消えました」

「麗奈凄い！　どうやったの！？」

光が収まり私が手を離すと、怪我をしていたことが嘘のように綺麗に治っていた。

「私にも分らないけど、詠唱しようとしたら光って……」

「今のは間違いなく治癒の魔法です。しかし、詠唱をせずというのは……後ほどお父様に聞いてみましょう」

何かまた光属性が関係しているのかな。

「それにしても、治ってよかったね」

「はい、まるで怪我をしていたことが夢のようです。それでは色々ありましたが、遅くなりましたしそろそろ戻りましょう」

「姫様、この者たちはどうされますか」

「奴隷の売買は重罪です。全員お父様の元へ連れて行きましょう」

「畏まりました。後、中にいた子供ですが薬が何かで眠らされているのでしょうか。呼びかけても反応がありません」

「放っておくわけにもいきません。その子達も城へ連れて行きます」

「それでは、全員乗ることができませんので馬車を手配いたします。それまで少しお待ちください」

「分かりました」

「あ、フェルディさん！」

歩いていこうとしたフェルディさんと呼びとめる。

「麗奈、どうかされましたか？」

「全員城まで連れて行けばいいのですよね」

「はい、そのための馬車を」

「それなら私に任せてください」

「何か良い方法でもあるの？」

「うん。ほら、神能があるじゃない」

「あ、そっか。それなら全員すぐに移動させられるね」

「フェルディさん。その人たちを捕まえている縄を持って、もう片方の手で私の肩を持ってください」

「分かりました」

フェルディさんが縄の端を持ち、片手を私の肩に乗せる。

「結衣とエルは女の子達をお願い」

「分かりました。もしかして、お二人がこちらへ来た時に使ったというものですか？」

「うん、そうだよ」

「それは楽しみです」

「それじゃあ、離さないでね」

皆が私を掴んでいることを確認してから詠唱する。

『NOW TRANSFER』

「麗奈にこんな力があつたとは……」

フェルディさんが驚きの表情を浮かべている。

「これが神能なのですね……」

「うん。驚いた？」

「はい、何とも不思議な感覚です」

「私も初めはびっくりしたよ」

捕まっている男たちも、何が起こったのか分からないようで困惑している。

「おっと、驚いている場合ではありませんね。国王陛下にお伝えしなければ。」

近衛隊長のフェルディだ。門を開けよ」

フェルディさんがそう言うと門が開いた。

「それでは私はこの者たちを国王陛下の元へ連れて行きます」

「エル、私達はどうするの？」

「夕食まで少しありますので、一度部屋に戻りましょう」

「では、私はこれで失礼いたします」

「フェルデイさん今日はありがとうございました」

「私も、何とお礼を言っていたいいか」

「私は仕事をしたまでです。それでは」

フェルデイさんは少し照れながら、男たちを連れて行った。私達も女の子達を医務室へ預けてから部屋へ戻った。お風呂で汚れと汗を流してから、広間へ向かう。

第15話 二人の少女

私達が広間へ行くと既にカイゼルさんとセリアさんがいつもの席に座っていた。

「お待ちしておりました。さあどうぞ」

カイゼルさんに促されて私達も席につく。いつものようにカイゼルさんが手を叩くと料理が運ばれて来た。全員に飲み物が注がれたところでカイゼルさんが口を開いた。

「街はいかがでしたか……と、本来ならば尋ねるところですが、フェルディから話は聞きました」

「すみません。私が店を見たいなんて言わなければ……」

結衣が咄嗟に頭を下げて謝った。

「顔をあげてください。責任は奴隷商をしつかりと取り締まる事が出来ていない私達にあります」

「セリアの言う通りです。私達が至らないばかりにこのような事になってしまつて……それに街を見るように勧めたのは私です。結衣は悪くありません」

「ありがとうございます。そう言っていたけると助かります」

「お父様、この話はここまでにしましょう。幸いにも大した怪我はありませんでしたし、折角の料理が美味しく無くなつてしまします」
「それもそうだな……」

「そういえばこのアプレムの搾り汁、エルが買ったのでしたね。給仕長が大量に届いたと驚いていましたよ」

セリアさんはそう言つて笑つとグラスに口をつけた。

「私もアプレムは久しぶりに飲みます。飲みたいと思つてもなかなか飲むことが出来るものではありませんので」

「ふふ、アプレムの搾り汁は結衣が見つけたんですよ」

「おお、それは結衣に感謝しなくてはいいけませんね。はっはっは」
「お金を払ってくれたのはエルだけだね」

「それでもお店を見つけたのは結衣ですから」

あ、そういえばカイゼルさんをお願いしたいことがあったんだ。

「あの、カイゼルさん」

「おや、麗奈どうされましたか」

「実はお願いがあるのです」

「何でしょう。私で力になれることでしたら何でも言うってください」

「その……お店を出したいのです」

「お店……ですか？」

皆が首を傾げている。

「はい。お世話になってばかりいるので、お金くらいは自分で稼ぎたいと思います」

「なるほど……しかしながら、お話ししたように私達は過去にリニアスから言い表すことのできない程の恩を受けています。ですから、気を遣っていたく必要はありませんよ」

カイゼルさんはそう言うて微笑む。

「ただ、国を救ったのはリニアスであり、私ではありません。それに……こちらが主なのですが、自分で何かしてみたいのです」

「ふむ……セリア、と思う」

「よろしいのではないでしょう。麗奈の頼みとあれば断るわけにもいかないでしょう。この世界のことを知ってもらうという意味でも良いと思いますよ」

「セリアがそう言うのであれば……分かりました。それで、どういったお店を出されるのでしょうか」

思っていたよりもあっさりと許可を貰えてよかった。

「カイゼルさん、セリアさん、ありがとうございます。お店の内容は――」

「麗奈、もしかしてあれ？」

「うん、そうだよ。えっと、何でも屋をしようと思っています」

「何でも屋……聞いたことがありますね」

「私も初めて聞きます。何でも屋とは一体何でしょう」

セリアさんは興味津々といった様子。

「はい。端的に言いますと、依頼を受けてそれをこなすというものです。名前の通り、依頼の内容は問いません」

「なるほど。とても便利なお店ですね。ふふ、私も利用させていた
だくかもしれません」

「今の話だと、お店を出す上で特に必要な物などはなさそうですね」
「はい。お店さえあれば大丈夫です」

「分かりました。それでは、土地と建物を用意させていただきます」
「ありがとうございます」

「どこか場所の希望はありますか？」

「どこが良いのか、よく分からないのですが、人通りの多いところ
が有り難いです」

「ん？ エル、どうしたのそんなに考え込んで」

結衣の声でエルの方を見ると、確かに腕を組んで難しい顔をして
いる。

「人通りの多い場所……それでしたら今日行かれた商業区が良さそ
うですね。居住区も近くこの街では最も人通りが多い場所です。い
かがでしょう？」

確かにかなりの人で賑わっていた。何でも屋するにはもってこ
いの場所だろう。

「まったく問題ありません。お願いします」

「それでは手配しておきます」

「お父様！」

それまで何事か考えていたエルが急に声をあげた。

「エル、急にどうした」

「あの、麗奈のお店の件、私に任せていただだけませんか。麗奈達の
ために何かしたいのです」

「ふむ……麗奈、いかがでしょうか。エルがこう言っているのです
が」

「ありがとうございます。エル、是非ともお願い」

「はい！ 任せてください！」

「決まりましたね。エル、何かあれば言うように」
「分かりました」

コンコン

「失礼します」

広間の扉がノックされて、給仕の人が入ってきた。

「ん、給仕長か。どうした」

カイゼルさんがそう言うと、給仕長さんは扉の外へ向かって手招きをした。

「し、失礼します」

緊張した様子で扉から入ってきたのは、私達が助けた二人の女の子だった。

「あっ！」

エルが驚きの声をあげる。

「おや、その子達がエル達の助けたという……」

「そうです。眠らされているようでしたので、医務室で預かってもらっていました。先にお父様の所へ行った方が良いかとも思ったのですが……」

「侍医から、二人が気がついたと聞きましたのでお連れいたしました」

女の子達は給仕長さんの後に続いてカイゼルさんの前へ来た。

「お父様、この子達はどのようなのです」

「とりあえず、二人の名前を聞きましょう。貴方達の名前を教えてくださいませんか？」

カイゼルさんが二人に向かって尋ねる。

「メルナです」

「カレルです」

「メルナとカレルですね。これからいくつか質問をしますが、答え

られる範囲で良いので答えてください」

カイゼルさんがそう言うと、二人の内の一人がコクリと頷いた。

「では初めに、お二人はどうして捕まっていたのですか？」

「……親に売られました」

「二人は何歳ですか？」

その場に居る皆が驚きや悲壮な表情を浮かべている中、カイゼルさんは淡々と質問を続ける。

「私が十三歳で、カレルは十二歳です」

中学生くらいになるのか……私が思っていたよりも歳が上だった。外見からはもう少し幼い印象を受ける。

「お二人の両親は今どうしていますか？」

「……分かりません」

「どなたか知り合いの方は居ますか？」

「居ません」

「なるほど……ありがとうございます。身寄りも無いとなると……ふむ」

「あなた、こういうのはいかがでしょう」

セリアさんがカイゼルさんに耳打ちする。

「セリアも私も同じことを考えていたか。いかがでしょう。お二人が良ければこの城で働きませんか？ 住み込みになりますが、どうでしょうか」

「よ、よろしいのですか！？ 私達のような者を城に置いていただいて……」

「もちろんです。ただ、麗奈と結衣の専属の給仕係として働いていただくと思っていますので、二人が構わなければ、ですが」

カイゼルさんがそう言って私達の方に視線を向けると、二人も私達の方を見る。私と結衣はお互いの顔を見て頷く。

「もちろん大歓迎です」

「あ、ありがとうございます！」

二人の表情が不安そうな顔から一転して笑顔になった。

「それでは、これからよろしく願いしますね。給仕長、この子達を頼む」

「畏まりました。お二人は明日から私の元へ来てください。給仕の仕事について学んでいただきます」

「はい！ よろしく願いします！」

「よろしく願います」

そう言つて二人は給仕長さんに頭を下げる。

「では、私はこれで失礼します」

給仕長さんは一礼してから広間を出て行つた。

「お父様、ありがとうございます」

「麗奈達の給仕係をどうしようか悩んでいたところだ。丁度良かったよ」

「あ、えつと……カイゼルさん。今の話の後で言い辛いのですが、私達はお店が完成したらそちらに住もうと思つています」

「おや、そうでしたか」

「あ、そうなの？」

「えつ、麗奈達居なくなってしまうのですか!？」

「うん。さっきも言つたけど、御世話になつてばかりだから」

「それでしたら、メルナ達にはそのお店で麗奈達と給仕をしてもらいましょう。それでいかがでしょうか」

「ありがとうございます。すみません、無理を言つて」

「お氣になさらないでください」

「それにしても、麗奈達が居なくなると寂しくなつてしまいますね

……」

エルが少し涙を浮かべている。

「今すぐじゃないから、泣くのは早いよ」

「それもそうですね。想像したらつい……」

「数日で随分と仲良くなつたみたいですね」

セリアさんが嬉しそうに微笑んでいる。

「はい、ずっと前から一緒に居た気がします。ね、結衣」

「うん、私も数日前に知り合ったばかりとは思えないよ」

「そういえば、今日はお二人が治癒の魔法を使ったと聞きました」
食事を終えた後、皆でのんびりと談笑していると、セリアさんが思い出したように言った。

「おお、そうでした。エルは怪我を治していただいたのでしたね」

「あはは……私はうまく使えなかったので、実際に治したのは麗奈だけなんですけどね」

「治癒は難しい魔法なので、うまく使えなくても仕方ありません。私も土の属性が得意なのである程度は使えますが、火の属性に少し偏っている、それほど大きな効果は得られません」

まさか、カイゼルさんにもうまく扱えない魔法だったなんて。

「私は得意属性が火なので使うことすらできませんね」

「そんなに凄い魔法だったのですね……」

「あつ、忘れていました！ お父様、麗奈の治癒の魔法なのですが、詠唱をする前に効果が現れたのです。一体どういうことなのでしょうか」

「おや、やはりそうでしたか」

「やはり、ということはカイゼルさんはご存知なのですか？」

「いえ……今朝、麗奈が湧水の魔法を使った際に少し気になっていたので。ただ、湧水の魔法は詠唱が短いため聞き逃したただけかと思っていました。しかし治癒の魔法でも、となれば間違いなさそうです」

そういえば、湧水の魔法の時も詠唱をした記憶はない。

「あなた、もしかして無詠唱魔法ではありませんか？」

「うむ、おそらくそうだろう」

「無詠唱魔法……私は聞いたことがありません」

エルが聞いたことが無いとなると、かなり珍しいものなのだろうか。

「カイゼルさん、その無詠唱魔法とは一体……」

「私も詳しいことは知らないのですが、名前の通り詠唱をせずに使う魔法のことです。古代の文献に無詠唱魔法について記されているものがあって、私もそれで読んだことしか知らないのですが、それには魔法を使うための詠唱を必要とせず、想い描き、念じることで魔法を使うことが出来るとされていました。また、無詠唱魔法は生まれ持った才能によるもので、それを使うことのできる者はごく僅かである、とも記されていました。おそらく、今生きている中で見たことのある者は居ないのではないのでしょうか。そもそも、無詠唱魔法は伝説で存在しないものだとしている文献もあったはずです」
私はカイゼルさんの話を聞いて驚いた。そんなに凄い能力があったなんて。結衣とエルも愕然としている。

「さ、さすがは麗奈だね……」

「私も麗奈にその様な才能があったとは驚きです。光属性に無詠唱魔法ですか…… 実際に見ることが出来るとは夢としか思えません」

「あはは…… 私もなんだか夢のような気がしてきました」

「うーん…… まあでも、麗奈ならなんとなく分かる気もする」

「……そう？」

「うん。なんとなく、だけどね」

「あら。あなた、もうかなり遅いですよ」

「おや、随分と長く話してしまいました。楽しい時間は経つのが早いですね」

「そうですね、私もついつい話し込んでしまいました」

それにしても本当に長く話していた。食事の時間も合わせると五時間くらい広間に居たのではないだろうか。

「では、そろそろ戻りましょうか。私も明日からはお店の準備で忙しくなりますし」

「あ、そういえばお店のこと忘れてたよ。楽しみにしてるね」

「立派なお店にしますから、期待しててください」

「それじゃあ行こうか。カイゼルさん、セリアさんお休みなさい」

「お休みなさい、ゆっくり休んでくださいね」

広間を後にした私達は部屋に戻るとすぐにベッドへ入った。今日
はいろいろな事があつたせいで疲れていたのだらう。すぐに私達を
睡魔が襲つた。

第16話 城内探検 前編

コンコン

朝、目が覚めた私達が部屋で談笑していると、扉がノックされた。

「おはようございます」

「失礼します」

入ってきたのは黒のエプロンドレスを着たメルナとカレルの二人。

「おはよ〜」

「おはようございます」

「おはよう、今日からよろしく」

二人は少し照れながら一礼すると、運んできた料理をテーブルの上に並べていく。

「それでは、何かございましたら申しつけください」

「失礼しました」

二人は入ってきた時と同様に一礼すると部屋を出て行こうとした。

「あ、待つてください」

二人をエルが呼びとめる。

「何でしょうか」

「お二人はもう朝食を済まされましたか？」

「いえ、私達はこれからです」

「でしたら、一緒に食べませんか？」

「良い考えだね。うん、一緒にたべよう」

エルの提案に結衣も賛同する。

「申し訳ございませんが、私共が皆様と食卓を共にすることはできません」

「大丈夫です——給仕長はいますか？」

エルがそいうと扉から給仕長さんが入ってきた。

「どうされましたか」

「この子達も一緒に朝食を食べます。二人の食事を持ってきてください」

「畏まりました」

少しすると給仕の方が二人の食事を運んできた。二人の前にそれを並べると部屋を出て行った。

「それでは頂きましょう」

私達は並んだ料理に手をつける。どれも美味しい。

「ん、二人ともどうしたの？」

結衣がメルナとカレルに尋ねる。二人とも料理を食べていない。

「いえ、その……こんな凄いものを食べたことが無くて……」

「あら、そうでしたか。ふふ、遠慮することはありません。どうぞ食べてください」

エルに促されて二人はコクリと頷くと手に持ったスプーンを口に運んだ。

「いかがですか？」

「美味しいですっ！」

「幸せな味です」

「二人とも大げさですよ」

エルはそう言って笑う。二人が美味しそうに食べているのを見て私達も自然と笑顔になっている。

「そういえば、エルはこの後忙しいんだよね」

「はい。立派なお店にするためにはしっかりとした準備が欠かせません」

「ありがとう。楽しみにしてるからね」

「麗奈、私達はこの後どうするの？」

「特にすることはないし……エル、何かないかな」

「それでしたらこのお城の中を見て回られてはいかがでしょう」

「あ、それいいかも」

「確かに見たこと無い場所はまだまだあるから、丁度いいね。そう

しょうか」

「それでは決まりですね」

「ところでメルナとカレルは？」

「やっぱり仕事で忙しいのかな。」

「私達はお昼まで休憩なので、特にすることはありません」

「それなら私達と一緒に回る？」

「うん、一緒に行こうよ」

「よろしいのですか？」

「もちろん。カレルも行くよね？」

「はい。よろしく願います」

そう言っただけカレルはコクンと頷いた。基本的に何か喋るのはメルナで、カレルはほとんど喋らない。ただ、喋る事が苦手というわけではないようだ。今も私が尋ねたらしつかりと答えてくれたし。

「そういえば自己紹介がまだだった。既に知っているとは思うけど一応……私は麗奈涼海ね」

「えっと、私は結衣水瀬だよ」

「では私も、エルティシア・ファン・リフィレスです」

「メルナです。麗奈様専属になりました。よろしく願います」
メルナの身長は結衣より少し低い位で、少し癖のある焦げ茶色の髪を肩まで伸ばしている。少し吊り気味のクリっとした目が特徴的だ。

「カレルです。結衣様の専属です。よろしく願います」

カレルの髪はメルナより少し明るく、長さは腰まである。目は少したれ気味で穏やかな印象を受ける。そして歳は下だが、身長はメルナよりも少し高く、結衣とほとんど変わらない。

「二人は何か趣味とかあるのかな？」

「私はお花が好きです」

「お花か、何が好きな？」

「いえ、特にこれといったものはありませんが、見てみると落ち着きます」

「お花でしたらお城の庭にたくさん咲いていますから、後で見に行かれても良いかもしれませんね」

そういえばこのお城に来た時も、立派な花壇があった。

「カレルは？」

「私は本を読むのが大好きです」

「読書とは渋い趣味だね」

「結衣、読書って渋いの？」

「あれ、渋くないかな？」

「私は渋いという印象は受けないけど……」

「私にとっては渋いんだよ。うん、そういうことにしておこう」

「読書がお好きなのでしたらお城の書庫を利用されるのが良いと思います。後で、利用できるように言っておきますので」

「本当ですかっ！？　ありがとうございます！」

カレルはそれを聞いて顔を輝かせた。いかに読書好きなのが伝わってくる。

「行くところがいっぱいできたね」

「午前中に回り切れるか少し心配だけど」

「ふふ、それでしたら早く食べ終えてしましましょう」

「それでは、行ってきますね」

「うん。よろしくね」

「行ってらっしゃいませ」

「お気をつけて」

早々に朝食を食べ終えた私達は、これから何でも屋の準備にかか
るエルと門の前で別れた。

「それじゃあ折角外に来たんだから先に庭でも見て回ろうか」

「はい！」

私達は横に並んで庭を歩いていく。

「それにしても本当に広いよね」

「うん、一体どれくらい広がるのかな」

「私達の通っている学校くらいの大きさはあるんじゃない？」

「そうなると一周するのに一時間くらいだね」

「結衣様達は学校へ行かれていますのですか？」

私達が話しているとカレルが尋ねた。

「うん、行ってるよ」

「それは凄いですね」

「うーん、特に凄いということはないと思うけど」

結衣が首を傾げる。

「そうなのですか？ 学校へ行くことが出来るのはごく一部の人だけと聞きました」

そうか、この世界だと学校は特別なものなんだ。

「えっと、私達の世界は学校へ行かなければならないと決まっているの。だから全員が学校へ行っているんだよ」

「全員が学校へ行けるのですか……」

カレルが少し寂しそうな顔をする。もしかして学校へ行きたいのかな。

「ねえカレル」

「何でしょうか、麗奈様」

「カレルは学校へ行きたいの？」

「はい、学校へ行けば共通語の読み書きや色々な事を学ぶことが出来ます。そうすれば今よりもっと多くの本が読めるようになります。私の様な者が行けるところではありませんが……」

「共通語？」

結衣が再び首を傾げる。

「ご存じありませんか？ 他国と交流する際に使われる言語です」

「そういうのがあるんだ」

「メルナはどう？ 学校へ行きたい？」

「そうですね。行くことが出来るのであれば行ってみたいとは思いますが」

「メルナも行きたいんだ——あ、結衣。あれセリアさんじゃない？」

「ほんとだ。どこか行つてたのかな」

私達が話しながら庭を歩いているとセリアさんが歩いてきた。

「セリアさん、こんにちは」

「あら、皆さんお揃いで。こんにちは。お散歩ですか？」

「はい、メルナがお花が好きらしいので」

「そうでしたか。このお城の庭は結構評判が良いのですよ。ゆっくり見てくださいね」

「は、はい。ありがとうございます」

セリアさんに話しかけられて、メルナが少し緊張している。

「ところでセリアさんは何処かへ行かれていたのですか？」

「はい、訓練所の方へ様子を見るに」

「訓練所ですか」

「そういえばまだ行かれたことはありませんでしたね。お昼からもう一度行きますが、よろしければ一緒に行かれますか？」

「お願いします。良いよね？ 結衣」

「もちろん」

「それでは、お昼に部屋でお待ちしていますね」

そう言つてセリアさんは城の方へ歩いて行つた。私達はそのまま庭を見て回る。

「いやゝ、それにしても広かつたねゝ」

気がつけば途中からメルナに続く形になっていた。話しながら歩いていたので気にはならなかったが、エルと別れた時から一時間半程経っている。

「これほど広いとは思っていなかったよ。メルナ、どうだった？」

「お花をたくさん見ることが出来て大満足です」

「それなら良かった。それじゃあ次は書庫だね」

「はい！ お願いします」

カレルは待ちきれないといった様子。

「ところで麗奈、書庫がどこにあるのか知ってるの？」

そういえば知らなかった。

「えっと、誰かに聞けば分かるよ」

「麗奈様ですね」

「はい。本を見せていただきたいのですが」

門の横に居た人に教えてもらい、書庫へ行くと司書の方に声をかけられた。

「姫様より伺っております。鍵のかかった書架のもの以外は自由に持ち出していただいて構いませんが、その際は私に一声おかけください」

「分かりました」

「それでは、また何かございましたらお呼びください」

そう言うとき司書の方は入口の横にある受付の様な場所へ腰かけた。

「えっと、どうしようか。一緒に見て回る？ それとも――」

カレルの方を見ると待ちきれないといった様子でそわそわしている。

「あはは、それじゃあ各自適当に見て回ろうか。二人はどれくらい時間あるの？」

「後一時間程です」

「なら、五十分後に此処ね」

私がそう言うときカレルはあつという間に書架の間へ消えた。メルナも司書の方に植物の本がある場所を聞いている。

「結衣、私達はどうする？」

「端から順番に見て行こうよ。どんな本があるのか気になるし」

「少し急がないと全部見て回るのは無理そうだね」

流石は王城、書庫もとても広い。一体どれだけの本が所蔵されているのだろうか。

「どうだった？ 読みたい本はあった？」

「沢山ありすぎてどれを借りようか悩んだくらいです」

そう言うカレルの手には十冊程の本が抱えられている。

「メルナも気に入った本があったみたいだね」

「はい」

カレルと比べると随分と少ないが、花の絵が描かれた表紙の本を何冊か持っていた。

「麗奈様達は何を借りられるのですか？」

カレルが私の持つ本を覗き込みながら尋ねる。

「私達はこれだよ」

そう言って私はカレルに本の表紙を見せた。

「魔法、ですか」

「うん、麗奈も私も魔法についてはほとんど知らないからね」

私達は司書の方に手続きをしてもらい書庫を出た。

「それでは私達は此処で失礼します」

「お仕事がんばってね」

「色々ありがとうございました」

書庫の前で二人と別れてから、私達は部屋に戻り昼食を食べた。

少し休んでからセリアさんの部屋へと向かう。私達が行くとカイゼルさんも一緒に居た。

第17話 城内探検 中編

「失礼します」

「ようこそ、これからセリアと訓練所を見に行かれるらしいですね」

「はい、カイゼルさんも行かれるのですか？」

「ええ、私は魔法訓練の方ですが。よろしければ後で見に来てください」

「では、行きましょうか」

「よろしく願います」

私達はカイゼルさんに挨拶をしてからセリアさんと部屋を出た。

庭へ出て暫く歩くと、朝も見かけた広場の様な所へ来た。

「これは王妃様、麗奈に結衣も」

後ろから声を掛けられて振り向くとフェルディさんが居た。

「あ、フェルディさん」

「二人にも訓練を見せたいのですが構いませんか？」

「もちろんです。これから剣技の訓練を行いますので、あちらの席でご覧になってください」

フェルディさんに案内されて、訓練所の横へ置かれた席へ座る。

「それではこれより剣技の訓練を始めます！ 王妃様も見えておられるので気を抜かずしっかりと行うように！」

フェルディさんの声で兵士の人達が一斉に剣を振り始めた。

「麗奈、す、凄い迫力だね」

結衣の言う通り気迫がひしひしと伝わってくる。

「お二人も良ければ訓練に参加してみませんか？」

「えっと、剣の訓練にですか？」

セリアさんの突然の提案に思わず聞き返してしまった

「はい、いかがでしょう」

「どうする？ 麗奈」

「うん、折角だからやってみようよ」

「それでは決まりですね——フェルディ」

「はっ、何でしょうか」

セリアさんがフェルディさんに何言か伝えた。

「畏まりました。麗奈、結衣、どうぞこちらへ」

「は、はい。よろしく願います」

結衣の動きが緊張でぎこちない。

「止め！」

フェルディさんの号令で一斉に剣が止まる。

「これより王妃様の希望で一对一の模擬戦を行う。十分後に始める。各々相手を見つけておくように」

「フェルディさん、私達剣を持ったことが無いのですが、大丈夫でしょうか？」

結衣が少し不安げな表情を浮かべながら尋ねる。

「ご心配なく。お怪我はさせません。仮に怪我なんてさせてしまった際には……」

フェルディさんはそこまで言ってセリアさんの顔を見た。

「おい、ちよつと来てくれ」

フェルディさんが近くに居た男性に声をかける。

「はっ、何でしょうか」

「こちらの二人の剣の相手をしてくれないか。お二人とも剣を持つのは初めてだ。受けるだけで構わん。くれぐれも怪我をさせることのないように」

「分かりました。お二人ともよろしく願います。剣はあちらの倉庫にある物をお使いください。剣を初めて持たれるとのことですので、軽いものを選ばれるのが良いと思います」

「分かりました。ありがとうございます」

私達は男性が指した武器倉庫へ入る。

「ふわ〜、いっぱいあるね〜」

「軽いものが良いと言ってたよね」

「軽いもの……これかな」

結衣が倉庫の中で最も細い剣を手にとった。形はレイピアに近い。
「どう？」

「剣って重いんだね……」

私も結衣と同じ剣を取る。想像していたよりも重い。一キログラム以上あるだろう。

「さつきはもつと軽そうに見えたけど、見た目より随分と重いね」
私達は選んだ剣を持って倉庫を出た。

「選ばれましたか」

「はい」

そう言って選んだ剣を男性に見せる。

「レイピアですね。最も軽い剣です。お二人にも扱いやすいと思います。それでは、こちらへどうぞ」

男性と共に地面に書かれた円形の線の中へ入る。

「そうですね、まずはそちらの方から。真ん中の線の所に立ってください」

結衣が円の中心で剣を構える。片手では重いのだろう、両手で剣を持っている。

「立会人は私が務めます」

そう言ってフェルディさんが円の脇へ立つ。

「これより模擬戦を行う——始め！」

フェルディさんの声で、訓練をしていた周りの人たちが集まってきた。結衣と男性は最初の位置で剣を構えて睨み合っている。

「どうぞ、遠慮はいりません。御好きに打ってきてください」

「は、はい。分かりました」

結衣が剣を大きく振りかぶりながら男性との間合いを詰める。

「えーいつ！」

力任せに剣を振り下ろす。剣同士がぶつかる乾いた音がした。男性は眉一つ動かさず片手で受け止めた。

「いたたっ……」

逆に剣を振った結衣がその反動で被害を受けている。それから何度も剣を振るうが全て軽く受け流された。

「はあっ……はあっ、もう駄目。休憩させて……」

「そこまでっ！」

結衣が休憩を申し出たところで試合は終わり、観戦していた人から拍手が起こる。

「結衣、お疲れ様」

「疲れたよ……」

結衣は私の所まで来ると、それだけ言っただけ椅子に座りこんだ。

「それでは次の方どうぞ」

「麗奈……がんばってね。麗奈なら一本とれると思うから」

「あはは……それはどうか。とりあえず頑張ってくるね」

男性に促されて私は円の中心へ行く。

「準備はよろしいですか？」

「はい、よろしく願います」

今まで結衣の相手をしていた男性は汗一つかいていない。

「これより第二試合を行う——始め！」

「ええいつ！」

フェルディさんの声と同時に私は地面を蹴った。男性との間合いを一気に詰め、頭上から剣を振り下ろす。

「むんっ」

しかし結衣の時と同様に男性に受け止められてしまった。一歩下がって横から斬り込む。

「くっ！」

男性がそれを受けるために剣を構える。

「はあっ！」

刹那、私は剣の向きを変え、斬り上げた。

「っ！」

「そ、そこまで！」

私の振った訓練用の刃の無い剣が男性の防具に傷をつけたところ

で勝負はついた。フェルディさんの声の後、一呼吸置いてから歓声が上がる。

「ありがとうございました」

私達は互いに一礼してから円を出た。

「さっすが麗奈！」

「えへへ、ありがとう」

「お疲れ様です。驚きましたよ。まさか麗奈が一本取るとは……」

「今回は相手の方が油断されていたので、偶然勝てただけです」

「それでも、一本取ったことは事実です。副隊長があれでは近衛隊について少し考える必要がありますね。うふふ」

「お、王妃様。それは……」

「冗談ですよ。それにしても本当に驚きました」

「隊長、彼女は剣を持つのが初めてではなかったのですか？」

「俺もそう聞いたのだが……」

フェルディさんは私の方を見る。

「本当に初めてですよ」

「とすれば、身体能力の高さと才能……ですか。王妃様、私に麗奈との手合わせを許していただけませんか」

「隊長自らですか！？」

「私は構いませんよ」

セリアさんは楽しそうに笑っている。

「ありがとうございます。麗奈、私と手合わせしていただだけませんか」

「わかりました。お手柔らかにお願いします」

「麗奈、頑張つてね！」

「ありがとう」

「隊長、お願いしますよ」

「ああ、任せておけ」

私とフェルディさんは円の中心に立った。互いに一礼し相手の目を見る。

「それではこの試合の立会人は私が務めさせていただきますね」
そう言ってセリアさんが円の横に立った。

「始め！」

セリアの掛け声と共に、麗奈が再び地を蹴る。その勢いに乗せて切り払うが、フェルディは剣を軽く動かすのみでそれを受け流した。
「やあっ！」

麗奈は一步下がりと頭上から剣を振り下ろす。

「はあっ！」

フェルディは力に任せてそれを弾き返した。麗奈は耐え切れずに仰け反ってしまう。そのまま切り払われた剣は、咄嗟に一步下がった麗奈の銅を掠めた。

「……っふう」

互いに一度距離を取り睨み合う。周りから大歓声が沸き起こった。
「本当に剣を持つのが初めてとは思えませんね。次はこちらから行かせていただきます」

そう言つとフェルディは麗奈との距離を一気に詰め、目にも留まらぬ速さの連撃で攻め立てる。

「っっ……」

剣を振ったことの無い麗奈と、近衛隊の隊長を務め、毎日訓練を行っているフェルディとではその実力の差は歴然。持つて生まれた身体能力と才能だけでは何とか受けることで精一杯だった。

「はああっ！」

何とか再び距離を取った麗奈は一步で距離を詰め渾身の力で斬り上げた。

「うおおっ！」

乾いた音が響く。麗奈の手に強烈な振動が伝わり、握られていた剣は宙を舞った。重い薙ぎ払いを受けきることができなかった麗奈

にフェルディの剣が突きつけられる。

「そこまで！」

大歓声が沸き起こった。

「はあ……はあっ……」

麗奈は息を切らせている。

「ありがとうございます。まさかこれほどとは……思わず全力を出してしまい、申し訳ございません」

そう言って手を差しだしたフェルディの頬に一筋の汗が伝った。

「麗奈、お疲れ様。凄かったよ、全然見えなかった」

試合を終えた私は結衣の横に腰を下ろす。

「申し訳ございませんでした。麗奈、お怪我はありませんか」

「はい、ありがとうございます。フェルディさんは本当に強いですね」

「毎日訓練をしていますので。それにしても、最後は私も余裕がありませんでした」

「麗奈、お見事でした。そしてフェルディ、近衛隊の意地を見せましたね」

「危ないところでしたが……麗奈が訓練を積みれば手も足もでないでしょう」

「それは言いすぎです。フェルディさん」

「どうでしょうか。麗奈、近衛隊に入りませんか？」

「ふふ、麗奈が入ってくれば私も安心ですね」

そう言っつてフェルディさんとセリアさんは笑った。

「ありがたいお話ですが、遠慮しておきます」

「それは残念です。入っていただければ麗奈に敗れた副隊長の代わりを、と思ったのですが」

「さて、それでは少し休んだら行きましょうか。あの人も待ってい

ますから」

「はい。あ、もう落ち着いたので大丈夫です」

「では行きましょうか」

「ありがとうございます」

「フェルディさんありがとうございます」

「こちらこそ手合わせしていただき、ありがとうございます。気が変わったらいつでも言ってくださいね。副隊長の座を用意しておきますので」

笑っているフェルディさんに挨拶をして私達は訓練場を出る。横で聞いていた副隊長さんは複雑な表情を浮かべていた。

第18話 城内探検 後編

「此処が魔法の訓練場です」

フェルデイさん達と別れた後、セリアさんに連れられて少し歩くと、石で造られた大きな神殿のような場所へ来た。

「何ていうか、入りづらいね……」

目の前にある、人間の力で開けることは出来ないであろう巨大な石の扉からは、結衣の言う通り厳かな雰囲気を漂わせている。

「ふふ、確かに入りやすい場所とはいえませんが」

「どうやって入るのですか？」

「この扉は魔力がある程度無ければ開けることが出来ないようになっていきます。一定以上の魔力を持っていれば此処へ手をかざすだけで開きます」

セリアさんがそう言いながら扉に刻まれた円形の模様へ手をかざすと、重い音を立てながらゆっくりと左右へ開いた。

「真っ暗……あの神殿と同じ感じがするね……」

「私達が来た場所だよ。確かクルス神殿だったかな」

セリアさんの後ろについて暗闇の中へ足を踏み入れる。私達が中に入って少しすると背中から扉の閉まる音がした。それと同時に真っ直ぐに並んだ左右の柱に灯りがついていく。

「やっぱり中也広いんだね」

「あの扉の奥で訓練をしている筈です」

セリアさんが指した灯りの先にある黒い扉の近くへ行くと、一瞬白く光り、独りでに開いた。

「あ、自動ドアだね」

「これも魔力ですか？」

「はい、近づいた者の魔力に反応して開くようになっています」

「もつと意識を集中しろ！」

私達が入ると、奥の方からカイゼルさんの怒鳴り声が聞こえてき

た。

「ふふふ、やっているみたいですね」

奥へ行くと五十メートル四方の、石で出来た舞台があり、中心にカイゼルさんが立っている。

「あなた、麗奈達をお連れしましたよ」

「おや——暫く休憩だ。休憩の後は模擬戦を行う。各々準備しておくように」

カイゼルさんはそう告げると私達の方へ来た。

「すみません。お待たせしました」

「いつものカイゼルさんと少し違ったので驚きました」

訓練を見ている時のカイゼルさんはいつもの穏やかなイメージとは異なり、気迫があった。

「おや、恥ずかしいところを見られてしまいましたね」

「いえ、そんなことありませんでしたよ。格好良かったです」

確かに結衣の言う通り格好良い。

「これから得意とする属性毎に分かれて模擬戦を行います。ゆっくり見ていってくださいね」

「はい、ありがとうございます」

「セリア、判定を手伝ってくれるか？」

「ええ、分かりました。お二人ともあちらの椅子に座っていてください」

石で出来た長椅子に私達は腰かけた。

「休憩は終了だ。風属性と土属性で模擬戦第一試合を行う。速やかに用意するように」

カイゼルさんの合図で舞台の左右に整列する。

「ふわ、皆魔法使いなんだね」

私達から見て左手に風属性の人、右手に土属性の人が並んでいる。結衣の言う通り全員魔法使いなのだろう。髪の色ですぐに分かった。人数は風属性の方が少し多い。風属性の人は十五人程、土属性の人は十人位だ。

「これより模擬戦第一試合を行う。妃にも判定を手伝ってもらおう。互いに気を抜かず全力で挑むように」

「失礼ですが国王陛下」

私達と少し離れたところに火属性と水属性の人達が座っている。

その中の深紅の髪をオールバックにした長身の男性が尋ねた。

「どうした」

「あちらに座っておられる方々は一体」

「ああ、お二人は娘の友人で私の客人だ。模擬戦を見学してもらおうと思っています」

「……そうですか」

その男性はそう言って再び椅子に腰を下ろした。少し不満そうに感じたのは気のせいだろうか。

「では、これより模擬戦第一試合を行う——始め！」

『大気よ、烈風となれ！』

風属性チームの人達が一齐に詠唱する。突然風が吹き始め、鋭利な刃と化した風が土属性チームの人に襲いかかった。

『大地よ、隆起せよ！』

土属性チームの男性が一人、一歩前に出て詠唱する。地響きと共に、地面から土の壁が現れ、烈風から身を守った。

『灼熱の大地よ総てを飲み込め』

男性の後ろで他の人達が詠唱を終えた。空気の温度が一気に上昇し、地面が割れ溶岩が噴き出した。それは波となり風属性チームへ押し寄せる。風属性チームの人も詠唱をしているが間に合いそうにない。

『土壁』

溶岩が風属性チームの人へ襲いかかるという時、溶岩の波はカイゼルさんの出した土の壁に阻まれた。

「そこまで！ 土属性側の勝利とする！」

舞台の上から風属性と土属性のチームの人達が降りる。カイゼルさんが何言か詠唱すると、壊された舞台が元通りになった。

「凄かったね……思わず手に汗握ったよ」

「私も見入っていたよ。……あ、次の試合が始まるみたいだね」

舞台の左手に火属性チーム、右手に水属性チームの人達が上がった。火属性チームは人数が少ない。メンバーは先程のオールバックの男性を加えて三人。対する水属性チームは風属性チームよりも更に多く二十人程居る。

「麗奈はどっちが勝つと思う？」

魔法に人数が関係するのか分からないが、自然に考えると多勢に無勢、水属性チームが勝つと思う。

「うーん、人数から見て水属性チームじゃないかな」

「やっぱりそうだね」

「これより模擬戦第二試合を行う——始め！」

カイゼルさんの声で両チーム共一斉に詠唱を始める。

『水よ！』

『今、此处に在りし水よ、我が意に従え！』

水属性チームの人が二つの魔法を詠唱した。

「麗奈、あの魔法って」

「うん、エルが使っていたよね」

湧水の魔法によりそれまで何も無かった空間に膨大な量の水が現れる。従水の魔法でその場に留まっているが、一度それが解かれると堰を切ったように辺りを押し流すだろう。

「眼前の敵を飲み込め！」

その膨大な量の水が轟音をあげながら火属性チームへと迫る。

『炎よ、壁となり我が身を守れ！』

迫りくる水を炎の壁が次々と蒸発させていく。オールバックの男性だけは後ろに一步下がりに詠唱を続け、その前方に立つ二人がやや押されながらもその壁を維持している。

『解！』

突然聞こえた声に私達は水属性チームの方へ視線を向ける。

「えっ」

結衣が思わず声をあげる。

それまで従水の魔法によって支えられていた水はその力を失い一斉に流れだした。水は当然のように私達の方へも押し寄せる。

——胸に着けた景玉が光り輝く。私の周りだけ穴が開いたように水は来なかった。

「助かった……ドキツとしたよ」

「景玉に助けられたね」

水の勢いも収まり、私達が一息ついていると突如、空気の温度が跳ね上がった。目の前に巨大な火の玉が浮かんでいる。

『焼き尽くせ』

オールバックの男性がそう言った瞬間、温度はさらに上昇した。尋常ではない熱量を持った火の玉はそのまま水属性チームへ向かって穏やかに落ちていく。

『今、此処に在りし水よ、我が意に従え！』

咄嗟に従水の魔法を詠唱し、辺りの水をその火の玉へとぶつけるが圧倒的な熱量によって一瞬のうちに蒸発させられた。

「そこまで！」

カイゼルさんの声と同時に火の玉も消える。

「火属性側の勝利とする」

「ふふ、さすがですね」

セリアさんは笑っている。

「フラムス、見事だ」

「ありがとうございます」

フラムスと呼ばれたオールバックの男性は頭を下げた。

「あの人、フラムスさんって言うんだ。強かったね」

「うん、一枚上手といった感じだね」

「この後はチームを組み模擬戦を行う。得意とする属性は問わない。試合までに二組に分かれておくように」

「国王陛下」

フラムスさんが尋ねる。

「陛下の客人であるあちらの御二方は参加されないのですか」

「特に考えてはいないが……どうした」

「戦わせていただけませんか。金と青の髪、御二方とも魔法使いなのでしょう。是非とも一度御手合わせを」

「ふむ……しかし、二人とも魔法による戦闘はほとんど経験したことが無い。日々訓練をしている御前達とまともに戦うことはできないだろう」

「あなた、それはどうか分かりませんよ」

「セリア、それはどういことだ」

「先程、剣の訓練場で麗奈とフェルデイが試合をしたのですが、フェルデイが全力を出してしまっ程いい勝負をしていました」

「それは本当か！ ああのフェルデイに全力を出させるとは……面白いかもしれんな——麗奈、結衣」

私達はカイゼルさんに呼ばれて舞台の上上がる。

「なんでしょう」

「どうしたんですか？」

「お二人にお願いがあるのです。このフラムスと試合をしていただけませんか。どうしてもお二人と試合をしたいと言っているのです」
「構いませんが私達は魔法をほとんど知らないので、相手になるかどうか……」

「危ない時は私とセリアがお守りしますのでお願いできませんか」

「分かりました。結衣、良いよね？」

「うん、オッケーだよ」

「ありがとうございます」

「お二人ともよろしくお願いします」

フラムスさんがお辞儀をする。

「よろしく願います」

「それでは、これより予定を変更してフラムスとこちらのお二人で試合を行う。他の者はしっかりと目で学ぶように——私の合図で試合開始です。あちらに並んでください」

カイゼルさんに従い、フラムスさんと距離を取って、私達は横に並んだ。

「始め！」

「麗奈、どうすればいいのかな」

「さつきしていたみたいに、水を出してそれをぶつければいいんじゃないかな」

「うん、やってみるね」

私達がそうして話している間、フラムスさんは何もせずにこちらを見ている。

『水よ！』

結衣が詠唱した。何もない空間にグラス一杯程の水が現れる。

『今、此処に在りし水よ、我が意に従え！』

ゆっくりと水が浮かび上がり、結衣が突き出した手の前で止まった。

「えいつ！」

結衣の声と同時に水がフラムスさんへ向けて動き出す。少しずつスピードは上がっていき、自転車程の速度でフラムスさんに水の玉が当たった。

「どうつ？ 効いた？」

結衣が魔法を使っている間閉じていた目を開く。

「うーん、フラムスさんの服は濡れたけど……」

「その程度ですか？ 先程の試合で水から身を守ったのを見て、期待していたのですが……」

がっかりしたような声でフラムスさんが言う。

『炎よ！』

フラムスさんの手の上に小さな火球が現れた。

「これを耐えることが出来ますか？」

火球が結衣へ放たれる。私は咄嗟に結衣の前に立つ。

「どうやら気のせいではなかったようですね」

フラムスさんの放った火球は私の景玉によってかき消された。

「それなら、これはいかがですか？」

『灼熱の炎よ、総てを焼き払え！』

詠唱と同時にフラムスさんが手を振り払う。突如現れた炎が私達に襲いかかった。

「きゃっ！」

結衣は咄嗟に頭を抱えてしゃがみこむ。襲いかかった炎は再び景玉によって消え去ったが、炎が当たった場所が少し熱かった。今よりも強力な攻撃であれば景玉だけでは耐えられないだろう。

「どうやら、相手にとって不足はないようです。小手調べは終わりにしましょう。行きますよ！」

空気が変わる。それまで感じなかった威圧感が体を突く。

「結衣、大丈夫？」

「何とか。もう一回やってみるね」

『水よ。今、此処に在りし水よ、我が意に従え！』

コツをつかんだのか、先ほどよりも速い速度で水の玉がフラムスさんに向かって飛んでいく。

『燃え盛る炎、その熱を以て、大地を焦土とせよ』

先程までとは比べ物にならない熱を帯びた炎が地面を這って襲いかかってくる。途中、結衣の放った水の玉は一瞬にして蒸発させられた。

景玉ではおそらく耐えられない。私は咄嗟に手を突き出していた。薄い壁の様なものが私の前に現れる。それに炎がぶつかり、私の体に衝撃が走った。

「くっ！」

炎に押され、徐々に後ろへ下がる、それと共に炎も少しずつ弱まってくる。一メートル程下がったところで、炎が消えた。

「守ってばかりでは、どうにもなりませんよ」

『燃え盛る炎、その熱を以て、大地を焦土とせよ』

再び私達に炎が襲いかかる。先よりも強い。

『水よ！』

『水よ！』

結衣に合わせて私も詠唱する。グラス一杯程の水が一瞬にして膨れ上がった。お風呂の水くらいはあるだろう。

『今、此処に在りし水よ、我が意に従え！』

従水の魔法でそれを炎へぶつける。水は全て蒸発したが、炎の勢いが弱まった。私の足元に襲いかかった炎は景玉によって弾かれる。

「ごめん、麗奈。ちょっと……限界、かも」

結衣が座りこんでしまった。魔法で魔力を使い過ぎたのだろう。

「大丈夫。結衣は休んで」

『水よ。今、此処に在りし水よ、我が意に従え！』

私の出した水が一筋の線となってフラムスさんに飛んでいく。

『灼熱の炎よ、総てを焼き払え！』

しかし、フラムスさんの出した炎によって阻まれてしまった。

「その程度の魔法では駄目ですね。これで終わりにしましょう」

『灼熱の炎を司りし炎の精よ、その力を具現せし蒼き焰よ、我が求めに応え、総てを塵灰と化せ！』

フラムスさんの体を覆うようにして蒼色の焰が現れた。途端、焼け付くような空気に呼吸が苦しくなる。フラムスさんが手を振り、焰がゆつくりと、地面を溶かしながら迫ってくる。

フラムスさんがサツと手を振り払った。一瞬にして速度をあげた焰は矢のように私へ突き進んでくる。

『水よ！』

水を出し、そして手を突き出して身を守る。水は瞬く間に消え、焰は私にぶつかった。先程よりも遥かに大きな衝撃が全身に走る。魔力の壁に当たった焰は周囲にその熱をばら撒く。それは後ろで座り込んでいた結衣にも襲いかかった。

「つつ！」

「結衣っ！」

結衣の声が聞こえた瞬間、結衣の周りを土の壁が囲んだ。

指輪が光を放つ。蒼色の焰は一瞬にして消え去った。

「おお……」

「まあ……」

「……おい、冗談だろ」

フラムスさんの声を最後に私は意識を失った。

第19話 覚醒

あれ……此処は一体……。

気がつくとも光が一切ない暗闇の中に居た。何とも不思議な空間。上下の感覚も無く、自分が立っているのか浮いているのかすら分からない。ただ、不思議と恐怖はなく、心は落ち着いている。

「魔力を使い過ぎちゃいましたね」

急に声がした。

「誰？」

暗闇に向かって問いかける。

「初めまして……ですね」

声と同時に暗闇の中へ一人の少女が浮かび上がった。大きな透き通るような目と、踵まである綺麗な銀色の髪が印象的だ。少女はその澄んだ瞳を私に向けると、あどけなさの残る顔に笑みを浮かべた。

「リニ……アス……？」

「はい」

「此処は何処？」

「貴女……麗奈の心の中ですよ」

「私の心の中……」

「私は麗奈が私の封印を解いたときから、麗奈のことを見ていました」

「私の中にリニアスが居たの？」

「はい。麗奈に私の魔力を預けるかどうか、それを見極めるために麗奈は今、魔力が底をつき意識を失っています」

そうだ。私はフラムスさんと模擬戦をしていて、そして……。

「私の力は強大であるがゆえに、使い方によっては非常に危険なものになります。そのため、私は全ての力を渡しても問題ないかどうか、これまでの麗奈を見てきました」

そして確信しました。麗奈であれば私の力を預けても大丈夫でし

よう。

これから私の力の全てを麗奈にお渡しします。目を閉じてください」

リニアスに言われた通り私は目を瞑った。

「じつとしていてくださいね。すぐに終わりますから」

リニアスの吐息が私の顔に当たる。

……っん！

唇を柔らかな感触が包む。同時に何か熱いものが私の中へ流れ込む感じがした。それは数秒で終わり、唇を包んでいた感触も一緒に消えた。

「もう開けていいですよ」

私が目を開けると元居た位置にリニアスが頬を染めて立っていた。

「これで私の力をすべて使うことが出来ます。これまで麗奈が使っていた魔力はごく一部です。これから余程のことでもない限り、今回のように魔力が底をつき意識を失うことも無いでしょう」

「本当に私で良かったの？」

「はい。私の目に狂いが無ければ麗奈以上の人はいないでしょう。封印を解いてくれたのが麗奈で本当に良かったです」

「ありがとうございます」

「これで以上です。麗奈は私よりも遥かに魔法の才能があります。きつと想像もできない様な魔法も使えるでしょう」

リニアスは私に背を向ける。

「消えちゃうの？」

「いいえ、私は麗奈の心の中に居ます。何かありましたら心の中で私を呼んでください」

「分かった」

「あ、でも、なにも無くても時々話しかけてくれると嬉しいです」
そう言っリニアスは少し振り返り、笑みを浮かべた。そしてリニアスの姿が少しずつ消えていく。

「……奈っ！」

うん……結衣の声？

「……麗奈っ！」

「ん……結衣？」

「あ、気がついた！？」

気がつくとも私達の部屋のベッドに居た。同時に、涙を浮かべた結衣が私に抱きついてくる。

「良かった……いきなり倒れてそれで、ずっと気を失ってて、いくら呼んでも気がつかなくて……」

結衣の目が随分と赤くなっている。きっと私の意識が戻るまでも、心配して泣き続けていたのと思う。

「心配させてごめん。私のせいで結衣を泣かせてしまった……」
「ううん、気がついて本当に良かった」

私が結衣の頭を撫でてあげていると、次第に嗚咽が聞こえなくなった。その代わりに私の腕の中から穏やかな寝息が聞こえてくる。ずっと泣いていたから泣き疲れたのだろう。

ガチャ

そのまま少しすると扉が開いた。

「麗奈っ！ よかった……麗奈が倒れたと聞いて、心配していました」

入ってきたのはエルで、私に気がつくとはっと胸をなで下ろした。
「心配してくれてありがとう」

エルの目にも泣いた跡があった。随分と心配してくれたのだろう。
「もし、意識が戻らなかつたらどうしようかと……」

「心配させてしまつてごめん」

「本当に良かったです。あ、お父様とお母様に伝えてきます！」

そう言つとエルは急いで部屋を出て行った。エルがお城の中で走っているのを初めて気がする。それにしても一体どれくらいの間意

識を失っていたのだろう。ふと窓の外を見ると随分と暗くなっていた。

暫くすると、エルがカイゼルさんとセリアさんと共に戻ってきた。「麗奈の意識が戻ってホッとなりました。私の配慮が至らなかったばかりに、このような事になってしまつて……」

「私達が模擬戦を提案しなければ、誠に申し訳ございませんでした」カイゼルさんとセリアさんはそう言つて頭を下げる。

「いえ、模擬戦を承諾したのは私ですから、気にしないでください」
「ありがとうございます。それにしても驚きました。麗奈がフラムスの魔法をかき消したと思えば急に倒れて……」

確かフラムスさんの魔法がきて……。

「あつ！ そういえばカイゼルさん！ 結衣は大丈夫でしたか！？」
「ああ、それに関しては誠に申し訳ございませんでした。私の対応が遅れたばかりに結衣に怪我をさせてしまつて……。少し火傷をしていましたが、あの後すぐに治療しました。綺麗に治っている筈です」

良かった……。

「そうでしたか。安心しました」

「本当にすみませんでした。それにしても一体何があつたのでしょうか。ただの魔力の消耗であればこんなにも長く意識を失っていることは無いはずなのですが……」

「そうだ、私は一体どれくらいの間意識を失っていたのでしょうか」
「そうですね……およそ十時間程です」

カイゼルさんは時間を確認してから言つた。

「十時間……そんなにも長く……。実は、意識を失っている間にリニアスに会いました」

「何と！ あのリニアスにですか！？」

結衣が一瞬、体を動かす。

「ああ、申し訳ございません。つい驚いてしまつて」

カイゼルさんは声を少し小さくして言った。

「それにしても、リニアスと会ったというのはどうということなのでしょうか。お父様、何かご存知ですか？」

「いや、私にも分からない。セリアは何か知っているか」

「いえ、私にも分かりません」

「ふむ……麗奈、よろしければ詳しくお聞かせいただけませんか？」

「はい。私が倒れたのは――」

「あなた、今日はもう遅いですから、それに麗奈も未だ回復しきつてはいない筈です。また明日にしましょう」

「おお、気がつかず申し訳ございません。それでは、私達はこれで失礼します。朝は少し遅くするよう伝えておきますから、ゆっくりと休んでください」

「はい、ありがとうございます」

「今日は本当に申し訳ございませんでした。それでは」

カイゼルさんとセリアさんはもう一度頭を下げてから部屋を出て行った。

「セリアさんが言った通り、まだ回復していないみたい。随分と長い間寝ていたみたいけど、また眠くなってきたよ」

「私も安心したら急に疲れが出てきました」

「エル、心配してくれて本当にありがとう」

エルは服を脱ぐとベッドへ入ってきた。本当にずっと心配してくれていたのだろう、すぐに寝息が聞こえてきた。私も二人の温もりを感じながら目を閉じた。

第20話 魔力

「あら、起きたみたいですネ」

私が目を覚ました時には、ベッドに二人の姿はなく、二人は机でアンベルを飲みながら談笑していた。

「おはよう。今何時位かな？」

「えーっと、今は十一時だよ」

昨日倒れた時からだとすると、随分と長い時間寝ていたことになる。相当疲れていたのだろう。

「私達が起きてても、麗奈はピクリとも動きませんでしたから、やはり随分とお疲れだったようですネ」

「それにしても、麗奈が元気になって本当によかったよ。昨日はもし目が覚めなかったらどうしようかと心配で仕方なかったんだよ」

「心配掛けてごめんね」

「ふふ、元通り回復したのですから良いではありませんか」

「それもそうだね」

「麗奈、お腹は空いていますか？」

「うん、ずっと何も食べていなかったから、もうペコペコだよ」

「そういえばそうでしたネ。では、朝食にいたしましょう。私達もかなり前からお腹が空いているのです」

暫くするとメルナとカレルによって朝食が運ばれて来た。今日も私達と一緒に朝食を食べても良いらしく、自分たちの分の料理も持ってきていた。

「実は今日の朝食は私達が作ったのですが、いかがでしょうか？」

私達が一口目を口に運んだのを見てからメルナが尋ねた。

「あ、そうなんだ。とっても美味しいよ」

「そうですね。お二人には料理の才能があるのではないのでしょうか」

「えへへ、ありがとうございます」

「お口に合わなかったらどうしようかと心配で……」

二人は本当に緊張していた様で、私達の感想を聞いてからようやく自分たちの手を動かし始めた。

二人の作った朝食が美味しかった上に、私達のお腹が空いていたため、あつという間に朝食を平らげた。

「そういえば、皆さまに国王陛下より言伝を預かっております」

食後、ゆっくりしているとカレルが少し緊張した様子で口を開いた。

「お父様から？ 一体なんでしょう」

「リニアスの件で聞きたいことがあります。お時間のあるときで構いませんので、部屋まで来ていただけないでしょうか。このことです」

「ああ、そういえば昨日は話さずに寝たんだった」

「カレルが畏まって言うから、私まで緊張しちゃったよ」

「私も一体何があったのかと心配してしまいました」

「あ……申し訳ございません。言伝を預かることが初めてで、間違えないようにしないと、と思うと緊張してしまつて……」

「大丈夫だよ。しっかりと伝わったから」

「うふふ、そうですね。おそらく一言一句間違えていないのではないのでしょうか。幾分か口調も似ていた気がします」

エルの言葉に皆が笑い、カレルは少し恥ずかしそうにしている。

「それじゃあどうする？ これから行く？」

「私はそれでいいと思うけど、特にこれから予定があるわけでもないし」

「実は私も皆さまにお話ししたいことがあるのです」

「あ、そうなんだ。それじゃあ今から行こっか」

結衣に続いて、カイゼルさんの部屋に向かう。さすがにフェレウス城にも慣れた。迷うことなくカイゼルさんの部屋へ着いた。

コンコン

「どうぞ」

結衣が扉をノックするとカイゼルさんの声が聞こえた。

「失礼します」

「おお、結衣達でしたか。お待ちしておりました。どうぞお座りください」

カイゼルさんに促されて私達はソファに座る。メルナとカレルは私達の横に立ち、カイゼルさんは向かい側に腰かけた。

「おや、もう来られていたんですね」

隣の部屋からセリアさんが出てきた。カイゼルさんの横に座る。

「昨日はご心配をおかけして申し訳ございませんでした」

「いえ、麗奈が悪いわけではありません。頭をあげてください」

「私達こそ、このようなことになるとは思っておらず、本当に申し訳ないことをしてしまいました」

そう言ってカイゼルさんは頭を下げる。

「模擬戦は私も承知のことですから、お気になさらないください」

「ありがとうございます」

「それで、リニアスの件なのですが」

「おお。確か昨日、麗奈はリニアスに会ったと……」

カイゼルさんは身乗り出す。

「はい。気を失っている間に、私の心の中でリニアスに会いました」

「心の中……ですか」

「リニアスは——」

私が意識を失っている間のことを説明すると、カイゼルさんは非常に驚いていた。

「話が真実であるとすれば、今の麗奈はこれまでよりも更に強大な魔力を扱えるということになりますね」

「そうだと思います。試してみたことが無いので何とも言えませんが、リニアスによると余程のことが無い限り魔力の消耗で意識を失うようなことは無いそうです」

「一体どれほどの魔力なのか私には想像もつきません。しかし、リニアスが自身よりも才能があると言った程です。それは膨大な魔力なのでしょう。少し怖いですが、どれほどのものなのか見てみたい気がします」

「麗奈、試しに何か魔法を使ってみたらどう？ 私もちよっと見てみたいな」

結衣はそう言って顔を輝かせる。横でエルもウンウンと頷いている。

「えっと……それじゃあ何か使ってみようかな。私も気になるし」
「それでしたら、少しお待ちください」

セリアさんは席を立つと隣の部屋からグラスを持ってきた。

「このグラスに湧水の魔法を使ってみてください」
「分かりました」

私は目の前に置かれたグラスへ手をかざし、グラスに水が入った様子を思い浮かべる。

『水よ』

詠唱と同時にグラスに水が湧いた。

「うーん、特に変わった気はしないけど……」

「そうですね。私ももっと水が溢れるかと思っていました」

二人とも想像とは少し違っていた様で首を傾げている。

「魔力は変わっていないということでしょうか」

私が尋ねるとカイゼルさんは首を横に振った。

「いえ、水の量だけが魔力の強さではありません。セリア、炎を出してくれるか」

「はい」

『炎よ』

セリアさんの手のひらに炎が現れる。

「エル、湧水の魔法でこの炎を消してみなさい」

「分かりました」

エルがセリアさんの手のひらへ手をかざす。

『水よ』

詠唱と同時に現れた水は、炎を完全に消し去ることはできず、その勢いを少し弱めただけで、全て蒸発してしまった。

「やはり私の魔力では、まだお母様には及びません……あつ」

「そういうことです。麗奈、そのグラスを貸していただけますか」
「はい」

私は水の入ったグラスをカイゼルさんに渡す。

「セリア、もう一度頼む」

『炎よ』

再びセリアさんの手のひらに炎が現れた。

「見ていてくださいね」

そう言ってカイゼルさんはグラスを傾けた。グラスから水が零れる。ジュツという音と共にセリアさんの手のひらの炎は消えた。

「おお！ まさかこれほどとは」

カイゼルさんが驚きの声をあげる。

「そんなに凄いことなんですか？」

結衣は特に驚いた様子も無くカイゼルさんに尋ねる。

「ええ、セリアは魔法使いの中でもかなり強力な魔力を持っています。そして得意な属性は火、そのセリアの出した炎を湧水の魔法で消すことが出来る人物は数えるほどしかないのではないのでしょうか」

「そんなに凄いんだ……流石は麗奈だね！」

「ふふ、こんなに簡単に消されてしまうとなれば、私もさらに鍛錬しなくてはなりませんね」

「あはは……」

私は何と返せばいいのか分からず、とりあえず苦笑を浮かべた。

「さて、今日はお時間をありがとうございました。リニアスについ

て知ることでもできましたし、麗奈の魔力も見ることができました。御礼を言わせていただきます」

そう言ってカイゼルさんは席を立とうとする。

「あ、お父様」

「どうした、エル」

「お話したいことがあるのです」

そういえば何か話があると言っていた。一体なんだろう。

「ふむ、一体なんだ」

カイゼルさんは上げた腰を再び下ろした。

「麗奈達のお店の件ですが、よさそうな場所が見つかりました」

「本当っ！？」

私と結衣は思わず身を乗り出す。

「おお、それは良かった。それで場所は何処なんだ？」

「はい、先日言っていた通り、商業区で良さそうな土地がありました。商業区の中でも居住区に近い場所ですから、麗奈達の希望に答えられると思います」

「居住区の近くか……ふむ、良い場所ではないか」

カイゼルさんは頷きながらそう言った。

「さすがはエルだね」

「エル、ありがとう。まさかこんなに早く見つかるなんて」

「えへへ、少しがんばりました」

エルは笑みを浮かべる。

「麗奈、どんな所か楽しみだね」

「そうだね。エルが探してくれたんだから、良いところなのは間違いないと思うけど」

「そこで、この後なのですが、一度その場所を見ていただきたいのです。そしてお二人がよろしければお店の手配をいたしますので」

「あ、そうなんだ。すぐに行くの？」

「ええ。特に何も無いようであれば。その場所までは少しかかりますから」

「私達はいつでも大丈夫だよ、麗奈」

「うん、ウィッグさえ貸してくれば」

「麗奈の髪は目立ちますからね」

そう言っでセリアさんが笑う。

「ウィッグの準備は出来ています。と言っても、持ってきてもらっただけです。あ、メルナとカレルもついてきていただけますか」

急に話しかけられて二人は一瞬体をビクツとさせた。

「私達も、ですか？」

「ええ、お二人の家になる可能性がある場所ですから。午後のお仕事は休みにするよう給仕長にも伝えてあります」

「そういうことでしたら、喜んで御供させていただきます」

自分たちの家になるかも知れない、と言っるところで二人は少し喜色を浮かべた。

「エルの言っ通りこの時間は人通りも多く、馬車でも一時間くらいはかかります。すぐにも行かれた方が良いでしょう」

「それじゃあ行こうか」

「うん、楽しみだね」

「馬車を門の前に待たせてあります。メルナ達も準備があると思っますので、十五分後にそこで待ち合わせしましょう」

「分かりました。それでは失礼させていただきます」

二人は頭を下げた部屋から出て行った。嬉しそうな顔をしていた様に見えたのは気のせいではないだろう。

「ではお父様、お母様、行っで参りますね」

「ああ、行ってきなさい」

「気をつけるですよ」

「はい、フェルディに護衛を頼んでありますから大丈夫です」

「それじゃあ行こうっ」

カイゼルさんの部屋を出た私達は、目を隠すためのサングラスを取りに一度部屋へ戻っってから馬車へ向かった。ウィッグは途中で給仕の人が持ってきてくれた。

第21話 何でも屋開業準備1

「お待ちしておりました。本日も護衛を務めさせていただきます。どうぞ、お乗りください」

城門へ行くと既にフェルディさんが待っていた。メルナとカレルも行くからだろう。いつもより少し大きめの馬車に私達は乗り込んだ。

「実はこの馬車、使うのは今回が初めてなんですよ」

「あ、そうなんだ」

「はい、先月出来たばかりです。乗り心地もいつもより良いと思いますよ」

「それは楽しみだね」

確かにいつもの馬車よりも中のクッションがふかふかしている。

少しすると二人がやって来た。いつものエプロンドレスではなく白と紺の落ち着いたワンピースを着ている。

「お待たせして申し訳ございません」

「うっん、そんなに待っていないから大丈夫だよ」

「それでは動きますよ」

二人が乗り込んだのを確認して、フェルディさんは馬車を走らせた。

「二人ともその服可愛いね」

「ありがとうございます」

「給仕長が用意してくれていました」

「そうなんだ。良く似合ってるよ」

結衣の言葉に二人は顔を赤くする。

「あ、そういうえは二人も魔法は使えるんだよね？」

カイゼルさんが、魔法は誰でも使えると言っていた。

「あ、はい。私もカレルも魔法使いである皆様程ではありませんが、

簡単な魔法は使えます」

「どんな魔法が使えるの？」

「小さな火をおこしたり、グラスに水を入れるくらいなら出来ます」

「水って、もしかして湧水の魔法？」

「そうです」

「どんな時に使うの？」

「そういえば、私も麗奈も訓練以外では戦闘でしか使ったことがないね」

「どんな時……えっと、のどが渴いたとき、でしょうか」

「お料理の時にも使いますよ。私とメルナが食べる料理なんかには湧水の魔法で出した水を使っています」

「あ、そっか、普通に水がほしい時に使えばいいんだ」

「あれ？ でも二人が食べる料理には、ということは私達の料理には使っていないの？」

何か理由でもあるのだろうか。

「あ、それはおそらく私も食べるからだと思います」

「はい、その通りです」

「ん、エルが食べるから？」

「私は別に構わないのですが、古くからの慣習ですね。湧水の魔法によって出された水を、王家の者が食べる料理に使ってはならないとされているのです。単純に自然に湧き出た水の方が美味しいからなのかもしれません」

「へえ、そんなのがあるんだ」

「それにしても、火をおこしたり水を出せたりするなら料理も楽だね」

「結衣、私達も今度何か作ってみようか」

「ふふ、お二人の料理楽しみにしていますね」

適当に雑談していると、馬車の揺れが止まった。どうやら着いたらしい。

「長い間お疲れさまでした。到着いたしました」

フェルディさんが扉を開けてくれる。流石に長時間座っていたから疲れた。私達は馬車から下りて伸びをする。馬車は通りに面した空き地に止まっていた。通りには多くの人が行き交っている。

「うゝんっ、ふいゝ。さすがに疲れたよゝ。さて、それじゃ早速お店を出す場所を見に行こうっ」

結衣が通りに向けて歩きだす。

「ここですよ」

「へ？」

「ここがお二人のお店を出す場所です」

結衣が歩き出そうとした体勢のまま硬直している。

「えーっと、私達が今居るここ？」

私も思わず聞き返す。

「はい、そうです」

私達が居るこの空き地はとても広い。分かりやすく言えばとてもなく広い。

「随分と広いけど、どこからどの辺りまでなの？」

「その角から、あちらの角までです」

「それって、もしかしてこれ全部ってこと？」

「そうですね」

結衣の質問にエルはサラッと言う。

「エル、これはいくらなんでも広すぎないかな？」

サッカーフィールド位の大きさがある気がする。

「お、大きいねゝっ！」

結衣が思わず声をあげる。

「ねえエル、いくらなんでもこれは広すぎないかな？」

メルナとカレルの二人もあまりの広さに放心状態になっている。

「そんなことはありません。麗奈達がお店を出すのですよ。狭い位です」

「そ、そうかな？ そんなことないと思うけど……」

やっぱり私達とは感覚が違うのだろうか。

「あ、もしかしてお気に召しませんでしたか……？」

エルがハツとした表情を浮かべてから、悲しそうな顔をする。

「そ、そんなことないよ。ただ、思っていたよりも広がったから驚いただけで。人通りも多いし、お店をするにはもってこいの場所じゃないかな」

「そうですね？ それなら良いのですが。それでは、この付近を案内いたしますね」

「お願い」

私達はエルに続いて通りを歩く。

「この通りを東に進めばすぐに居住区へ入ります。西へずっと歩いて行くと先日麗奈達といった通りに出ます」

「この辺りは飲食店が多いね」

通りに面したテラスで多くの人が食事をしている。

「はい、飲食店や宿屋等が並んでいます。今回の場所も元はレストランと宿屋があったところですよ。他に、馬の乗り継ぎや荷物を預かってくれる施設もあります。麗奈達がお店を出す場所の向かい側にある建物がそうですね」

「うん、人通りが多くて雰囲気も良いし、お店を出すにはとても良い場所だね。ね、結衣」

「うん、私もそう思うよ」

「そう言っていたけると嬉しいです。頑張って探した甲斐がありました」

「二人はどうか？」

メルナとカレルを見る。

「驚きで言葉ありませんが、とっても素敵な場所だと思います」

「周りのお店を見ていたらお腹が空いてきました」

「うふふ。では、そろそろ戻りましょうか。今日中にどのようなお店にするか決める必要がありますから、あまり時間はありません」

フェルディさんの待つ馬車へ戻った私達は、お城へ戻るまでの間、終始お店のことについて話していた。話中に夢中になりすぎて、フェルディさんが扉を開くまで着いたことに気付かなかった。

「それでは、メルナとカレルはお仕事が終わったら部屋まで来てくださいね」

「分かりました」

「失礼いたします」

「それじゃあ、私達も戻ろうか」

門の前で、二人と別れて私達は部屋に戻った。そのままお風呂に入って、夕食を食べる。

コンコン

食後、私達はアンベルを飲みつつ談笑していると、扉がノックされ、メルナとカレルの二人が入ってきた。

「失礼します」

「お待たせいたしました」

「お仕事はもう終わったの？」

「はい、全て終わりました」

「お疲れ様。二人も座って」

メルナとカレルが私達の向かい側に座る。

「さて、それでは始めましょう。こちらの紙に書いたものを基にして設計していただきますので、皆さんの希望を含めて書いてください」

エルが大きな紙を机の上に広げる。

「そういうのは結衣が得意だよ」

「それなら結衣、お願いできますか」

「うん、任せて。まずは大雑把な間取りからだね」

「あ、言っていないませんでしたが一階建てです」

「それなら一階からだね。お店の場所をどこにするか、だけど」
「それはやっぱり正面じゃないかな」

「お店は正面ね。後は玄関とキッチンとそしてお手洗いに……」
「書こうとしたところで結衣の手が止まる。」

「どうしたの？ 結衣」

「いや、文字が分からなくて」

「あ、そうか。それなら私が代わりに書くよ。リニアスのおかげだ
と思うけど、私は文字も書けるから」

「ごめん、よろしく」

「まかせて」

「間取りは私が書くから、説明とかをお願い」
「そう言って結衣が紙の上に線を引いていく。」

「一階はとりあえずこんな感じかな。随分と空間が余ったけど……」
「紙の半分以上が白いまま残っている。」

「それに関しては、設計の際に調整してもらいますので」

「それじゃあ、気にしなくていいのかな。と、なると次は二階だね。
二階にはそれぞれの部屋と、後は何かな？」

「リビングも欲しいな」

「リビングは広めにして、当然お手洗いも——」

「結衣が書いていくのを見てみるとそれぞれの部屋がとても広い。
それでも余白がたくさんあるのだから本当に広いのだと実感する。」

「よし、間取りはこんなところかな」

「後は内装ですな」

「それじゃあ結衣、交代するよ」

「ペンを受け取り、結衣が書いた間取りにキッチンやお店等それぞ
れの名称を書き入れていく。」

「うーん、麗奈が書いている間に内装を決めておこうか。メルナと
カレルは何か希望ある？ 二人の家でもあるんだから、遠慮はいら
ないよ」

「私たちの家……ですか」

「うん、二人も家族だもん」

「麗奈と結衣の家族……私もなりたいです」

「エルは公務もあるだろうし、そうはいかないよ」

「それはそうですが……」

私の言葉に寂しそうな顔をする。

「その代わりいつでも遊びに来てくれていいから。もちろん私たちも遊びに行くし」

「毎日でも行きます！」

「いや、流石に毎日は厳しいんじゃないかな」

そう言って結衣が苦笑する。

「うん、名前は書けたよ。それで、二人はどんな部屋が良いのかな？」

「えっと……ベッドとかカーテンはピンク色が良いです」

「私は……あ！ 本棚が沢山欲しいです」

「結衣は何か希望ある？」

「私は白い大きなソファが欲しいな」

「ふふ、結衣らしいですね」

「えへへ、そうかな」

「メルナがピンクを基調とした部屋で、カレルが本棚ね。そして結衣が白いソファで——よしっ」

「そういえば、麗奈の部屋はどうするの？」

「うーん、私の部屋は落ち着いた感じにしようかな。ああ、モノトーンにするよ」

自分の部屋に説明を加える。

「それじゃあ後はお店だね。どんな感じにするの？」

「やっぱり落ち着いた雰囲気がいいな。ところどころに観葉植物を置いて、床は石で壁は木に——」

お店になる予定の場所が文字で埋まっていく。

「よし、出来たっ」

私は伸びをしてペンを置いた。

「お疲れ様です。では、明日にでも設計者の方にお渡ししておきます」

「うん、お願い」

「今から楽しみだね」

「そうだね、待ち遠しいよ」

「私もどういったお店になるのか楽しみです」

「そう言いながらエルは紙を巻いていく。」

「お二人もありがとうございます。本来なら仕事の後でのんびりする時間なのに……」

「いえ、とても楽しかったです」

「十分のんびり出来ました」

「メルナとカレルは笑みを浮かべる。」

「さて、それじゃあそろそろ寝ようか。随分と話しこんでしまったし」

「気がつかない間にかなりの時間が経っていた。」

「では、私達は失礼いたします」

「メルナとカレルが席を立つ。」

「二人とも、お休み」

「はい。お休みなさいませ」

二人は頭を下げて部屋を出て行った。相当眠たかったのだろう。扉を閉める時に目を擦っているのが見えた。

「あ、そういえばエル」

「いつも通り服を脱いだ後、皆でベッドに入ってから私は尋ねた。」

「何でしょう」

「お店はどれくらいで完成するのかな？」

「可能な限り急がせますが、二週間はかかると思います」

「えっ、二週間で出来るの!？」

結衣がびっくりしている。私も驚いた。これだけの広さの建物が二週間で出来るなんて。

「はい、国を挙げて建てますので」

「いや、そこまでしてもらわなくてもいいけど……」

「そういうわけにはいきません。なにせ麗奈達のお店ですから
私は思わず苦笑する。

「二週間か……」

「どうかしたのですか？」

「うん、実は一度戻ろうかと思ってるの」

「あ、そうなの？」

「えっ！？ 麗奈達、帰ってしまうのですか？」

「うん、暫く戻ってないし、持ってきたい物とかもあるから」

「確かに、ずっと帰って無いね」

「だから、一度戻ろうかなって」

「そんな……寂しいです……」

エルが少し涙を浮かべている。

「すぐに戻ってくるから大丈夫だよ」

「そうですか……。では、いつ頃戻られるのですか……？」

「カイゼルさんとセリアさんに言ってからの方がいいと思うから、
明日の午前中かな」

「分かりました。必ず戻ってきてくださいね」

「もちろんだよ。お店も出来るんだから、それまでには戻ってくる
よ。ね、結衣」

「うん。私もエルと会えないのは寂しいし」

「私も……お二人と会えないのは……寂しいです」

そう言って泣いてしまったエルを私は抱きよせる。そのまま頭を
撫でてあげていると、いつの間にか嗚咽が寝息に代わっていた。結
衣も寝たのだろう。背中から寝息が聞こえる。私は二人の温もりに
包まれながら瞼が落ちるのを感じた。

第22話 一時帰宅

朝、いつものように朝食を済ませた後、私達はカイゼルさんの部屋へ来た。今日、一度元の世界へ帰ることを伝えるためだ。食事の際にメルナとカレルの二人にもそのことを話したが、二人はとても寂しそうにしていた。

「失礼します」

「おや、おはようございます。皆さんお揃いでどうされましたか」
「実は、お伝えすることがあるのです」

「何でしょう。ああ、どうぞお座りください」

いつものソファに腰掛ける。カイゼルさんも向かい側に座った。
「それで、話というのは」

「はい、一度元の世界へ帰ろうかと思っているのです」

私の言葉を聞いてカイゼルさんは一瞬だけ驚いた表情をしたが、すぐにいつもの穏やかな顔に戻った。

「……そうですか。それは寂しくなりますね。いえ、麗奈達が他の世界から来ている以上、こういうことがあるのは分かっていました。それで、いつ頃帰られるのですか」

「それなのですが、帰る前に挨拶をしておこうと思い、伺わせていただきました」

「なるほど。それではこの後、すぐに帰られるのですね」

「はい、突然で申し訳ございません」

「麗奈達が元の世界へ帰るのは当然のことです。お気になさらないでください。それに、またこちらへも来ていただけるのですよね」

「もちろんです。ご迷惑かもしれませんが、お店が完成するまでに戻ってくるつもりです」

「そんな！ 迷惑だなんてとんでもありません」

私の言葉にエルが声をあげる。

「エル、ありがとう」

「いつでも遠慮なく来てくださいね」

「エルがこう言っています。私も同じです。お二人が居るだけでこの城も明るくなります。迷惑だなんてことは決してありません」

「そう言っていたけると嬉しいです」

「ところで、セリアさんは居られないのでしょうか。セリアさんにも一度挨拶をしておきたちと思っっているのですが」

「すみません、セリアは今朝早くに公務で隣国へ行ってしまうしました。数日は戻らないので、私からお伝えしておきます」

「そうでしたか、それではよろしくお伝えください」

「はい、確かに伝えておきます」

「それでは、慌ただしくて申し訳ありませんが、一度帰らせていただきます。長い間お世話になりました」

「とても楽しかったです。本当にありがとうございました」

「いえ、また御越しになる日を楽しみにしております」

私達は頭を下げてからカイゼルさんの部屋を出た。

「結衣、忘れ物は無い？」

「うん、リュック一つだけだからね」

一度部屋へ戻った私達は、それぞれのリュックへ荷物を詰め込んだ。

「よし、それじゃあ行こうか」

「オッケー」

「やっぱり寂しいです……」

荷物を整理している時までには大丈夫そうだったエルも、再び涙を浮かべている。

「またすぐに戻ってくるから」

「うん、すぐに会えるよ。あ、そうだ」

結衣は背負ったリュックを一度下ろすと、中からポテトチップスの袋を取り出した。

「おやつに持って来たけど食べなかったから、良かったら食べてよ」

「これは……？」

「私達の世界のお菓子だよ。袋を開ければそのまま食べられるから」
「ありがとうございます。大切に食べさせて頂きますね」

エルはポテトチップスの袋を結衣から受け取ると、大事そうに抱きかかえた。

「あはは、それは私達の世界では特に珍しいものでもないから、遠慮なく食べちゃっていいんだよ」

今にもポテトチップスが割れてしまいそうなくらいに抱きしめているエルを見て結衣は笑う。

「分かりました。お父様とお母様と一緒に頂きますね。あ、メルナとカレルも忘れてはいけませんね」

「また持つてくるよ」

「そうだね、何かお土産でも持つてくるから、期待していてね」

「本当ですかっ！ 楽しみにしていますね」

エルはとてもうれしそうな顔でそう言った。

「うん、必ず持つてくるよ。それじゃあ結衣、行こうか」

「エル、少しの間だけど……またね」

「はい、寂しいですが、頑張ってお待ちしております。お店は任せておいてください」

「ありがとうございます。それじゃあ……あっ！」

エルに言おうと思っていたことを忘れていた。

「どうされましたか？」

「エルに言うことがあったんだ」

「何でしょうか」

「うん、実はね——」

「なるほど……分かりました。そういうことでしたらお任せください。何とかいたします」

「ありがとうございます。さて、それじゃあ今度こそ帰るね」
結衣と手をつなぐ。

「エル、またね」

「お店の完成までには必ず戻ってくるからね。じゃあ結衣、行くよ」
『RETURN』

景色が一瞬にして変わり、私の家の玄関へと戻ってきた。そのまま二階へ上がり、私の部屋へ行く。

「帰って来たね」

結衣がベッドに腰をおろし、伸びをする。

「久しぶりに自分の家に帰ってきた気がするよ。数日しか向こうに居なかったのに」

「私も、もうずっとエルと一緒に居た気がする」

「そうだね。さて、確か今日は日曜日だけど、これからどうする？」

「お昼前か、さっき向こうで朝ごはん食べたからお腹は空いていないし、どこか行く？」

結衣が時計を確認してから言った。

「どこ行こうか」

「あ、そうだ。帰ってきていきなりだけど、エルに持っていくお土産でも買いに行こうよ」

「あ、それいいかも。そうしようか」

「何が良いかな」

二人で悩んでいると携帯電話が鳴った。

「あ、麗奈、鳴ってるよ」

「ごめん、ちよっと待っててね」

私は机の上で振動している携帯電話を手に取り、ディスプレイに表示されている名前を確認する。

「あ、陽香ちゃんからだ」

「はい、涼海です」

「あ、涼海さん？ 木観だよ」

「うん、どうしたの？」

「実は今日暇なんだけど、良かつたら遊ばない？」

「ちよっと待ってね。」

結衣、陽香ちゃんも一緒に、いいよね」

「うん、勿論だよ」

「あ、ごめん。今日これから結衣と一緒にショッピングに行くんだけど、それでも良ければ」

「ショッピング？ 行く行く」

「それじゃあ、私の家に来てくれるかな？ 着いたらチャイム鳴らして」

「オッケー、準備したら行くね」

「うん、待ってるね」

「なんて？」

「うん、準備したら来るって」

「折角だから陽香ちゃんにも選んでもらおう」

「そうだね。そうしよう」

ピンポン

電話から三十分程して、チャイムが鳴った。

「あ、来たみたいだよ」

「それじゃあ行こうか」

私達は荷物を持って外へ出る。

「こんにちは、お待たせ」

「木観さん、こんにちは」

「こんにちは。買い物だけど、何処へ行くの？」

「駅前のショッピングモールかな。あそこなら色々売ってると思うから」

私達は駅の方へ向って歩き出す。

「それにしても二人ともイメチェンしたんだね。それもかなり大胆

に」

「あ」

私と結衣は思わず声を出してしまった。髪の色が変わったままだ
ということ忘れていた。

「えっと、イメチェンしたんだけど、どう？ 変かな？」

「ううん、とても似合っていると思うよ。ただ、二人とも随分と派
手な色だから少し驚いたけど。麗奈のその目はカラーコンタクト？」

「うん。そうだよ……あ、光って無い？」

「え？ 何が？」

どうやら光は見えないらしい。何故かは分からないけど、助かっ
た。光を放つ銀色の髪と目、では言い訳出来ないだろう。

「あ、気にしないで。こっちの話」

「ん？ ああ、ところで今日は何か買う物はあるの？」

「それなんだけど、女の子にプレゼントする物を見に行こうと思っ
て」

「そうなんだ」

「木観さんも一緒に選んでくれないかな」

「喜んで。プレゼントとか選ぶのは好きだから任せておいて」

「ふふ、それは良かった。頼りにしてるね」

三人で雑談をしながら二十分程歩くと、看板が見えてきた。此処
は昨年出来たばかりのショッピングモールで、中には映画館やボー
リング場もある。さすがに休日だけあって、多くの人で賑わって
いる。

「それにしても、私達目立ってるね……」

「あはは……まあ、仕方ないね」

「それで、どんな物にするかある程度は決まってるの？」

「ううん、まだ何も決まって無いの」

「私達と同じ位の子なんだけど、木観さん何か無いかな？」

「アクセサリーとかどうかな？」

エルにアクセサリー……喜んでくれるとは思っけど、お姫様だから沢山持っている気がする。

「アクセサリーは結構持つて思うから、他にした方が良いかも」「うーん、そうなると服も持つてそうだし……」

「あ、服にしようよ。こっちの服は持つてないだろうし。どうかな、麗奈」

「うん、良いんじゃないかな。服にしよう」

「もしかして外国の子？」

「あ、うん。そんな感じ」

「そうなんだ。その子はどんな服が好きなの？」

「どうだろう、普段は落ち着いた服が多いけど、どんな服でも似合うと思う」

「それじゃあ、私がよく行くお店があるから、そこに行ってみようよ」

「オッケー」

「いやゝ、随分と見て回ったねゝ」

五時間ほどかけてお店を見て回ったが、結局最初のお店で殆ど揃えた。結衣の手には綺麗に包装された、服の入った紙袋がある。

「今日は陽香ちゃんのおかげで、良い服が買えたよ。ありがとう」

「私も楽しかったよ。誰かの服を考えるの好きだし」

「この後どうする？ ご飯でも食べる？ 今日は選ぶのを手伝ってくれたし、何か御馳走するよ」

「ほんとっ？ うーん、じゃあお言葉に甘えようかな」

「うん、何が食べたい？」

「それじゃああそこが良いかな。此処の四階にあるビュッフェなんだけど、前から一度行ってみたかったんだ」

「あ、それって自然食材だけを使っているところだよな？」

「そうそう、水瀬さんは行ったことあるの？」

「ううん、私も一度行ってみようと思ってたんだよ」

「ふふ、なら決まりだね」

私達はエスカレーターを上がり、レストラン街にある自然食ビュッフェのお店に入った。

「休日だからもっと並ぶかと思っていただけ、意外とすぐに入れたね」

「まあ、まだ六時前だからね」

三人で好きな物を取り、席に着く。陽香ちゃんはバランス良く料理を入れている。私と結衣は野菜を中心に取った。

「それじゃあ、いただきます」

「うん、遠慮なく食べてね。ビュッフェだし」

「あはは、そうだね」

それから三人で、今日の買い物のことや高校について話しながら、一時間程食事をしていた。その頃になると並ぶ人も増えてきたので、お会計を済ませて店を出た。

「涼海さん、ご馳走さま」

「ううん、今日はありがとうね」

「いやゝ、おいしかったね」

和食好きの結衣にとっては、好みの料理が多くあったみたいだ。

「それじゃあ帰ろうか」

「涼海さん、水瀬さん、またねっ」

「ばいばい、陽香ちゃん」

「またね」

家の前で陽香ちゃんと別れた後、私達はシャワーで汗を流してから部屋でのんびりしている。

「今日は木観さんのおかげで良い服が見つかったね」

「そうだね。帰りに寄った靴屋さんで合いそうなブーツも見つかったし、エルの喜ぶ顔が楽しみだね」

「それにしても、木観さんに髪のことを言われた時はドキツとしたよ」

「あはは……これからは気をつけないといけないね。そういえば、陽香ちゃんには私の髪は光って見えないみたいだけど、魔法が関係しているのかな」

「そうかもしれないね。あつ、そういえばどうなんだろう」
「ん、何が？」

「魔法だよ。こっちでも使えるのかな？」

「試してみようか。もし使えたら凄いことだけど……」

「それじゃあグラス持つてくるね！」

「そう言つて結衣は、一階からグラスを一つ持つてきた。」

「はい、麗奈」

「それじゃあ、やってみるね」

結衣から受け取ったグラスに手をかざす。

『水よ！』

一瞬にしてグラスに水が満たされる。

「使えたね……」

「使えちゃったね」

まさか本当に使えるとは思っていなかった。

「うーん、魔法使いか、実在したんだね……」

「もしかしたら、マジシャンの人は魔法使いなのかもしれないね」

「あはは、そうかも」

「そういえば、明日は学校だね」

「うん。あ、髪の色どうしよう……」

「あ、さすがにこのままはまずいよね」

今日も一日中注目を集めていた。

「染める？」

「どうなんだろう。染めて戻るのかな？ あ、そうだ。リニアスに聞いてみるね」

「そういえばリニアスと話せるんだったね」

「うん」

「ねえ、リニアス」

「はい。髪の色、ですよね」

「うん、何とかならないかな？」

「染める、というのは色素をどうにかするということですよ。おそらく、それは効果がありません」

「何か方法は無いの？」

「そうですね……これに関してはどうすることも……もしかすると、魔法で何とか出来るのかもしれませんが、私はそう言った魔法を知りませんし……」

「そっか……ありがとう」

「いえ、お役に立てず申し訳ありません。よろしければまた話しかけてくださいね」

「うん、またね」

「どう？」

「駄目みたい。魔法でも無理だつて」

「つまり、このまま？」

「うん」

「あはは……目立つね……」

「ウィッグでもかぶる？」

「あ、そっか。うん、麗奈みたいにウィッグにすれば問題ないね」

「丁度良いウィッグがあれば、けどね」

「さすがにウィッグは持って無いよ……。麗奈はあるの？ 向こうから持ってきた？」

「いや、持って帰ってきてても金色だから使えないと思うけど——あ、そうしよう」

考えれば、わざわざ学校へ行く必要はない。

「どうしたの？ 麗奈」

「ほら、学校に行かなければいいんだよ」

「え？」

「だから、向こうに行ってしまえば問題はないでしょ？」

「あ、そうか」

「うん。向こうでウィッグも用意しておけば、今度戻って来た時も大丈夫だし」

「それじゃあ、いつ行く？」

「うーん、一度寝たらすぐに行こうか。エルも寂しがっているだろうし」

「なら、明日の朝出発だね。どうする？ もう寝る？」

「うん、そうしようか」

「明日の準備だけ済ませておくね」

私達は今朝持つて帰ってきたばかりのリュックに再び荷物を詰めた。

「それじゃあ、お休みなさい」

「お休み」

一緒にベッドへ入り、明かりを消す。結衣を抱き枕にしていると、心地よい眠気が襲ってきた。

第23話 再会

昨日、ベッドに入るのが早過ぎた私たちは、いつもより随分と早く目が覚めた。外はまだ薄暗い。

「おはよう、結衣」

「おはよう。こんなに早起したのは久しぶりだよ」

「どうする？ 朝ごはんにする？」

「うーん、起きたばかりだから、もう少し後の方がいいな」

「それなら、何か飲み物でも淹れようか」

「うん、ミルクティーがいいな」

とりあえずベッドから出た後、服を着て一階に下りた。洗面所で顔を洗い、私はキッチンでお湯を沸かす。結衣はソファに座ってポットとしているようだ。

「甘い方がいいよね？」

「あ、うん、思い切り甘くしてね」

結衣の返事を聞いて、角砂糖を二つほど増やす。

「お待たせ」

ガラスのローテーブルに飲み物を置き、結衣の隣へ座った。

「ありがとう」

結衣がカップを口へ運ぶ。

「どう？ さすがに甘過ぎたかな……？」

「ううん、とても美味しいよ」

結衣の笑顔を見る限り、その心配は杞憂だったようだ。

「よかった」

「ねえ、麗奈」

結衣がカップを置くと同時に口を開く。

「どうしたの？」

「えへへ、なんでかな。今、とても落ち着いているの」

どうやら私と同じことを思っていたみたいだ。

「私もだよ。夜明け前だから、かな」

私の言葉に結衣は小さく微笑む。カップを置く音が心地よく、暫くの間、私たちは互いに静寂を楽しんでいた。

「ねえ麗奈」

「なあに？ 結衣」

結衣がゆっくりとした動作で私の方を向き、一呼吸置いてから沈黙を破った。

「私達、いつまでこうしているのかな」

結衣がのんびりとした口調で言う。

「……朝食の用意でもしようか」

「うんっ」

私たちは同時にサッと立ち上がると、それまでが嘘のようにテキパキと朝食の準備を始めた。

朝食の後、片づけを終えて時計を見ると既に七時を過ぎていた。外もしつかりと明るくなっている。

「そろそろ行こうか」

リュックの中身を確認していた結衣に声をかける。

「そうだね。エルも待ちくたびれてるよ」

「まだ一日も経ってないけどね。きっと驚くよ」

私たちはリュックを背負う。

「靴は持った？」

「うん、ばっちりだよ。もちろんお土産もね」

結衣がプレゼントの入った紙袋を持ちあげて言う。

「それじゃあ行くよ」

結衣の肩を持ち詠唱する。

『TO DISSIMILAR WORLD LEAD ME』

一瞬にして景色が変わり、私たちはフェレウス城のカイゼルさんの部屋に出た。

「カイゼルさん、いないみたいだね」

「そうだね。とりあえず部屋に行こうか。エルがいるかもしれないし」

誰もいない部屋を後にして、私たちの部屋へと向かう。

「麗奈！ 結衣！」

扉を開けると、私たちの姿を確認したエルが一呼吸置いた後、ものすごい勢いで抱きついてきた。目には涙を浮かべている。

「エルってば、まだ一日しかたっていないのに大げさだよ」

「二週間、ずっと待っていました。もしかしたらもう帰ってこないのではないかと……」

「え？」

「ん？」

「あら？」

私たちの頭上に一斉にはてなマークが浮かぶ。

「エル、私たちが戻ってから、どれくらい経っているの？」

「麗奈たちが帰ってから、今日で丁度二週間になります」

いつの間にかエルも泣き止んでいる。

「麗奈、私達は一日しか経っていないよね？」

「そうなのですか！？ 私はてつきり、お二人はもう戻ってこないのではないかと思っていました」

エルは再び泣きそうになっている。

「そんなことあるわけないじゃない。ねえ、麗奈。それにしても、一体どうなっているのかな？」

「おそらく……だけど、私たちの世界とこっちの世界では時間の進む速度が違うんじゃないかな。どうしてなのかはわからないけど」

「それじゃあ、私たちの世界の一日はこっちの世界だと大体二週間位になるんだね」

結衣は腕を組んで頷いている。

「そうみたいだね」

「それでは、お二人にとっては一日しか経っていないのですか!？」
エルが驚きの表情を浮かべる。

「そうだよ。ね? 麗奈」

「うん」

私と結衣は頷く。

「そんな……ずるいです! どんなに寂しかったか……」

エルの瞳に浮かんた涙が今にも溢れそうになっている。

「ごめんね。あ、そうだ。結衣、あれ出して」

「あれ? ああ、あれね」

「エル、お詫びとは少し違うけど……」

「はいこれ、お土産だよ」

結衣が紙袋をエルに差しだす。途端、エルの顔が驚きに変わり、
そして直ぐに喜びの表情になった。

「私に、ですか!？」

「うん、私と結衣からプレゼントだよ。気に入ってくれと良いけど……」

「開けても良いですか?」

「もちろん」

私がそう言うと、エルが物凄い勢いで包みを開いていく。

「これは、服……ですか?」

「うん、私達の世界のね」

「ありがとうございます! 大切にしますね」

「あ、後これも」

結衣がもう一つの紙袋を渡す。

「これは……わあっ、靴ですね! 良いんですか? こんなに頂いて……」

「いつも良くしてもらっている御礼だよ。だから遠慮しないで」

「そんな、良くしてもらっているのは 私の方です。本当にありが

とうございます」

「喜んでもらえたみたいで良かったね、麗奈」

「うん。あ、そうだ。エル、良かったら着てみて、きつと似合うと思うよ」

「はい。あ、着方を教えてもらえますか？」

「どう……ですか？ おかしくありませんか？」

結衣に手伝ってもらい着替えを終えたエルが、恐る恐るといった様子で尋ねる。

「そんなことないよね？ 麗奈」

白のロングカーディガンに黒のキャミソール、モスグリーンのミニスカートと白のブーツ、完璧なまでに似合っている。

「とっても良く似合っているよ」

「そ、そうですか？」

そう言ったエルは満更でもない様子で、鏡の前に立って色々とポーズを決めている。

「そういえば、お二人が来たことをお父様に伝えておかなくてはいいけませんね」

暫く鏡の前に立って満足したエルが私達の方を向いて言った。

「さつき、部屋に行ったけどカイゼルさん居なかったよ」

「はい、お父様は公務で少し出られているので、お昼頃には戻ってくるはずですよ」

「あ、そうなんだ」

「それじゃあ、カイゼルさんが戻ってくるまでゆっくりしてよっか」

「そうですね。実は、お二人にお話したいことが山ほどあるので」

「あ、もしかして、お店のこと？」

「はい！ あ、今飲み物を用意させますね。お二人ともアンベルで良いですか？」

「うん」

エルは給仕の人にアンベルを三つ持ってくるように言つとソファに座った。私達も向かい側に座る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9208s/>

剣と魔法と何でも屋

2011年12月2日07時56分発行